岡山城三之外曲輪跡

旧岡山藩藩学跡

－岡山市立岡山中央中学校校舎改築に伴う発掘調査－

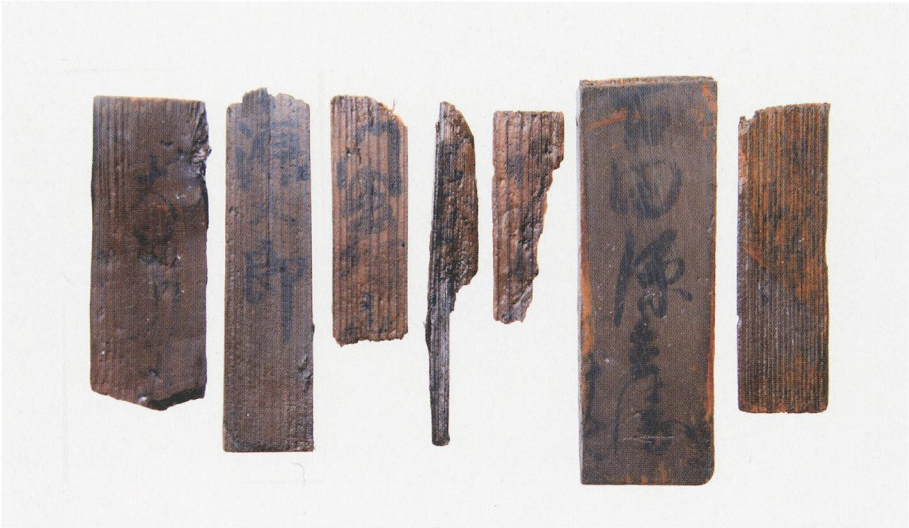
２００８

岡山市教育委員会

第２次調査区全景（近世遺構面1 ～ 3）

戦災ゴミ穴出土ガラス瓶類

SD320 出土陶器
（織部碗・第 144 図 16）



SP250・SE255 出土
名札・付け札類

SP334 出土炉壁

岡山城三之外曲輪跡
旧岡山藩藩学跡

－岡山市立岡山中央中学校校舎改築に伴う発掘調査－

２００８

岡山市教育委員会

序

岡山藩主池田光政公は、国を治める上で教育の力を非常に重要視し、全国に先駆けて藩学、手習所、閑谷学校を設立するなど、文教政策に力を入れた名君と言われております。

このたび報告します、岡山城三之外曲輪の一画は、光政公により岡山藩藩学が造営された場所であります。岡山藩藩学は寛文九年(1669)に設立された、全国でも最も古い藩学校で、藩士の師弟ばかりでなく庶民にも門戸が開かれ、藩士の長子の入学を義務制にするなど極めて先進的な制度を備えておりました。この地は現在も、岡山市立岡山中央中学校として教育の場であり続けておりますが、明治維新や戦災を経て、藩学の面影を伝えるものは、校庭の南に残された泮池だけとなってしまいました。発掘調査は広大な藩学の敷地のうちわずかな範囲にすぎませんが、藩学の様子を窺い知る重要な成果を上げることができました。

戦後の教育が転換点にきている今日、こうした教育の先進地を受け継ぐわたしどもとしましても、先人の名に恥じない教育を進めていきたいと考えております。

最後になりましたが、この報告が岡山城や岡山藩藩学の理解に少しでも役立つのであれば幸いに存じます。

平成20年 3月31日

岡山市教育委員会

教育長　山 根　文 男

例　言

1，この報告書は、岡山市教育委員会文化財課・岡山市埋蔵文化財センターが実施した、市立岡山中央中学校の整備に伴う発掘調査の報告書である。

2，市立岡山中央中学校は岡山市蕃山町6-10に所在し、「岡山城三之外曲輪跡」の範囲内となっている。また、校庭の一部は国史跡「旧岡山藩藩学跡」に指定されている。

3，発掘調査は北校舎建設に伴い平成15年(2003)3月8日から9月24日まで(第1次調査)、体育館・特別教室棟建設に伴い平成18年(2006)11月13日から平成19年(2007)10月31日まで(第2次調査)実施した。

4，この報告書の作成は岡山市教育委員会文化財課　岡山市埋蔵文化財センターが実施した。執筆分担は次の通りである。
第1章　田嶋正憲
第2章第1節、第2節、第3章　神谷正義
第2章第3節、第4章、第5章、第6章、付章1　安川　満
付章2　安倉清博

5，遺物の実測及びトレースは、石井亜希子、片山理子、延原経子、日原けさ子、森　圭子、山元尚子が行った。
遺物の写真撮影及び本書の編集は安川が行った。

6，動物遺存体についてはその同定、分析を富岡直人(岡山理科大学准教授)に依頼し、その成果は第7章として掲載した。

7，この報告書において用いている高度値は標高(東京湾の平均海水面、TP)である。

8，この報告書において用いている方位は第3章は磁北、ほかは座標北である。

9，この報告書で報告した遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会で保管している。

10，本書の著作権は岡山市及び、岡山市教育委員会に属する。

目　次

第１章　位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　1　地理的環境 1
　2　歴史的環境 2
　3　岡山城の発達と調査地点の変遷 4
第２章　調査の経緯と概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
　1　調査に至る経緯 9
　2　第１次調査の経過と概要 10
　3　第２次調査の経過と概要 13
第３章　第１次調査(北校舎調査区) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　1　調査区の基本層序 17
　2　近現代 22
　　a)校舎基礎 22
　　b)その他の遺構 22
　3　近世 25
　　a)遺構面の概要 25
　　b)近世遺構面Ⅰ 25
　　c)近世遺構面Ⅱ 34
　　d)近世遺構面のまとめ 70
　4　中世以前 71
　　a)中世 71
　　b)古代 71
　　c)弥生～古墳 73
　5　まとめ 75
第４章　第２次調査(体育館･特別教室棟調査区) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
　1　調査区の概要と土層堆積状況 81
　　a)調査区の概要と土層断面の状況 81
　　b)土層堆積状況 81
　2　近代以降 87
　　a)遺構面の概要 87
　　b)遺構と遺物 88
　　c)小結－検出遺構と近現代の学校施設－ 96
　3　近世遺構面１・２ 100
　　a)遺構面の概要 100
　　b)調査区北半の遺構と出土遺物 101
　　c)調査区南半の遺構と出土遺物 114
　　d)小結 145
　4　近世遺構面３ 146
　　a)遺構面の概要 146

b)遺構と出土遺物 146
c)小結－藩学以前の調査区周辺－ 180
5 古代遺構面 184
a)遺構面の概要 184
b)遺構と出土遺物 184
c)小結 187
6 弥生・古墳遺構面 188
a)遺構面の概要 188
b)遺構と出土遺物 189
c)小結－大形土坑の性格－ 196
第5章 まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
1 岡山藩藩学の変遷と検出遺構 203
2 SP250・SE255出土の名札、付け札について 208
第6章 史跡旧岡山藩藩学跡泮池について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 210
1 藩学跡の概要 210
2 藩学跡泮池の測量・実測 212
3 まとめ－絵図に見る泮池と現状－ 216
第7章 岡山城三之外曲輪跡出土の動物遺存体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217
1 資料とその出土状況 217
2 出土動物遺存体の特徴 217
付章1 旧岡山市立旭中学校円筒校舎について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 225
はじめに 225
1 円筒(円形)校舎について 225
2 旧岡山市立旭中学校円筒校舎の概要 227
付章2 岡山県女子師範学校の記憶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 233
はじめに 233
1 女子師範学校での生活 233
a)入学 233
b)生徒とクラス 235
c)建物(校舎・寄宿舎) 235
d)授業 236
e)学校生活 237
f)制服・服装 239
g)勤労奉仕 240
h)寄宿舎の生活 241
i)校医・病室 246
j)在学中の待遇 246
2 訓導(教師)になって 246

写真図版
報告書抄録

挿図一覧

第１図　岡山城三之外曲輪跡の位置　1
第２図　調査地点の位置と周辺の遺跡（1/25,000）　3
第３図　岡山城三之外曲輪(北部)と調査地点(1/2,500)　6
第４図　発掘調査区の配置(1/800)　9
第５図　試掘坑土層柱状図(1/40)　10
第６図　グリッドの設定状況(1/400)　11
第７図　弥生～古墳時代包含層出土遺物(1/4)　18
第８図　土層１・２・３(1/80)　19～20
第９図　土層４・５(1/80)　21
第10図　近現代の遺構(1/400)　22
第11図　その他の遺構(1/60)　23
第12図　井戸３(1/40)と出土遺物(1/4・1/6)　24
第13図　道・側溝・溝２と柱列(1/200)　24
第14図　近世遺構面Ⅰ(1/200)　26
第15図　道状遺構(1/80)と断面(1/40)　27
第16図　側溝と柱列(1/100)と柱穴(1/50)　29
第17図　溝２(1/80・1/40)　30
第18図　溝２出土遺物(1/3)　31
第19図　溝２出土瓦刻印拓影(1/1)　31
第20図　P28(1/40)　32
第21図　P68(1/60)と出土遺物(1/3)　32
第22図　土錘出土状況(1/20)　32
第23図　近世遺構面Ⅱ(1/200)　33
第24図　井戸４(1/40)と出土木製品(1/4)　34
第25図　井戸４出土遺物(1/3)　35
第26図　井戸４周辺柱列(1/40)　36
第27図　井戸５(1/40)　37
第28図　P21a(1/60)と下層出土遺物(1/3・1/4)　38
第29図　P21a上層出土遺物1(1/3)　39
第30図　P21a上層出土遺物2(1/3)　40
第31図　P21a上層出土遺物3(1/3)　41
第32図　P21a上層出土遺物4(1/3)　42
第33図　P21b(1/40)と出土遺物(1/3)　43
第34図　P29・P29b(1/60)とP29b出土遺物(1/3)　44
第35図　P29出土遺物(1/3)　45
第36図　P90(1/40)と下層出土遺物(1/3)　46
第37図　P90上層出土遺物1(1/3・1/4)　47
第38図　P90上層出土遺物2(1/3)　48
第39図　P90上層出土遺物3(1/3)　49
第40図　P150(1/80)と出土遺物(1/3)　50
第41図　P164(1/60)と下層出土遺物(1/3・1/4)　51
第42図　P164上層出土遺物(1/3)　52
第43図　P184(1/60)と出土遺物(1/3)　53
第44図　P192(1/40)と出土遺物(1/2・1/3)　54
第45図　P198(1/40)と出土遺物(1/3)　55
第46図　P199(1/40)と出土遺物1(1/3)　56
第47図　P199出土遺物2(1/3)　57
第48図　P200a・d・e(1/80)　58
第49図　P200a出土遺物1(1/3)　59
第50図　P200a出土遺物2(1/3・1/4)　60

第51図　P200a出土遺物3(1/3)　61
第52図　P200a出土遺物4(1/3)　62
第53図　P200a出土遺物5(1/3)　63
第54図　P201(1/40)と出土遺物(1/3)　64
第55図　P203(1/40)と出土遺物(1/3)　65
第56図　P210(1/60)と出土遺物(1/3)　66
第57図　P216(1/60)と出土遺物(1/3)　67
第58図　P217(1/40)と出土遺物(1/3)　68
第59図　P219(1/40)と出土遺物(1/3)　69
第60図　P230(1/40)と出土遺物(1/3)　70
第61図　中世畦畔(1/40)　71
第62図　中世畦畔と古代溝群(1/400)　72
第63図　古代溝群土層断面(1/80)　72
第64図　古代溝群出土遺物(1/3)　73
第65図　弥生～古墳時代(1/400)　73
第66図　弥生～古墳時代溝群土層断面(1/80)　74
第67図　弥生～古墳時代　井戸・土坑(1/40)　74
第68図　弥生～古墳時代出土遺物(1/2・1/3)　75
第69図　土層断面の位置(1/400)　81
第70図　発掘区土層断面(1/80)　83～84
第71図　近現代の遺構(1/200)　87
第72図　池状遺構(1/50)　89
第73図　SP263(女子師範学校便槽)(1/20)　89
第74図　戦災ゴミ穴出土遺物1(1/3)　90
第75図　戦災ゴミ穴出土遺物2(1/3)　91
第76図　戦災ゴミ穴出土遺物3(1/3)　92
第77図　戦災ゴミ穴出土遺物4(1/3)　93
第78図　戦災ゴミ穴出土遺物5(1/3)　94
第79図　SD002出土遺物(1/3)　94
第80図　SD002(1/60)　95
第81図　現代撹乱・包含層出土遺物1(1/3)　97
第82図　現代撹乱・包含層出土遺物2(1/3・1/4)　98
第83図　岡山県女子師範学校建物配置図(岡山県女子師範学校発行『記念誌』1932より)　99
第84図　近世遺構面１・２(1/200)　100
第85図　礎石跡・礎石基礎地行の類型　101
第86図　礎石跡・礎石基礎地行掘方・柱穴群(1/120)　102
第87図　礎石跡等の分布(1/400)　103
第88図　礎石建物１(1/60)　105～106
第89図　岡山藩藩学絵図と調査範囲（『岡山市史　宗教教育編』から)　107
第90図　礎石建物１(SP122)出土遺物(1/3)　107
第91図　道路遺構(1/60)　108
第92図　道路遺構・道路側溝(SD240)土層断面図(1/60)　109
第93図　道路造成土掘方(1/60)　110
第94図　SP029(1/40)と出土遺物(1/3)　111
第95図　SE064(1/40)　112
第96図　SE064(掘方)出土遺物(1/3)　113
第97図　SX096・SX194・SX391(1/60)　114
第98図　SP250(1/40)　115
第99図　SP250出土遺物1(1/3)　115
第100図　SP250出土遺物2(1/3)　116
第101図　SP250出土遺物3(1/3)　117
第102図　SP250出土遺物4(1/3・1/4)　118
第103図　SP250出土遺物5(1/3)　119

第104図　SP250出土遺物6(1/2・1/3)　120
第105図　SP251(1/40)　121
第106図　SP251出土遺物1(1/3)　121
第107図　SP251出土遺物2(1/3)　122
第108図　SP251出土遺物3(1/3・1/4)　123
第109図　SE255(1/40)　124
第110図　SE255土層断面図(1/40)　125
第111図　SE255出土遺物1(井戸掘方)　(1/3・1/4)　127
第112図　SE255出土遺物2(井戸内)(1/3・1/4)　128
第113図　SE255出土遺物3(井戸内)(1/4)　128
第114図　SE255出土遺物4(井戸内)(1/3)　129
第115図　SX270(1/40)　130
第116図　SX270出土遺物(1/3)　131
第117図　SP283(1/40)　131
第118図　SP283獣骨出土状況(1/10)　132
第119図　SP283出土遺物1(1/3)　132
第120図　SP283出土遺物2(1/3・1/4)　133
第121図　SP283出土遺物3(1/3・1/4)　134
第122図　SP284(1/40)　134
第123図　SP284出土遺物(1/3)　135
第124図　SP290(1/20)と出土遺物(1/4)　136
第125図　SP294(1/40)　137
第126図　SP294出土遺物1(1/3)　137
第127図　SP294出土遺物2(1/3)　138
第128図　SP294出土遺物3(1/3)　139
第129図　SP294出土遺物4(1/4)　140
第130図　SP294出土遺物5(1/4)　141
第131図　SP294出土遺物6(1/4)　142
第132図　SP309(1/40)　142
第133図　SP309出土遺物(1/3)　143
第134図　SP299ほか柱穴列(1/60)　144
第135図　近世遺構面３(1/200)　146
第136図　SP291(1/40)　147
第137図　SP291出土遺物1(1/3)　147
第138図　SP291出土遺物2(1/3)　148
第139図　SE292(1/40)　149
第140図　SD320(1/80)　150
第141図　SD320上層石組み遺構(1/40)　151
第142図　SD320土層断面(1/40)　152
第143図　SD320出土遺物1(1/3)　153
第144図　SD320出土遺物2(1/3)　154
第145図　SD320出土遺物3(1/3)　155
第146図　SD320出土遺物4(1/4)　156
第147図　SD320出土遺物5(1/4)　157
第148図　SD320出土遺物6(1/4)　158
第149図　SD320出土遺物7(1/2・1/3・1/4)　159
第150図　SD320出土遺物8(1/3)　160
第151図　SD320出土遺物9(1/4)　161
第152図　SD320出土遺物10(1/4)　162
第153図　SD320出土遺物11(1/4)　163
第154図　SD320出土遺物12(1/4)　164
第155図　SD320出土遺物13(1/4)　165
第156図　SD320出土遺物14(1/4)　166

第157図　SD320出土遺物15(1/4)　167
第158図　SD320出土遺物16(1/3・1/4)　168
第159図　SD321・SD322・SD323・SD324(1/60)　169
第160図　SD321出土遺物(1/2・1/3・1/4)　170
第161図　SD470(1/40)　171
第162図　SP334(1/40)　172
第163図　SP334出土遺物1(1/2・1/3)　173
第164図　SP334出土遺物2(炉壁)(1/6)　174
第165図　SP334出土遺物3(炉壁)(1/6)　175
第166図　SP334出土遺物4(羽口・るつぼ等)(1/2・1/4)　176
第167図　絵図に見える精錬炉(天保六年江戸橋場鋳銭座絵図より)　177
第168図　SP336ほか柱穴群(1/40)　178
第169図　SP465出土遺物(1/2)　179
第170図　SP363(1/40)と出土遺物(1/3)　179
第171図　SP364・SP365(1/40)　180
第172図　SP364・SP365出土遺物(1/3)　181
第173図　藩学開校以前の調査区周辺(1/2,500)　182
第174図　古代遺構面(1/200)　184
第175図　SD471土層断面(1/40)　185
第176図　SD472・SD473土層断面(1/60)　186
第177図　SD472出土遺物(1/4)　187
第178図　弥生・古墳時代遺構面(1/200)　188
第179図　SD475土層断面(1/20)　189
第180図　SD480土層断面(1/20)　189
第181図　SP476(1/40)と出土遺物(1/4)　190
第182図　SP478(1/40)と出土遺物(1/4)　191
第183図　SP481(1/40)　191
第184図　SP482(1/40)と出土遺物(1/4)　192
第185図　SP483出土遺物(1/4)　192
第186図　SP483(1/40)　193
第187図　SP484(1/20)と出土遺物(1/4)　193
第188図　SP492(1/20)と出土遺物(1/4)　194
第189図　SP495(1/40)と出土遺物(1/4)　195
第190図　岡山藩藩学絵図の変遷　204
第191図　検出遺構の変遷(近世遺構面１・２)(1/400)　206
第192図　SP250・SE255出土の名札・付け札(1/3)　208
第193図　藩学跡泮池と発掘調査区(1/800)　211
第194図　史跡 旧岡山藩藩学跡の現況(1/200)　212
第195図　旧岡山藩藩学跡 泮池(1/150)　213
第196図　泮池石垣の石積み(北面)(1/180)　215
第197図　マダイ出土部位と破損の位置　219
第198図　同一個体と考えられるニホンジカの出土部位と破損の位置　221
第199図　円筒校舎実測図1(1/250)　226
第200図　円筒校舎実測図2(1/250)　227
第201図　円筒校舎実測図3(1/250)　228
第202図　円筒校舎実測図4(1/250)　229
第203図　円筒校舎実測図5(1/250)　230
第204図　円筒校舎実測図6(1/250)　231
第205図　岡山師範学校女子部平面図(聞き取り調査)　234
第206図　寄宿舎部屋間取り図(復元)　244

挿入写真一覧

写真1　発掘調査風景　12
写真2　高松中学生職場体験学習　14
写真3　現地説明会　15
写真4　女子師範学校卒業生の見学　15
写真5　発掘調査メンバーと竜操中学生　16
写真6　ものさしと対面した森さん　16
写真7　南壁礫敷き面　85
写真8　礫敷き道路下の造成　85
写真9　中世以前の土層　86
写真10　溶解ガラス　90
写真11　SE255 木製井戸枠取り上げ時の状況　127
写真12　SP294 出土漆喰塊　136
写真13　SE333　143
写真14　SP299 ほか柱穴列　143
写真15　SP360　153
写真16　布状塊とその断面　171
写真17　史跡旧岡山藩藩学跡の現状　210
写真18　井戸枠　211
写真19　泮池石垣（北面東半部）　214
写真20　泮池石垣（北面西半部）　214
写真21　泮池石垣（南西部の石積み）　214
写真22　泮池石垣（西側の状況）　214
写真23　泮橋（西側から）　215
写真24　泮橋石材の状況　215
写真25　泮橋の欄干　215
写真26　泮池石段（東側）　216
写真27　SP290 出土イエネコ　221
写真28　スナメリ頭蓋（歯・上顎骨・耳骨）　222
写真29　スナメリ上腕骨・尺骨・橈骨　222
写真30　旧岡山市立旭中学校円筒校舎全景　225
写真31　竣工当時の円筒校舎　227
写真32　地階入口通路　228
写真33　1 階中央ホール及び螺旋階段　229
写真34　3 階階段室　230
写真35　教室　231
写真36　4 階階段室　231
写真37　4 階展望ホール　232
写真38　屋上　232
写真39　本校の廊下（附属小学校の廊下？）　236
写真40　旧講堂内部 創立 30 周年記念式典風景　236
写真41　卒業写真　237
写真42　海水浴　238
写真43　乗馬実習　238
写真44　地方実習を終えて　239
写真45　へちま襟の女師の制服　239
写真46　卒業式の日　240
写真47　体操服　240
写真48　勤労奉仕　241
写真49　寄宿舎にて　242
写真50　寄宿舎にて　火鉢を囲む　244
写真51　送別会の練習　244

表一覧

表1　岡山城三之外曲輪跡（第1次調査）検出遺構一覧　76 ～ 80
表2　岡山城三之外曲輪跡（第2次調査）検出遺構一覧　197 ～ 202
表3　岡山城三之外曲輪跡出土動物遺存体種名表　217 ～ 218
表4　遺構と出土動物遺存体の関係　218
表5　ウマ頭蓋骨・歯牙計測表　220
表6　出土動物遺存体属性表　223 ～ 224
表7　女子師範生の日課　243

図版目次

巻頭図版 1
第2次調査区全景(近世遺構面１～３)
戦災ゴミ穴出土ガラス瓶類
巻頭図版 2
SD320出土陶器(織部椀・第144図16)
SD250・SE255出土名札・付け札類
SP334出土炉壁
写真図版 1
調査範囲全景
かつての岡山藩藩学(明治末年頃か)
第1次調査区から天神山方面を望む
写真図版 2
第1次調査区西部全景(近世遺構面・西から)
第1次調査区東部全景(近世遺構面・西から)
第1次調査区東部全景(近世遺構面・南から)
写真図版 3
土層堆積状況(北壁)
小石敷き遺構
井戸３断面
道路遺構全景(西から)
道路断面(断面3)
写真図版 4
道路遺構全景(南から)
溝２全景(西から)
溝２瓦等出土状況(東から)
溝２(東から)
写真図版 5
溝３と柱列(南から)
P28桶検出状況
石組み枡状遺構
柱列と土抗群
写真図版 6
土錘出土状況
井戸４周辺の柱穴
井戸４
井戸４断面
写真図版 7
P21a土層堆積状況
P90土層堆積状況
P92
P164木質検出状況
P167土層堆積状況
写真図版 8
P192
P187土層堆積状況
P199土層堆積状況
P198土層堆積状況
P200土層堆積状況
P204
P219土層堆積状況
P230小柄・キセル出土状況
写真図版 9
P230土層堆積状況
第1次調査区西部弥生～古代遺構面(西から)
古代溝(溝13)土層堆積状況
弥生～古墳溝(溝9)土層堆積状況
写真図版10
井戸４出土遺物
P21a出土遺物(磁器類)
P21a出土遺物(陶器類)
P21a出土遺物(土師質土器類)
写真図版11
P21a出土備前焼人形徳利
P29出土硯
P90出土遺物
P90出土ミニチュア擂鉢
P164出土下駄・下駄歯
写真図版12
P164出土釘・硯
P167出土木札
P184出土遺物
写真図版13
P192出土備前焼建水
P192出土鉄製品
P199出土遺物(磁器類)
P199出土羽釜
写真図版14
P200出土遺物(陶器類・関西系炮烙)
P200出土遺物(小皿・灯明皿)
P200出土遺物(磁器類)
写真図版15
P203a出土遺物
P216出土肥前陶器壺
P217出土肥前磁器(仏飯具)

写真図版16
P217出土肥前磁器(蓋)
P219出土遺物
P230出土遺物
P230出土小柄
写真図版17
溝5出土玉類
包含層出土土器(Ⅴ層直上)
包含層出土土器(Ⅳ層)
写真図版18
第2次調査区 近現代遺構面全景(東から)
基礎１・基礎２(西から)
基礎３(東から)
写真図版19
基礎５・枡状遺構(西から)
池状遺構(西から)
SP263(女子師範便槽)
写真図版20
防衛食容器
「国民食器」
文具類等
写真図版21
第2次調査区北部近世遺構面1・2全景(東から)
礎石建物１(西から)
礎石建物１(西辺の礎石跡列・北から)
写真図版22
礎石建物１の礎石基礎(SP020)
礎石建物１の礎石基礎(SP037)
礎石建物１の礎石基礎(SP122)
礎石建物１の礎石基礎(SP125)
礫敷き道路状遺構(北から)
道路側溝(SD240ほか・南から)
写真図版23
礫敷き道路状遺構(南から)
道路造成土掘方下面の状況
SE064断面
写真図版24
第2次調査区南部近世遺構面1・2全景(東から)
SP250(西から)
SE255(上部・北から)
写真図版25
SE255断面(石積部分)
SE255木製井筒
SP283土層堆積状況
写真図版26
SP284土層堆積状況
SP290
SX270(東から)
SP294
写真図版27
SP250出土遺物1
SP250出土遺物2
SP251出土遺物
SP250・SE255出土木札
(ハイコントラスト用フィルター使用)
写真図版28
SP283出土遺物
SP284出土遺物
SP290出土備前焼甕
写真図版29
SP294出土遺物(磁器類)
SP294出土遺物(陶器類)
SP294出土焜炉
SP294出土置竈
SP294出土瀬戸大皿(馬の目皿)
写真図版30
第2次調査区 近世遺構面3全景(東から)
SD320上層石組み(北から)
SD320埋土中の杭列
写真図版31
SD320全景と土層堆積状況(北から)
SD321(西から)
SD470(東から)
写真図版32
SD321土層堆積状況
SP334炉壁等出土状況
SP334土層堆積状況
SP334全景(西から)
写真図版33
SP336ほか柱穴群
SP291出土木札
SP291出土肥前磁器皿
SD320出土遺物(輸入磁器・肥前陶磁器)
写真図版34
SP320出土柄杓
SD320出土墨書備前焼瓶
(ハイコントラスト用フィルター使用)
SD320ほか出土土製品・金属製品

SP334出土肥前陶器
SP334出土羽口・るつぼ等
写真図版35
第2次調査区　古代遺構面全景(東から)
SD471(南から)
SD472ほか(南から)
写真図版36
SD472出土遺物
第2次調査区　弥生～古墳時代遺構面(東から)
調査区西部の土抗群(南から)
写真図版37
調査区東部の土抗群(東から)
SP476
SP478土器出土状況
SP484土器出土状況
写真図版38
SP482土層堆積状況
SP476出土土器
SP478出土土器
SP484出土土器
SP492出土土器

第１章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

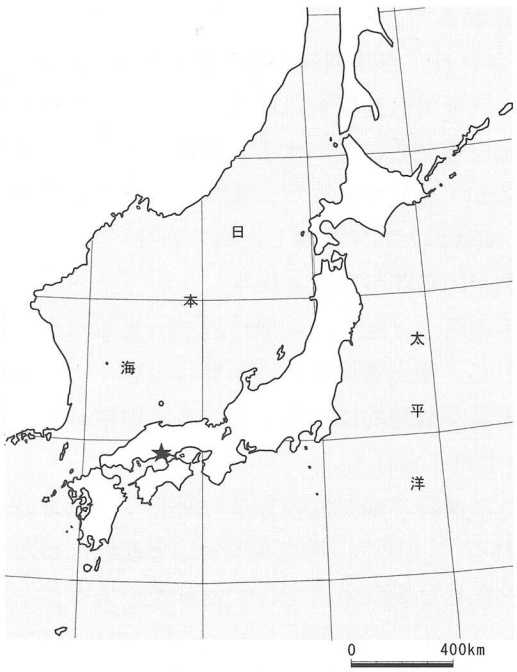
発掘調査地点は、旭川西岸に形成された広大な沖積地である岡山市の中心部、岡山市蕃山町6-10、岡山市立岡山中央中学校の敷地内に位置し、岡山城三之外曲輪跡の北西部の一角に当たる。古代・中世では三野郡弘西郷、ないし出石郷に相当すると考えられる。

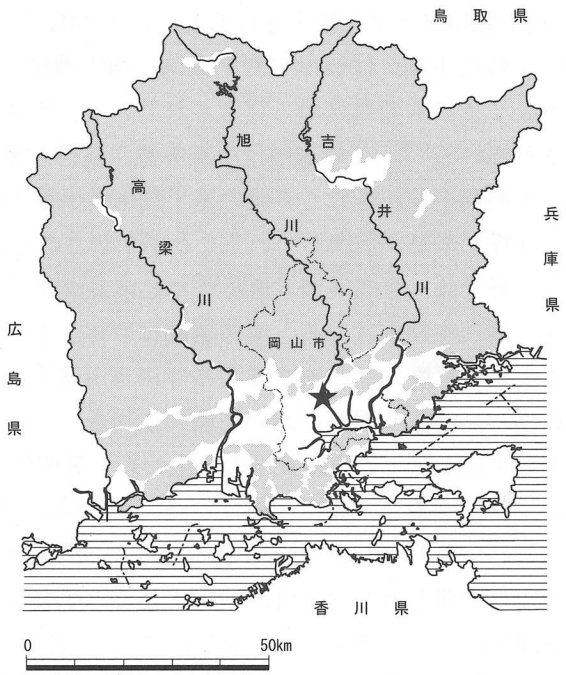
岡山県三大河川の一つである旭川は、中国地方の脊梁をなす中国山地がその濫觴で、200～600m級の隆起準平原である吉備高原を南流し平野部へ流れ出、岡山市江並で現在の児島湾に注ぐ。その目と鼻の先が児島である。現在では自然作用と干拓事業によって半島状をなすが、戦国時代末期頃までは独立した海中の島であった。

旭川の沖積作用によって形成された平野は旭川を境に東岸西岸に分けられ、それぞれ山塊などに囲まれ小地域を形成している。東岸平野(旭東平野)は、北端の竜ノ口山塊、南端の操山山塊によって挟まれた南北約3km、東西約4kmの範囲、西岸平野(旭西平野)は、北端に半田山山塊、西端は矢坂山山塊、南端は旧海岸線に囲まれた南北約5km、東西約2.5kmの範囲である。

調査地点は西岸平野のほぼ中央、標高約4mの沖積平野上に立地し、東側には現標高約10～12mの花崗岩を母岩とする独立丘である、旧内山下小学校などの立地する石山や岡山県立美術館や岡山県総合文化センターの立地する天神山がある。基本的に基盤層は、縄文海進期の海成沖積層や海退後の旭川やその支流の氾濫等に成因をもつ複雑な地層がその結果として重層的に堆積したものである。

なお、調査地点周辺は城下町の開発やその後の市街地化・都市化のため、それ以前の景観や地形を窺い知ることは難しい。





第１図　岡山城三之外曲輪跡の位置

2　歴史的環境

岡山平野においては、旧石器時代の資料は大変乏しい。僅かに操山丘陵で検出された事例くらいである[1]。縄文海進期の満水時には遺跡周辺にある天神山や石山、岡山は内湾に浮かぶ島であった。岡山平野では、縄文時代前半期の生活痕跡も乏しいが、半田山丘陵の山裾に形成された朝寝鼻貝塚では、前期前葉の羽島下層Ⅱ式土器が検出されている[2]。また、近接した沖積地の津島江道遺跡では、前期後半の彦崎Z1式土器が出土している[3]。一般的に気候温暖期がほぼ前者の時期の前後に想定されていることとその後の海面変動の安定期を経て本格的な貝塚が形成され始めるのが後者の頃とされていることからも両者は当該地での貴重な事例であるといえる。また、遺跡立地の分析から縄文時代早期末から前期初頭の多くの遺跡は現在も沖積地下や海中に没している可能性があり[4]、さらに縄文海進も現地形から全国一律の状況であったと想定するのではなくハイドロアイソスタシーや地震性地形変動等の二次的地形変成作用の影響を受けた地域的偏差をも考慮すべきである[5]という見解もあり、県南の貝塚群の調査を含めた今後の検討課題である。

一方、南方釜田遺跡では、標高-2.5mの生痕中でアカホヤ火山灰が検出された[6]。アカホヤ火山灰の降下は縄文時代早期後半、今から約7,300年前の頃である。岡山城三之曲輪跡の調査では、縄文海進期の波蝕台が検出されており[7]、縄文海進期の基礎的資料が整いつつある。しかし、この沖積地利用の濫觴は、中期中葉の船元Ⅲ式期に始まる津島岡大遺跡の出現までまたねばならなかった[8]。後期になるとその初頭から津島岡大遺跡[9]、百間川沢田遺跡[10]といった市内では代表的な集落が若干の時間幅はあるものの旭川の東西に形成され、合わせてイネ関連資料の検出も認められ始めるが安定的とはいえない様相で、起源と実態の追求は未だ類例の増加を待つ段階にある。また、近接する縄文晩期の津島江道遺跡では、突帯文期の小区画水田址が検出されている[11]。

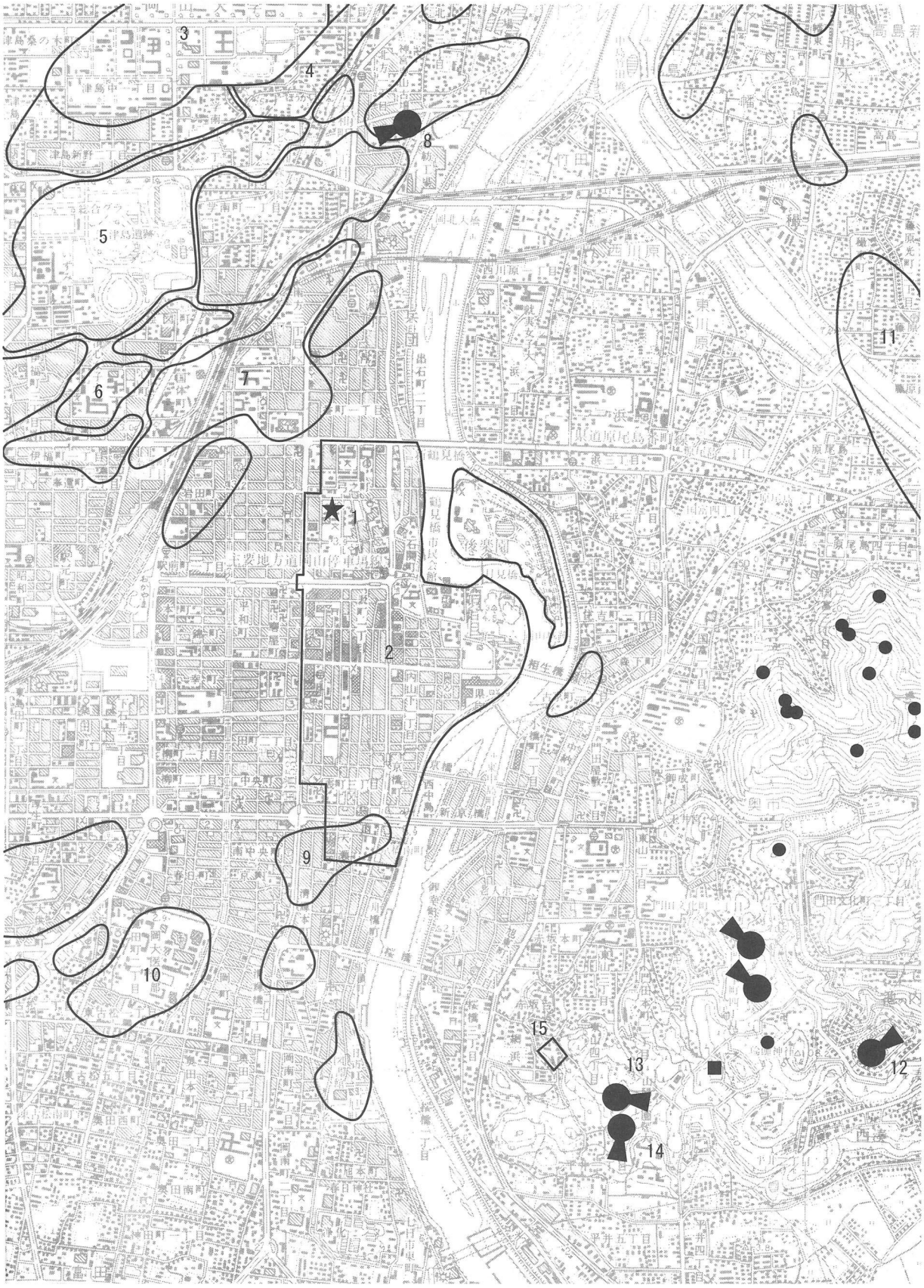
弥生時代前期初頭には西岸平野中央部北よりの地点に津島遺跡が形成される[12]。弥生化した突帯文土器が南池地点で出土しているが未だ類例は少ない[13]。東岸平野では、百間川沢田遺跡が形成される[14]。ここでは、東西約85m、南北約100mの環濠集落が形成される。弥生時代前期になると遺跡数が増加し、中核的集落も形成されてくる。津島遺跡では水田址が検出されており、微高地低位部を水田域とした乾田・半乾田タイプと推定されるものが主体的であったとされる[15]。

弥生時代中期には西岸平野中央部に南方遺跡[16]が形成される。当該期前半期の拠点的集落である。集落としては前期段階から経営されており、平成17年度の調査では前期末に埋没した三重の環濠が検出されている[17]。この遺跡は中期中葉に遺構と遺物の両面で爆発的に増加する。発掘調査によって多量の木製品が検出され、当時の木工技術の水準の高さを見ることができる[18]。また、周辺の微高地上にも同様に遺跡が展開していることが予想されることから集落群として理解したほうが良いであろう。東岸平野では、百間川兼基遺跡[19]や乙多見遺跡[20]などの拠点的集落が形成される。

弥生時代中期末になると南方遺跡は解体する。一方鹿田遺跡など旭川河口部付近でも集落が形成される。東岸平野では赤田遺跡[21]や赤田東遺跡[22]が形成される。南方遺跡解体の影響は大きく、当該期の県南の島嶼部や児島において竪穴住居をもつ小規模な集落が散発的に出現することと中期終末から後期前半にかけての遺跡立地の変化からも無関係ではないと考えられる。

後期の天瀬遺跡、鹿田遺跡は当時の河口付近に形成された遺跡で臨海性の集落であろう。調査地点周辺では岩田町・駅前町付近に微高地があり集落が予想される[23]。また、当該期には、広範囲にわたって洪水砂で覆われた水田址が検出される。生業システム的に見た場合中核をなす生産域を失うことは集落経営において壊滅的な打撃を受けたことが予想される。しかし、古墳時代になると周辺の山塊には、前期古墳が多く築造されることから岡山平野の自然災害との関連を指摘する見解もある[24]。

古墳時代初頭には、周辺の山塊に特殊器台形埴輪をもついわゆる「最古型式」の前方後円(方)墳が数



第２図　調査地点の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

1　調査地点（岡山城三之外曲輪跡）　2 岡山城跡　3 津島岡大遺跡　4 津島江道遺跡　5 津島遺跡　6 上伊福遺跡　7 南方遺跡　8 神宮寺山古墳　9 天瀬遺跡
10 鹿田遺跡　11 百間川遺跡群　12 湊茶臼山古墳　13 網浜茶臼山古墳　14 操山 109 号墳　15 網浜廃寺

多く築造される。西岸平野には七つ塊1号墳[25]、都月坂1号墳[26]、東岸平野には網浜茶臼山古墳[27]、操山109号墳[28]が旭川周辺に築造される。こうした最初期の埴輪を保有する古墳が旭川を睨む位置に立地するのは重要である。そして、それらの古墳はその立地により複数のグループにわかれ、各々が各首長の系譜を示しているという[29]。また、東岸平野の備前車塚古墳では、三角縁神獣鏡11面を含む舶載鏡13面が出土しており[30]、最古型式の古墳のひとつと考えられている。

次の前期中頃から末にかけては、東岸平野では宍甘山王山古墳[31]、湊茶臼山古墳[32]、金蔵山古墳[33]、西岸平野には神宮寺山古墳[34]等が築造される。

中期以降も西岸平野では、一本松古墳[35]や塚の本古墳[36]など前方後円墳の築造がみられるものの東岸平野では認められないなど築造自体が低調である。一方、同時期の砂川中流域には両宮山古墳を中心として古墳群が形成される[37]。後の古代山陽道がこの古墳が形成された盆地に設定されることからも陸上交通の要衝として認識されていたことがわかる。

後期になると東岸平野の周囲には後期古墳が数多く築造されており、中でも操山山塊の沢田大塚古墳[38]は石室全長が11.4mを測る大型の横穴式石室をもつものである。後期末になると龍ノ口山塊には約40基の群集墳[39]が築造される。その山裾部には終末期古墳として著名な竜山石製の家形石棺を有する唐人塚古墳[40]がある。これは、近接する古代寺院である賞田廃寺の造営者である上道氏の墳墓であろうと推定されている[41]。

飛鳥・奈良時代には、賞田廃寺[42]、幡多廃寺[43]、居都廃寺、網浜廃寺などの古代寺院の造営が集中する。備前国府は、旧上道郡域の国府市場から高島新屋敷、国長宮を中心とする地域に想定されてきた。しかし、『和名類聚抄』に「国府在、美能郡」と記述されることもあり、未だ政庁跡や国府中枢地を確定する直接的な遺構等は未検出である。しかし、南古市場遺跡[44]、南国長遺跡[45]、ハガ遺跡[46]、備前国府関連遺跡群[47]などの周辺での発掘調査の成果から徐々に明らかになりつつある。また、当該地には条里制地割りが良く残存しており、特に著名な藤原摂関家の殿下渡領である鹿田庄など多くの荘園が形成されていた。古代から中世にかけての様相は発掘調査の増加に伴いようやく情報が蓄積されつつある。

3　岡山城の発達と調査地点の変遷

岡山城の発達

岡山城草創期の状況は史料的に明確ではない。一説では南北朝期に名和一族で南朝方の上神太郎兵衛高直が城主であったという伝説や応仁元年(1467)に赤松政則・浦上則宗が攻略したとの記述があるが[48]信憑性に欠ける。より新しい江戸時代の編纂物によれば、大永年間(1521 ～ 1527)以降のこととして、天文初年に備前西半分を押領した金川城の松田氏に與していた国侍であった金光備前が居城していたらしく、その後永禄年間(1558 ～ 1570)には養子の金光与次郎宗孝が居城していたようである[49]。松田氏は金川城を拠点とする国人で、岡山城の西北約4kmにある矢坂山に築城した富山城を一族が直轄していた[50]。こうしたことから、岡山城は富山城と連携して旭川下流域の穀倉地帯を直接支配できる位置にあり、旭川の水運を利用して瀬戸内海に通じる交通の要衝でもあった。

宇喜多直家は、吉井川東岸の邑久郡の在地領主から戦国大名にのし上がった人物である。砥石城を皮切りに最初の持城乙子城、新庄山城、岳父中山備中守信正を殺して亀山城を得た。永禄9年(1566)には、毛利氏傘下の備中成羽城主で同じく有力国人であった三村家親を久米郡籾村の興禅寺で暗殺した[51]。翌永禄10年(1567)の報復合戦である明善寺合戦で三村方は大敗、永禄11年(1568)には、金川城を攻めて松田氏を滅亡させ、富山城も手中に収めた。さらに元亀元年(1570)には、一時、備中松山城主三村元親に與した金光与次郎宗高を策略用いて切腹させ岡山城を獲得した。当時の岡山城は、江戸時

代には池田家祖廟があった石山付近に本丸をおき、西に向いた小さな城であったといわれる[52]。

岡山城を獲得した宇喜多直家は、天正元年(1573)の入城に先立ち金光氏の岡山城を改造し、在地領主の城から戦国大名が領国支配を行うための拠点城郭へと造り変えたという。しかし、直家期の岡山城の具体的な遺構は不明な点が多く、並行期と推定される富山城[53]や本丸中の段第1期の構造から、本格的な高石垣は未だ無く、石垣はあっても高さ2～3m程度の低石垣で地山切り落としによる斜面や土塁が多用されたと見られている[54]。

直家の跡を継いだ宇喜多秀家は直家の城郭を大規模に拡大改造したとされる。その年代には諸説あるが、天正18年(1590)もしくは天正19年(1591)着手、慶長2年(1597)完成ということが一般的な通説である。具体的には、本丸を現在の位置に移動させ、石垣を築き、初めて天守をあげたほか、櫓に加え「廣間」や「出任所」を造営したという。本丸中の段の発掘調査では、秀家の普請は文禄年間を中心に考えられており、本格的な高石垣、金箔おしのものを含む多量の瓦とそれを掲げる城郭建物・御殿建物の登場から、第1期からの構造的飛躍と考えられている[55]。また、秀家期の本丸は典型的な織豊期城郭に達している一方、後の段階に比べて、本段・中の段に相当する部分は狭く、軍事的達成度も不十分で、下の段や内堀にいたっては、石垣化や郭としての整備が遅れており、決して江戸時代初期の構造と同一視できないと指摘されている[56]。また、城下町の整備として旭川の付け替え、流路の分岐点に洪水対策のための石製の堰を設け、西流を内堀として整備し、中堀を掘削し上・中・下ノ町(福岡町)を郭内(三之曲輪)に取り込んだ。さらに、外側の内堀に面する西門(直家期の大手門)の改造、南辺内堀に面する南門(大手門)を建設したという。

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦で西軍に付いた秀家は敗走し、慶長6年(1601)小早川秀秋が岡山城に入った。秀秋最大の普請は外堀の掘削による三之外曲輪の創設で、これにより郭内面積は倍増した。また、幕命による領内諸城の城破りと改修工事の突貫性を受け、流用材なども活用しつつ短期間の在城のわりには大規模で多方面にわたる岡山城の改造を行った可能性は高い。

慶長7年(1602)に秀秋は早世し、嗣子が無かったため小早川家は断絶した。翌慶長8年(1603)に備前は池田忠継に与えられたが、幼少であったため、兄である利隆が備前監国となって入城し、国政を代行した。発掘調査の成果から、下の段Ⅳa期の下の段と内堀の改造の主体者は利隆と推定されている[57]。

慶長18年(1613)に利隆の父、池田輝政が死去し、家督を継ぐため利隆は姫路城へ戻った。替わって本来の藩主であった忠継が岡山城へ入ったが、元和元年(1615)に死去した。そこで弟・忠雄が岡山城に入った。この池田忠雄が中の段の月見櫓の建設、表書院の南座敷の建設、二之丸(外郭)の西門をやや南に移動させる改造、南門を大幅に西へ移動させ本格的な枡形構造へ改造、花畠(はなばたけ)の建設、西川掘削等を行ったとされ、後に続く岡山城の基本構造を完成させたとされる。

寛永9年(1632)に忠雄は死去し、子・光仲と姫路から鳥取へ移されていた池田光政が国替えとなり、岡山城へ入った。光政以降は、後園(後楽園)が十七世紀末から十八世紀初頭にかけて本丸北東部の搦手(からめて)に造成されたのを除けば、城の縄張りや軍事的構造は幕末まで現状維持された。なお、寛文9年(1669)以前の調査地点は、忠雄期に作成された「岡山古図」では、武家屋敷の一角であることがわかる。また、慶安年間(1648～1651)の「岡山城下之図」では、円乗院と武家屋敷が記されている。

忠雄期に完成を見た岡山城は、基本的に幕末まで踏襲される。しかし、明治維新後は、本丸天守、月見櫓、西之丸の西手櫓、二之丸(内郭)の石山門を除く多くの郭内の建物等の破却に続き、本丸の内堀以外は埋め立てられていった。そして、昭和20年(1945)6月29日の岡山大空襲で天守、石山門が焼失し、江戸期のものとして現存する遺構は月見櫓と西手櫓を残すのみとなっている。その後、岡山城の天守は、昭和41年(1966)に復元されている。現在も継続して実施されている岡山城の発掘調査によって多くの新知見が得られている。

第3図　岡山城三之外曲輪(北部)と調査地点(1/2,500)

岡山藩藩学の開校と近代以降の調査地点[58]

池田光政は師弟教育の場を設けることに強い意欲を持っていた。それは熊沢蕃山に強い影響を受け、仁政を説く儒教に基礎をおいたものであった。その前段階として、寛文6年(1666)に松平五郎八の旧舎を補修して石山仮学館を設立した。天台系の祈祷所円乗院の旧地と諸士宅地十七区を転じ、寛文9年(1669)正月、学校を建設を開始した。岡山藩藩学は同年7月25日に落成、開校式が行われ経営始まる。全国に先駆けた創設と設立当初から身分制限が無かったこと、11才以上の家中の宗子の入学を義務化していることも注目される。

藩学の諸施設は周や唐の学制に倣ったもので、南の外門から、泮池(はんち)、左右に校門、講堂、中室、食堂、輔仁軒(ほじんけん)が一直線に並ぶ。講堂などの東西には、東側に菊舎(きくしゃ)、蘭舎(らんしゃ)、梅舎(ばいしゃ)、橘舎(きっしゃ)、梧舎(ごしゃ)の文学場五舎、西側に松舎(しょうしゃ)、竹舎(ちくしゃ)、柳舎(りゅうしゃ)、楷舎(かいしゃ)、杉舎(さんしゃ)の演武場五舎を設け、それぞれの学舎前には学舎の名にちなんだ植物が植えられた。藩学には8才から20才の家の宗子に入学が許され、次男以下のものにも開放されていた。また、庶民の師弟も小侍者として通役の傍ら習学することを許されていた。藩学では四書、五経、文選の素読、太刀、槍、弓、馬などの武芸が教授された。

しかし、光政の跡を継いだ綱政の代には財政難から藩校の規模が縮小する。隠居していた光政の強い要望により廃校にはならなかったものの、当初2000石あった学校領は500石とされ、輔仁軒や不用な学房は廃止された。以降幕末までこの縮小した規模となる。綱政以降の藩学は規模の縮小、義務制の廃止なども相まって次第に国学としての地位を失っていく。その後は池田宗政、治政の代に一時復興はするものの、教授内容は初等教育に限られ、さらに学問を求めるものは城下の私塾に通わねばならない状況であったという。

明治維新後は、明治5年(1872)に藩学が廃止された。その後藩学校跡地は、明治9年(1876)に岡山県師範学校(備後福山師範学校と合併)、明治44年(1911)岡山県女子師範学校、昭和11年(1936)第二岡山高等女学校(岡山県女子師範学校に併設)、昭和18年(1943)岡山師範学校女子部と移った。昭和20年(1945)6月29日、岡山大空襲によって木造建物は全て焼失。昭和22年(1947)4月、岡山市立第二中学校発足。昭和23年(1948)9月、岡山市立旭中学校に校名変更。平成11年(1999)4月、生徒数の減少のため岡山市立旭中学校と丸之内中学校が統合して現在の岡山中央中学校が誕生し、現在にいたる。

注

(1)鎌木義昌 1962「第一篇 原始時代」『岡山市史 古代編』岡山市役所
(2)富岡直人編 1998「岡山市津島東3丁目朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財発掘調査報告』2 加計学園埋蔵文化財調査室
(3)神谷正義 2007「ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査」『鹿田遺跡』岡山市教育委員会
(4)間壁忠彦 1955「瀬戸内地方の早期縄文遺跡の分布と立地について」『遺跡』第22号 岡山県学生考古学会
(5)松島義章 2007「縄文早期前半の低地遺跡から推定される旧汀線の位置」『徳永重元博士献呈論集』パリノサーベイ
(6)福武書店本社建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会 1989「岡山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会
(7)乗岡　実 1990「岡山市域における最近の発掘調査」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
(8)光本　順ほか 2005「津島岡大遺跡」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第20冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
(9)山本悦世ほか 1992「津島岡大遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
(10)平井　勝ほか 1993「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所
(11)神谷正義 1988「津島江道遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会
(12)正岡睦夫ほか 2000「津島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会
(13)藤田憲司 1982「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号 倉敷考古館
(14)注10に同じ
(15)山磨康平・中野雅美 1984「弥生水田」『えとのす24－吉備の考古学－吉備世界の成立と衰退－』新日本教育図書株式会社

注

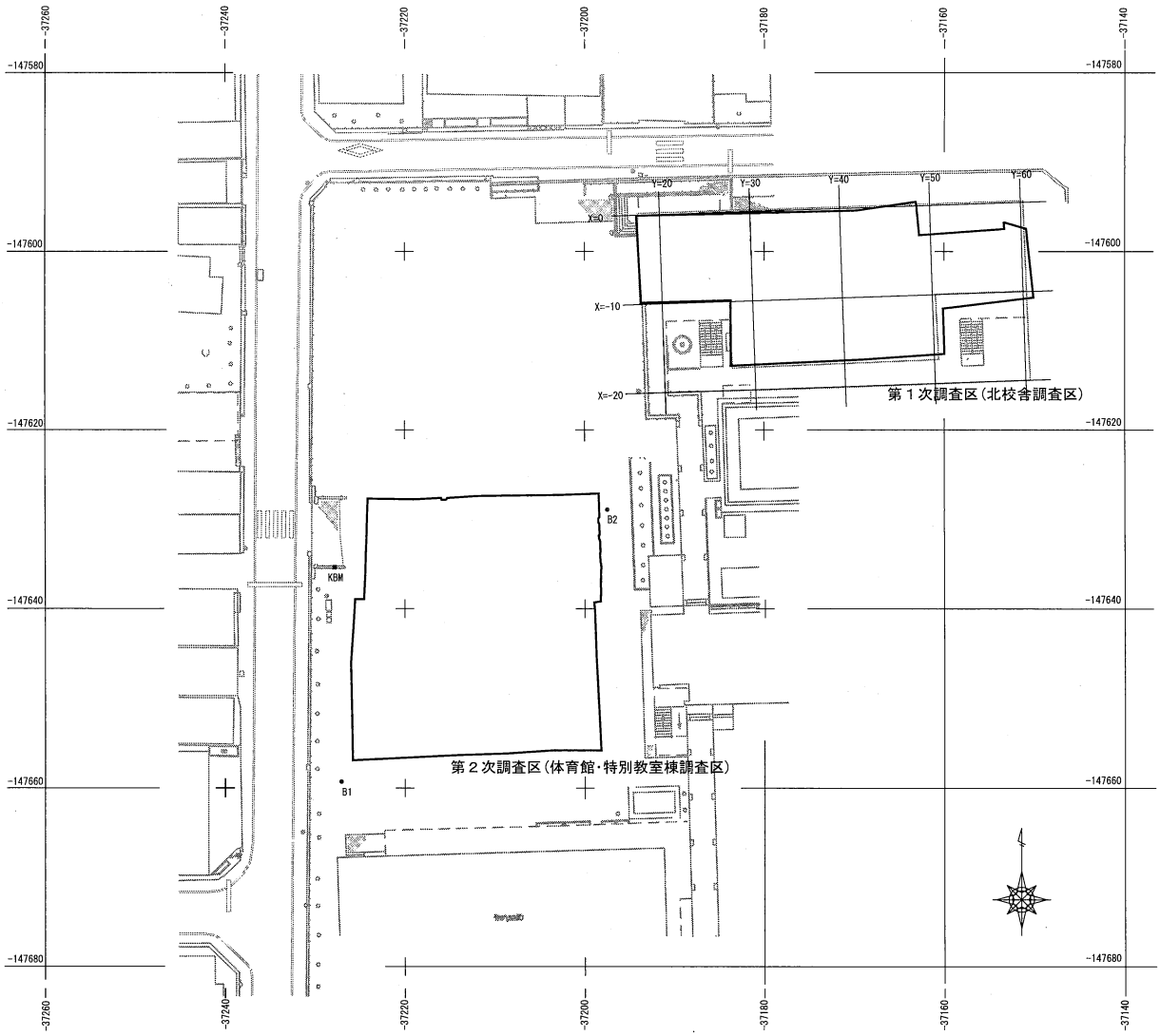
(16) a 出宮徳尚ほか 1971『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
b 出宮徳尚ほか 1981『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
c 柳瀬昭彦ほか 1981「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40 岡山県教育委員会
d 扇崎　由ほか 1996「上伊福・南方(済生会)遺跡南方蓮田調査区Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1994(平成6年度)』岡山市教育委員会
e 扇崎　由ほか 1997「上伊福・南方(済生会)遺跡南方蓮田調査区Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995(平成7年度)』岡山市教育委員会
f 扇崎　由ほか 1998「上伊福・南方(済生会)遺跡上伊福立花Ⅲ調査区」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996(平成8年度)』岡山市教育委員会
g 内籐善史 1996「絵図遺跡・南方遺跡－一般国道53号キャブシステム建設工事に伴う発掘調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110 岡山県教育委員会・建設省岡山国道工事事務所
h 下澤公明ほか 2006「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財「発掘調査報告』200岡山県教育委員会
i 扇崎　由 2005『南方(済生会)遺跡－木器編－』岡山市教育委員会
j 扇崎　由 2007『南方(済生会)遺跡２－介護老人保健施設たちばな苑建設に伴う発掘調査－』岡山県済生会・岡山市教育委員会
(17)注16 j に同じ
(18)注16 i に同じ
(19)高畑知功ほか 1982「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所
(20)正岡睦夫 1989「岡山市乙多見における改修工事における発掘調査」『岡山県文化財報告』3 岡山県教育委員会
(21)出宮徳尚 1975『幡多廃寺発掘調査』岡山市教育委員会
(22)草原孝典ほか 2005『赤田東遺跡』岡山市教育委員会
(23)岡山県古代吉備文化財センター 2003『改定　岡山県遺跡地図(第6分冊岡山地区)』岡山県教育委員会
(24)下澤公明 2000「弥生時代後期末の吉備南部の社会について」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会
(25)近藤義郎ほか 1987『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団
(26)近藤義郎 1986「115 都月坂１号墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
(27)宇垣匡雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅲ－」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
(28)注27に同じ
(29)松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
(30)近藤義郎 1986「109 備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
(31)宇垣匡雅 1988「宍甘山王山古墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅱ－」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
(32)近藤義郎 1986「112 湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
(33)西谷真治・鎌木義昌 1959「金蔵山古墳」『倉敷考古館研究報告』第1冊 倉敷考古館
(34)鎌木義昌 1962「神宮寺山古墳」『岡山市史 古代編』岡山市役所
(35)近藤義郎 1986「114 一本松古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
(36) a 永山卯三郎 1936「福居ノ古墳群」『岡山市史』第一 岡山市
b 近藤義郎 1988「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
(37)西川　宏 1986「106 両宮山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
(38)岡山理科大学学友会考古学部 1970「沢田大塚古墳」『サヌカイト』第2号
(39)注23に同じ
(40)伊藤　晃 1986「127 唐人塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
(41)出宮徳尚 1987「第二章第三節 古代寺院」『岡山県の考古学』吉川弘文館
(42)出宮徳尚 1971『賞田廃寺発掘調査報告』賞田廃寺発掘調査団
(43)注21に同じ
(44)高島公民館の建設に伴い岡山市教育委員会が発掘調査を実施。9世紀から10世紀の土器がまとまって出土している。
(45)河田健司 1998「備前国府推定地(南国長)遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要 1996(平成8年度)』岡山市教育委員会
(46)草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
(47)乗岡　実 2001「備前国府関連遺跡」『岡山市埋蔵文化財の概要 1999(平成11年度)』岡山市教育委員会
(48)永山卯三郎 1936「戦国時代の城砦」『岡山市史』第二 岡山市
(49)注51に同じ
(50)出宮徳尚ほか『富山城跡第二次調査報告』富山城跡調査団
(51)永山卯三郎 1936「宇喜多直家」」『岡山市史』第二　岡山市
(52)注51に同じ
(53)注50に同じ
(54)乗岡　実ほか 1997『史跡保存整備事業　史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
(55)乗岡　実ほか 2001『史跡保存整備事業　史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
(56)注55に同じ
(57)注55に同じ
(58)主に岡山市史編纂委員会編 1968『岡山市史 宗教教育編』岡山市を参考にした。

第２章　調査の経緯と概要

１　調査に至る経緯

岡山市中心市街地の学校再編の動きは、平成7年(1995)8月に岡山市教育委員会教育長から「岡山市立学校施設機能検討委員会」に対し、「学校施設のあり方並びに学校規模と教育条件の適正化について」諮問したことに始まる。これは、全国的な少子化傾向や都心の空洞化現象により、児童生徒数が激減し、複式学級のおそれも生じるなど看過できない教育環境に陥った岡山中心市街地の状況を打開するためのものであった。検討を重ねてきた学校施設機能検討委員会は、平成9年(1997)11月に答申を出した。その答申を受けた教育委員会は、平成10年(1998)2月、丸之内中学校と旭中学校を統合し、旭中学校の場所に新たな中学校を設置することを決定・発表した。そして平成11年(1999)4月、統合校である市立岡山中央中学校を開設した。

本校における校舎の整備は、統廃合決定時に、地元との合意確認されたものであり、老朽化した校舎の更新、狭小な運動場の拡張を図るものである。一方、本校は寛文9年(1669)年に全国に先駆けて開



第4図　発掘調査区の配置(1/800)

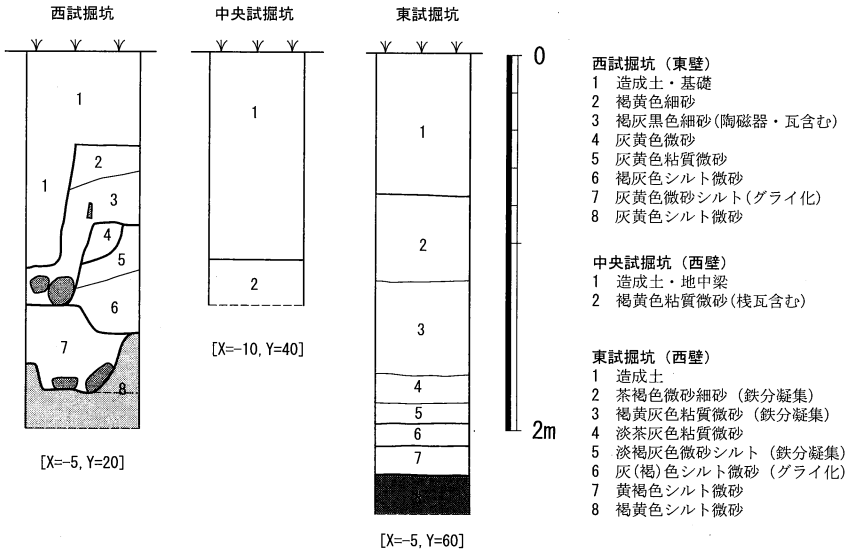
校した旧岡山藩藩学跡に相当しており、校地の一部は国史跡に指定されている。史跡指定地は戦災復興の区画整理により判然としないものの、現在の運動場部分の一部に及ぶとみられ、大規模な校舎の整備は史跡指定地や、指定範囲外であってもその関連遺構に大きな影響を与えることは避けられない。

また、岡山城のうち三之曲輪部分について、平成11年(1999)刊行の『新版　岡山県遺跡地図』から「周知の埋蔵文化財包蔵地」の取り扱いがされることとなったこともあり、校舎整備に伴う埋蔵文化財の保存が大きな課題となった。

2　第１次調査の経過と概要

老朽化した北校舎の改築は第1次整備として計画したものである。設計及び工程の決定に伴い、平成15年1月6日付け岡市教委新第43号で、文化財保護法第57条の3第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の通知について」を提出し、岡山県教育委員会から、工事着手前に発掘調査を実施とする「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」(平成15年2月7日付け、教文埋第1513号)の通知があった。平成15年(2003)3月3日に旧北校舎の解体にあわせて確認調査をおこない、その結果を平成15年3月6日付け岡市教委文第653号で文化財保護法第58条の2第1項に基づく「確認調査報告」を提出した。調査地点の状況は、旧校舎の基礎による損壊が激しいものの、西試掘坑で近世遺構が残存している可能性が大きいとみられ、東試掘坑では不安定ながら基盤土層の所在が想定される状況であった。

発掘調査は平成15年度、九ヶ月間の計画であり、平成16年3月2日付け、岡教文起第604号で「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を提出し、調査に入ることとなった。



第５図　試掘坑土層柱状図（1/40）

調査の体制

発掘調査は以下の体制のもと平成16年3月8日から実施した。

発掘調査対策委員会

委員	稲田孝司	岡山大学文学部教授
委員	亀田修一	岡山理科大学教授
委員	西川　宏	岡山理科大学非常勤講師
委員	間壁忠彦	倉敷考古館館長
委員	水内昌康	元岡山市文化財保護審議会会長　（五十音順　所属・役職は当時）

岡山市教育委員会事務局

総括及び庶務　　教育長　　玉光源爾

教育審議監　三宅勝重
教育次長　山脇　健
参事　角田みどり（平成16年4月1日から）
生涯学習部
部長　井上明治
次長　出宮徳尚
文化財課
課長　出宮次長事務取扱
文化財専門監　根木　修
調整主幹　小林好美（平成16年3月31日まで）
主任　福永みどり
文化財保護主事　安川　満

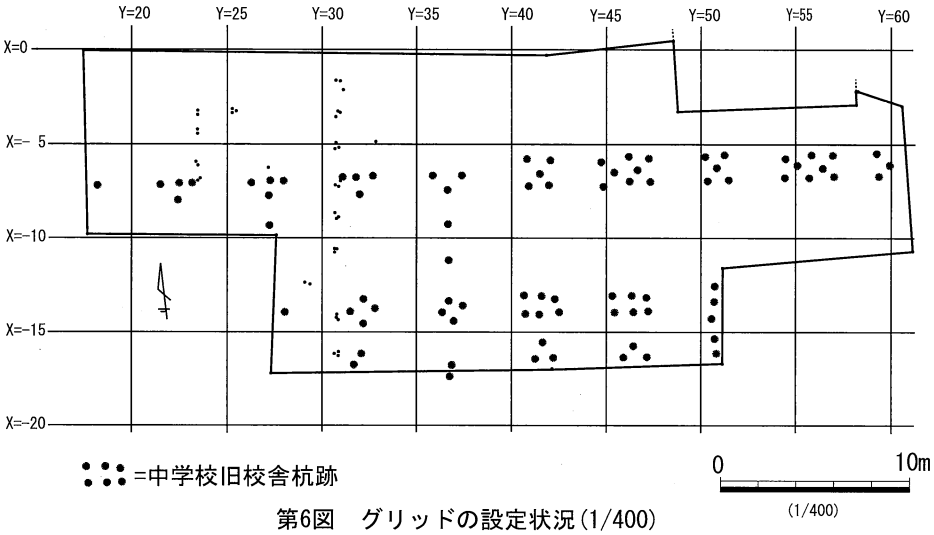
発掘調査担当
主査　神谷正義（平成16年3月31日まで）
文化財副専門監　神谷正義（平成16年4月1日から）
文化財保護主事　河田健司
文化財保護主事　西田和浩（平成16年6月1日から）
現場作業員
赤木　隆・石伊桂子・熊見寿一・小林君江・佐藤　勝・戸田慎吾・鞆　孝一・中川サツキ・畑中美恵・藤田光夫・水内汲子・山本好子
現場事務員
植田ふみ江
出土物整理作業員
加藤美穂・岡本東美・松井美紀

発掘調査の経過と概要

発掘調査は、まず旧校舎の造成土及び基礎残骸を撤去することからはじめた。排土は当初、中学校校庭の一部に運搬し置くことを計画していたが、運搬時の騒音や砂塵などが周辺住民の生活環境へ与える影響に配慮し、また経費や学校の諸事情などから、調査地内で処理することを余儀なくされた。従って、調査は、土置き場の確保のため、調査範囲を東半と西半とに分けて実施することになった。まず、遺構の残存状況が良好と推測される西半から調査を進めた。表土掘削は平成16年(2004)3月3日から行い3月4日に終了し、3月8日からは作業員を導入して発掘調査が始まることとなった。

発掘調査は、調査区の長軸方向に基準線(X軸)を設け、その軸線上に任意の点(0,0)を設定した。この軸の北側を+X、南側を-Xと記載することとし、東方向に+Yとした。基準点は調査区の北西側に設定されているので、調査区範囲のグリッド表示は、(-X,+Y)で表記される(第6図)。なお、このグリッド表示は国土座標や磁北方位とは無関係に設定されており、国土座標との対応もされていない。したがって、１次調査と２次調査との位置関係は、現存建物及び学校敷地の境界を介在して推定している。

調査区は、旧校舎の杭が残存しかつ地中梁の撤去跡によって、縦横に掘削されており、遺構の残りは良好でなかった。ただ、旧校舎の影響は北西部分には及んでおらず、この部分からは面積は狭いものの、岡山県女子師範学校関連の遺構と遺物も検出されるなど良好な保存状況であった。なお、北東隅には強固なコンクリート製槽が築かれていたため調査域から除外した。そのため調査予定面積は602㎡であるが、実質調査面積は若干縮小している。



第6図　グリッドの設定状況(1/400)

調査は重機掘削の荒れをならす作業から始めたが、その段階ですでに近世の遺構は検出されだして

いた。調査の進展につれ、瓦溜まり、ゴミ廃棄坑、石列などが次々と露呈してきた。少なくとも近世遺構は、上・下層に分離できることも明らかになった。絵図との対比から、石列は道の護岸施設と判断され、調査区内の土地利用の状況が把握できるようになり、遺構の性格も理解できるようになった。

近世の調査が終了して、さらに下部の掘り下げに入った。最下層に遺構が存在することは、近世遺構の掘り下げ時から予測されていたことである。そこで近世造成土を除去し、遺構の検出に努めた。その結果、北東から南西に流れる古代の川と南北方向に走行する弥生～古墳の溝群を検出した。近年、岡山城下町の調査の進展につれ、城下町形成に先行する遺跡・遺構が確認されてきているが、ここでもその一端を確認した。

西半の調査終了後、埋め戻しを行い、引き続き東半の鋤取り、調査に入った。東半の調査は、旧建物基礎の影響が著しく困難を極めたが、西半と同様の成果をあげることができた。

なお、調査成果を生徒たちに伝わるようにして欲しいとの学校の要望もあり、「発掘調査ニュース」を通算14号発行した。学校掲示板や塀に張り出し、周辺の人々をも対象にして調査の進行の様子が理解できるよう努めた。

3月8日から始められた発掘調査は、延べ201日間を経過した9月24日に終了した。

発掘調査日誌抄

平成15年(2003)

3月 8日　試掘確認調査(3か所)

平成16年(2004)

2月16日　教育委員会施設課と文化財課、作業にむけての具体的な協議に入る。

2月25日　発掘作業員の抽選会を行い、作業員12名を決定する。

2月26日　仮囲い設置作業。

3月 8日　発掘調査開始。文化財課長等あいさつ。RSKテレビ取材。直近の三角点からレベルをひく。

3月 8日　発掘調査ニュース№1・番外編掲示。以後調査の進展に応じて、約2週間間隔を目安にニュースを掲示。

3月12日　近世遺構検出されだす。

3月19日　調査グリッドの設定。

5月18日　全体写真撮影(西半部の近世遺構掘りあげ状況)。

5月27日　対策委員会(水内、稲田、亀田)。

5月28日　西川対策委員現地指導。

5月31日　間壁対策委員現地指導。

6月10日　中央中学校選択社会科生徒13人見学。

6月15日　中央中学校選択社会科生徒12人見学。

6月21日　台風接近、作業中止。

6月24日　重機による掘り下げ。

7月 9日　西半部調査終了。以降埋め戻しと東半部掘削のため作業員は休止。

7月15日　東半部調査開始。

7月20日　今年一番の暑さ、岡山37度を超える。

8月20日　近世土層掘り下げ。岡山大学倉地日本史教授来訪、出土木簡を解読していただく。

写真１　発掘調査風景

8月26日　近世造成土掘り下げ、一部重機にて掘削。
8月30日　台風16号直撃、敷地内の大木1本倒壊、周辺に被害なく幸い。
9月 7日　台風18号接近、午後強風に備え現場を養生。
9月24日　対策委員会(水内、稲田、亀田、間壁)。後片付け、全体写真撮影し、調査終了。

3　第２次調査の経過と概要

第２次整備計画は既存の体育館・南校舎(特別教室棟)の解体による狭小な運動場の拡張を図るため、旧円筒校舎・旧西校舎跡地に体育館・特別教室・給食室の機能を満たす施設を建設するものである。平成18年度に円筒校舎及び西校舎の解体撤去工事、平成19年度に実施設計、平成20～22年度に諸施設の建設及び既存施設の解体、運動場拡張整備を行う計画である。対象範囲の埋蔵文化財の取り扱いについては、第１次調査と異なり一貫して旧岡山藩藩学の範囲であった部分を含むことから、平成18年度から記録保存の発掘調査を実施するとともに、重要な遺構等が確認された場合はその保存も視野に施設の実施設計を検討することとし、平成18年11月7日付け岡教施第780号で文化財保護法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」を提出し、岡山県教育委員会から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」(平成18年11月22日付け教文埋第945号)の通知があった。

発掘調査は平成18年度、十二ヶ月間の計画であり、平成18年11月14日付け岡教文第649号で文化財保護法第99条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を提出した。調査範囲については、旧円筒校舎部分は基礎が地表下4m近くまで入っており遺構の残存が望めないこと、西校舎については基礎が地表下1.2m程度にとどまっており、第１次調査の状況からも江戸期以前の遺構が残されている可能性が高いことから、円筒校舎の南から西校舎部分の約1,200㎡を調査対象とすることとした。

調査の体制

発掘調査は以下の体制のもと平成18年11月13日から実施した。

発掘調査対策委員会

委員	稲田孝司	岡山大学文学部教授
委員	亀田修一	岡山理科大学教授
委員	間壁忠彦	倉敷考古館館長
委員	水内昌康	元岡山市文化財保護審議会会長　(五十音順　所属・役職は当時)

発掘調査の経過と概要

岡山市教育委員会事務局

総括及び庶務

教育長	山根文男
教育次長	曽田佳代子
	岡村頼敬(平成19年3月31日まで)
	鈴木弘治(平成19年4月1日から)
審議監	森田誠治
文化財課	
課長	平松省三
参与	出宮徳尚
文化財副専門監	神谷正義
文化財副専門監	乗岡　実(平成19年4月1日から)
主任	草原孝典
文化財保護主事	河田健司
主事	柿本貴子

発掘調査担当者

文化財保護主事	安川　満(平成19年3月31日まで)
主任	安川　満(平成19年4月1日から)
文化財保護主事	田嶋正憲

現場作業員
　在里じゅん志・宇野　久・小笠原茂豊・小林君江・故引宏昭・小山笑子・佐々木龍彦・佐藤　勝・戸田慎吾・服部道夫・林　祥价・水内汲子・山本好子・吉村順次

現場事務員
　日原けさ子

出土物整理作業員
　片山理子・延原経子・森　圭子

発掘調査は平成18年(2006)10月27日に調査範囲を設定、同30日から機械による表土掘削を開始した。調査範囲は計画では約1200㎡としていたが、車両等の進入口の確保、調査事務所の設置、中学校の避難経路の確保等のため、実質705㎡となった。表土掘削は、調査区南半の旧西校舎部分は基礎掘方やその解体時の撹乱のため地表下約0.9mまで、調査区北半は幕末から近代の造成土とみられるにぶい黄褐色～オリーブ褐色土の上面付近にあたる地表下約0.4mまでを対象とした。基準点、水準点の設置については、株式会社ウジョウに委託し11月7日から行った。基準点はＧＰＳにより、国土座標に基づく４級多角点２点を設置、水準点については付近の街区三角点、街区多角点より直接水準を行い、仮ベンチマークを設置している。表土掘削は10月31日に、基準点・水準点の設置は11月9日に完了し、11月13日からは作業員を入れ本格的調査を開始した。

調査はまず、旧西校舎や渡り廊下の基礎構造物、解体時の瓦礫の残りなどの撤去を行いつつ、近代の遺構の検出に努めた。特に北半部では岡山県師範学校、岡山県女子師範学校のものとみられる基礎が残っており、女子師範学校の基礎については、その配置などから建物を特定することができた。

近世の遺構面は厚さ50cmほどの造成土を挟んで、標高3.2m付近と標高2.7m付近の２面の遺構面があり、さらに上層の遺構面は薄い造成土により上下２面に分けることができる。それぞれ上層から近世遺構面１及び２、近世遺構面３とした。

近世遺構面１及び２は旧岡山藩藩学段階の遺構面とみられ、礎石建物、礫敷き道路遺構、井戸、ゴミ穴などを検出した。特に、調査区北半部で検出した礎石建物、礫敷き道路遺構は藩学が縮小する十八世紀初頭以前の絵図と対比できるものであり、藩学開校時の様相を伝える遺構ととらえられる。礫敷き道路遺構については、当初礫敷き面の東半のみ調査区内で検出していたため、車両等の進入口として残していた部分に調査区を約25㎡拡張し、道路遺構の西辺に石組みの側溝を伴うことを確認した。調査区北半部については藩学開校時の遺構が良好に残存することから、下層遺構面の調査を断念し、遺構の保存を検討することとした。調査区南半部のみの調査となった近世遺構面３は、藩学以前の遺構面ととらえられ、水路、井戸、柱穴などを検出した。なお、平成19年(2007)5月12日に現地説明会を実施し、約200名の参加を得た。なお、現地説明会をきっかけに、近現代層から出土していた名前の彫り込まれたセルロイド製ものさしの持ち主が判明した。早速連絡を取り、もとの持ち物をご覧いただくとともに、当時の様子など貴重なお話を伺うことができた。

現地説明会終了後、調査区北半については西側に約65㎡拡張、近世遺構面１及び２の礫敷き道路遺構以西の状況を確認。調査区南半についてはさらに近世以前の遺構面の調査に取りかかった。近世以前の遺構面は標高2.0m付近と標高1.2～1.6m付近の二面を調査対象としている。上層の遺構面(古代遺構面)は第１次調査の成果や出土物から平安時代頃の遺構面ととらえられ、薄いながら洪水砂に覆われている。ここでは水路もしくは河道とみられる溝３条、水田畦畔とみられる帯状の盛り土を確認した。下層の遺構面(弥生・古墳時代遺構面)は微高地基盤層の上面であり、調査範囲の東側では標高1.6m程度、北西側では谷状に低く標高1.2m程度となっている。弥

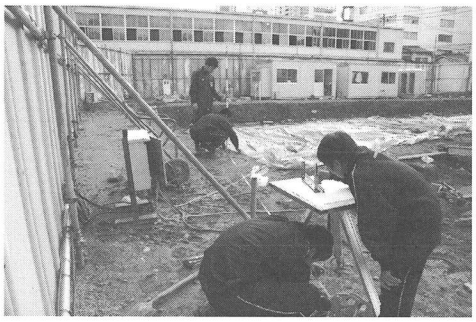


写真2　高松中学校生職場体験学習

生時代後期の粘土採掘坑とみられる不定形の大形土坑と溝２条を検出しており、微高地縁辺部の状況ととらえられる。弥生・古墳時代遺構面の調査終了後、土層断面の記録等を行い、10月31日すべての発掘調査作業を終了した。

なお、第１次調査に引き続き『発掘調査ニュース』15号から27号を発行した。学校掲示板や塀に張り出し、周辺の人々をも対象にして調査の進行の様子が理解できるよう努めた。また、職場体験学習の受け入れ、周辺小中学校の授業等に伴う発掘現場の見学などを積極的に受け入れた。7月12日には中央中学校図書室にて調査のようすをスライドや実際の遺物をみてもらいながら報告。自由参加の報告会ながら多数の生徒の参加を得た。

写真3　現地説明会

写真4　女子師範学校卒業生の見学

発掘調査日誌抄

平成18年(2006)

7月中旬　旧円筒校舎、旧西校舎解体開始。
7月21日　旧円筒校舎調査。
9月中旬　旧円筒校舎、旧西校舎解体完了。
10月12日　発掘調査及び関連工事打ち合わせ。(文化財課、施設課、中央中学校、工事業者)
10月27日　調査区設定、機械掘削深度決定のため試掘調査実施。仮囲い、ユニットハウス等設置。上下水道、電気配線工事(～28日)
10月30日　表土掘削(～31日)
11月 6日　発掘現場作業員面接、抽選。14名を決定。
11月 9日　基準点、水準点観測、設置。
11月13日　発掘調査開始。
11月14日　市立竜操中学校２年生(4名)、職場体験学習。(～16日)
11月20日　市立高松中学校２年生(4名)、職場体験学習。(～22日)
11月30日　市立岡山中央中学校１～３年生(のべ約60名)見学。(～12月 5日)
12月20日　近現代遺構面写真撮影。

平成19年(2007)

1月12日　調査区北半、近世遺構面１調査開始。
1月26日　調査区北半、近世遺構面２調査開始。
1月30日　岡山師範学校女子部卒業生(3名)見学。
1月31日　調査区南半、調査区南半近世遺構面１及び２調査開始。
2月 7日　近世遺構面１及び２写真撮影。
2月13日　礫敷き道路遺構の西辺の状況を調査するため、調査区北半を西へ2m拡張。
3月 2日　拡張部分を含め近世遺構面１及び２、再度全体写真撮影。礫敷き道路遺構を実測。
3月 9日　岡山市デジタルミュージアム映像資料撮影。
3月12日　調査区南半、藩学造成土掘削開始。
3月13日　第1回対策委員会

3月20日　調査区南半、近世遺構面３調査開始。
3月27日　岡山大学倉地日本史教授現地指導。
4月18日　市立岡山中央小学校6年生、社会科授業の一環で見学。（～31日）
5月　7日　岡山市文化財保護審議会の各委員、遺構の保存等について現地指導。（～31日）
5月12日　現地説明会
5月15日　森久美さん現場及び出土ものさし見学。
6月27日　岡山師範学校女子部卒業生現場見学。
6月28日　航空写真撮影。
7月12日　岡山中央中学校発掘調査報告会開催。
7月14日　台風4号接近。
7月27日　古代遺構面調査開始。
8月　3日　台風5号接近。
8月29日　古代遺構面写真撮影。
9月　7日　体育館・特別教室棟実施設計打ち合わせ。
9月10日　弥生・古墳時代遺構面調査開始。
10月　4日　第2回対策委員会
10月　5日　弥生・古墳時代遺構面写真撮影。
10月19日　発掘作業終了。
10月22日　史跡旧岡山藩藩学跡測量。（～30日）
10月24日　発掘調査区埋め戻し開始。（～30日）
10月31日　賃貸物件搬出打ち合わせ、発掘調査終了。
11月　1日　賃貸物件搬出。

写真5　発掘調査メンバーと竜操中学校生

写真6　ものさしと対面した森さん

なお、発掘調査に際しては、岡山市教育委員会施設課・岡山市営繕課の皆様、岡山市立岡山中央中学校の皆様をはじめ多くの方々に多大なご支援、ご指導いただいた。記して謝意を表したい。

岡山市文化財保護審議会：間壁葭子（会長・倉敷考古館学芸員）・加原耕作（副会長・元岡山県立博物館館長）・岩崎範子（委員・元岡山市監査事務局長）・大島光子（委員・岡山大学教授）・沖　陽子（委員・岡山大学教授）・狩野　久（委員・元岡山大学教授）・斉藤　孝（委員・元岡山大学教授）・次田圭介（委員・岡山民俗学会理事）・細見啓三（委員・元国立奈良文化財研究所建造物室長）
研究者等：倉地克直（岡山大学教授）・白石　純（岡山理科大学自然科学研究所専任教員）・富岡直人（岡山理科大学准教授）・万城あき（（財）岡山県郷土文化財団研究員）
旧岡山師範学校女子部卒業生：池宗寿美子・植木照子・西崎堅子・西坂良子・山本　操
旧県立第二岡山高等女学校卒業生：森　久美・水田小枝子

第３章　第１次調査（北校舎調査区）

1. 調査区の基本層序

北校舎調査区内の土層堆積は、後述のとおり、大別してⅠ～Ⅴに分層できる。本文中の以下の土層註記は、頭にローマ数字を冠して、この層の性格を表現している。

Ⅰ層：近現代の土層

学校関係の基礎や残骸が検出される土層。旧学校造成土や戦災焼土層もこの層に含まれる。しかし当調査区では、旧校舎建設時や解体撤去時に、掘り下げや埋め戻しが実施され、その結果として、近現代の土層堆積状態は大きく乱れ、良好な保存状態ではなかった。かろうじて調査区北西端(土層1、土層2西半)に、近代からの良好な土層堆積が観察できた。このⅠ層を掘り下げる過程で、備前焼製土管の排水施設が検出された。また井戸3出土と同様のインク瓶、石版などが出土している。Ⅰ層そのものが、近代以降のたび重なる造成により形成された土層である。

Ⅱ層：近世の土層

Ⅰと中世に形成されたⅢ層に挟まれた土層をⅡ層とした。基本的に江戸時代、外堀が掘削され当地が三之外曲輪内に編入されてからの土層と認識。藩学や武家屋敷など、様々な作事や普請が行われた結果の土層であるので、複雑な様相を呈している。少なくとも3遺構面が想定されるが、各遺構面の基盤土にも炭粒などが混在していて、たび重なる造成により嵩上げされてきたことを窺わせる。

近世遺構面は、土層断面の観察や遺構の検出状況から、上位･中位･下位の3遺構面の設定が可能である。しかし、調査区内の土層残存状況は、調査進行時に統一した検出面を確保できず、各遺構面の検出は困難であった。実務として標高3m付近でⅠ･Ⅱと分離し、遺構の検出および遺物の取り上げ作業を実施した。Ⅰが上位面、Ⅱが中位･下位面に対応するものと理解している。また、調査区中央に南北方向の道が設置されていたことと道の西側に道と直交する溝が掘削されていたこと、その結果として調査区が3分割された状況であったことは、各区画の土地利用状況が異なることであり、調査区内の土層堆積も一様でなく複雑な様相を呈す原因であった。

近世遺構面ⅠはⅠ層を除去して最初に検出される遺構面である。溝2･道状遺構が代表的遺構であるが、そこに廃棄された瓦やその出土状況からして、幕末ないし近代初頭に、建物等が整理された様相を示すものである。土層1、土層2西端、土層4はその堆積状況を良好に示している。溝2･道状遺構との切り合い関係から、さらに近代遺構と近世遺構とに分離して把握している。

近世遺構面Ⅱは、廃棄土坑遺構に代表される。廃棄土坑は出土物から、大半は十八世紀から十九世紀ごろの年代と想定できるが、限定は困難である。土層2中央、土層3･4にその堆積状況が示されている。土層との関係からは、P187(土層4)が近世遺構面Ⅰ、P179、P184、197、204(土層3･4)がⅡ上、P244(土層3)がⅡ下に対応する。

土層5では廃棄土坑が希薄であることが読みとれ、南半部には廃棄土坑を設ける環境にないことが理解できる。屋敷の主要な施設、建物類が南半部に所在していたからと思われる。

Ⅲ層：中世の水田層

Ⅱ層下方に､灰色シルト層が広がる。Ⅱ層とⅣ層を分離する鍵層でもあるが､脱色による灰色を呈し、水田層とその鋤床層と判断。この層から近世陶磁器類は出土せず、細片であるが中世土師質土器が主として出土することから、中世に帰属する土層と判断した。

Ⅲ層は土層1～5で認められるので、当地の大部分が水田域であったと想定できる。さらに調査区南

半部には、土層5の「溝16上層落ち込み27 ～ 31」層のようなⅢとⅣ層のあいだに河道内堆積砂質土が、部分的ではあるが存在する。古代に河道であった場所が埋まって、平準化され、中世には水田となった経緯が土層から読みとれる。

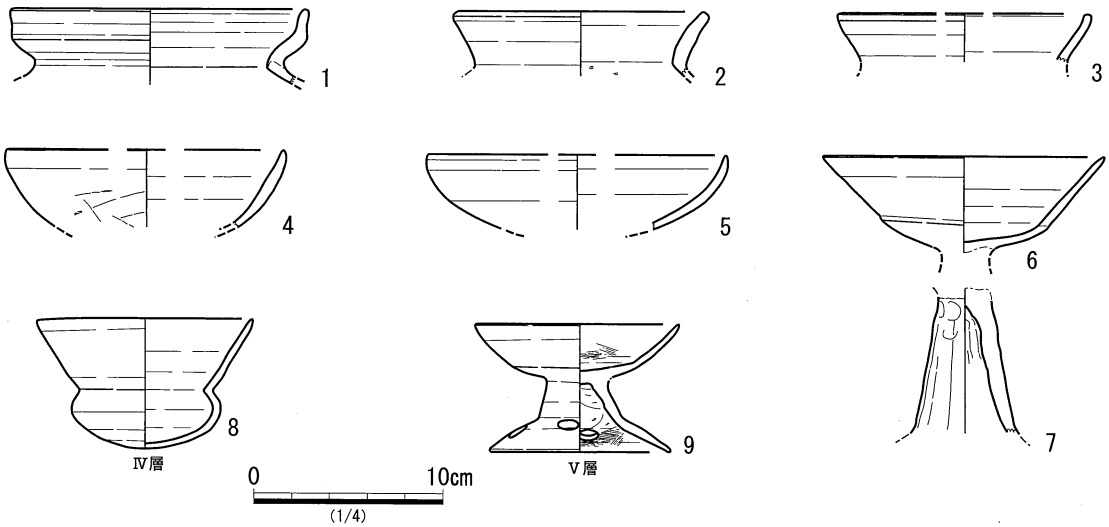
Ⅳ層：弥生時代～古墳時代の形成層

この土層上半に土器片などの遺物が包蔵されている。遺構もこの土層を切り込む場合と土層除去後に検出される場合とがあり、弥生から古墳時代にかけて形成された土層である。その様子は土層2で理解できる。全体に有機質が混じり、黒褐色味が強い。古代の河道部分は土層が抉られて認められないが、調査区全域に形成されていたようで、弥生～古墳時代の基盤土層であり、生活面をも形成していた。

Ⅴ層：微高地基盤土層、自然堆積土

黄白色を帯び、シルト質か砂質土の堆積土層。遺物は基本的に検出されない。第7図9はⅤ層直上の出土である。調査区中央部分では緩やかなたわみとその埋土(土層3、68 ～ 70)が見られ、Ⅳ層形成の前半期には湿潤な環境にあったようである。このたわみ及び周辺は、粘質度が強く限定的ながら水田域として利用されていた可能性がある。

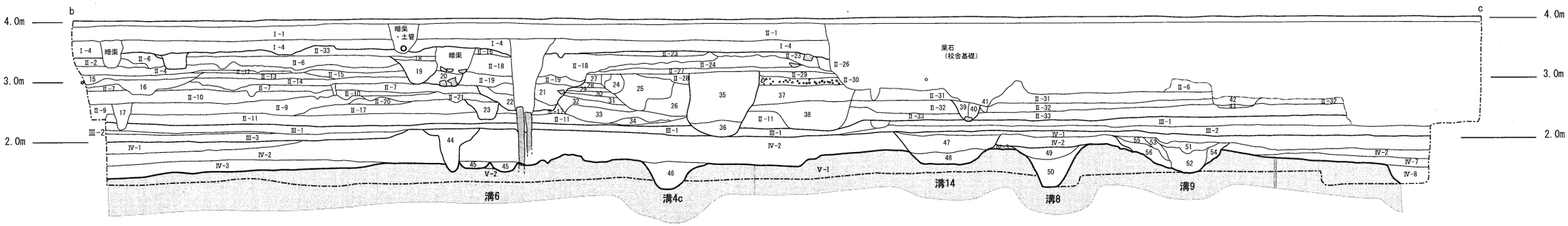
第7図はⅣ層など包蔵土中から出土した土器類。出土層が確実な個体は8のⅣ層、9のⅤ層直上であるが、包蔵土中の他の土器と大差ない。これら土器は、いわゆる吉備型甕、口縁部が「く」字に外反するタイプの壺ないし甕、また口縁が大きく開き長脚を有す高坏、小形丸底壺などの特徴から古墳時代前半期前葉～中葉にかけての時期に比定できよう。したがって、Ⅳ層は古墳時代前半期以降に形成された土層と考えられる。



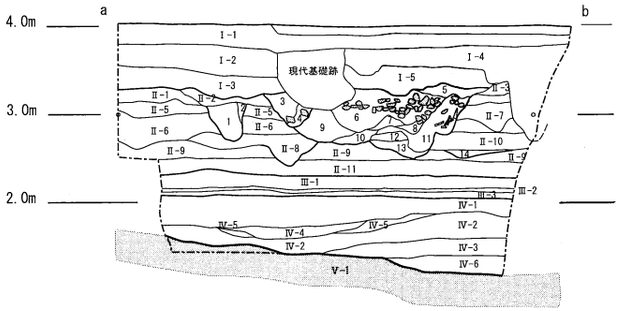
NO.	種　別	器種・部位	法量 (cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調	備　考
1	土師器	甕	口径　15.4	内面頸部までケズリ、口縁部ヨコナデ。	(胎土) 長石等砂粒多含。 (焼成) 良	内：10YR7/3(にぶい黄橙) 外：5Y7/4(にぶい橙)	口縁 1/3 片
2	土師器	甕	口径　13.5 底径　6.1 高さ　3.2	内面頸部までケズリ、口縁部ヨコナデ。口唇部やや摘み上げ。	(胎土) 1mm 大の長石等砂粒多含	内外：5YR6/6(橙) 断：N7/0(灰白)	口縁 1/2 片
3	土師器	甕・口縁部		口唇部やや摘み上げ。	(胎土) 1mm 大の長石等砂粒多含	内：7.5YR8/4(浅黄橙) 外：5YR7/4(にぶい橙)	細片
4	土師器	鉢	口径　14.5	外面下半ケズリ、上半ナデ、内面ヘラナデ。口唇部つまみナデ。	(胎土) 微砂粒多含、精良。 (焼成) 良	内：7.5YR7/4(にぶい橙) 外：7.5YR7/4(にぶい橙)	1/9 片
5	土師器	鉢	口径　15.8	外面下半ケズリ、上半ナデ、内面ヘラナデ。	(胎土) 0.5mm 大の石英、長石等砂粒多含	内：7.5YR7/4(にぶい橙) 外：5YR7/6(橙)	細片
6	土師器	高坏・杯部	口　径　8.1 杯部高　6.0	受け部から大きく開く口縁部。接合部で屈曲。器表荒れ。	(胎土) 1mm 大の長石等砂粒多含	内：2.5YR6/8(橙) 外：7.5YR7/6(橙)	1/3 片
7	土師器	高坏・脚部	現存高　7.8	外板目調整、内絞り目	(胎土) 1mm 大の長石等砂粒多含	内：5YR7/8(橙) 外：7.5YR7/6(橙) 断：10Y4/1(灰)	1/2 片
8	土師器	小型丸底壺	口径　10.3 器高　7.0	小さい体部に大きく開く口縁部。体部下半ケズリ、口縁ナデ。	(胎土) 雲母、長石等砂粒多含。	内外：7.5YR6/3(にぶい褐)	口縁 1/3 欠 第Ⅳ層
9	土師器	高坏	口径　10.7 脚径　9.5 器高　6.8	杯部内面ミガキ、脚部 4 透かし孔、内面板目。有黒班。	(胎土) 長石等微砂粒多含。	内外：2.5YR6/8(橙) 断：5Y5/1(灰)	口縁 1/4 欠 第Ⅴ層

第 7 図　弥生～古墳時代包含層出土遺物 (1/4)

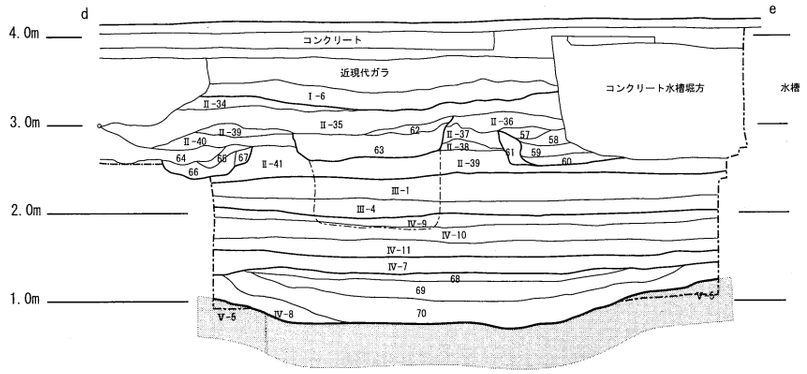
土層2

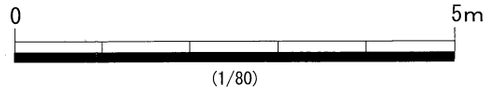


土層1



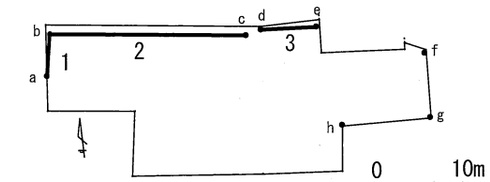
土層3





(1/80)

土層図位置



Ⅰ-1　花崗岩風化土造成土
Ⅰ-2　明黄褐色シルト
Ⅰ-3　黄褐色と暗褐色微砂シルト（礫・炭・貝殻多）
Ⅰ-4　褐色微砂（木炭・焼土粒多）
Ⅰ-5　褐灰色シルト（角礫多量）
Ⅰ-6　白色細砂＋円礫層

Ⅱ-1　黒褐色粘土と明黄色シルトの混在層
Ⅱ-2　灰黄色微砂シルト
Ⅱ-3　灰褐色微砂
Ⅱ-4　黄褐色粗砂微砂
Ⅱ-5　明黄色微砂シルト（黒褐色粘土のブロック混在）
Ⅱ-6　明黄橙色微砂（白色粗砂・木炭粒・土器細片混在）
Ⅱ-7　明黄橙色シルト（灰褐色粘土のブロック混在）
Ⅱ-8　淡灰黄色シルト（木炭粒多量）
Ⅱ-9　明橙褐色シルト
Ⅱ-10　明褐色シルト微砂
Ⅱ-11　淡黄色シルト（マンガン粒混在）
Ⅱ-12　橙黄色粘土シルトと白色細砂の互層
Ⅱ-13　灰黄色微砂（木炭粒多量）
Ⅱ-14　明黄灰色シルト微砂（焼土粒若干混入）
Ⅱ-15　淡黄色シルト
Ⅱ-16　暗黄色シルト（Ⅱ-6との境目に小円礫集中）
Ⅱ-17　淡灰黄色シルト
Ⅱ-18　淡黄色粗砂と褐色シルト微砂の混合層（Ⅱ-39層との境目に円礫多）
Ⅱ-19　淡黄灰色微砂シルト（木炭粒若干入る。鉄分粒沈着）
Ⅱ-20　灰色細砂と黄灰色シルトの混合層
Ⅱ-21　橙黄灰色シルト
Ⅱ-22　明灰色シルト
Ⅱ-23　褐色シルト
Ⅱ-24　暗黄橙色粗砂混じり微砂と明黄灰色粘土の混合層
Ⅱ-25　灰白色微砂（径2～3cmの円礫混在）
Ⅱ-26　黄白色微砂シルト
Ⅱ-27　黄白色微砂細砂（円礫多量）
Ⅱ-28　褐色土と黄色シルトの混合層
Ⅱ-29　褐色シルト（角礫若干混入）
Ⅱ-30　橙褐色シルト微砂（円礫多量に混入）
Ⅱ-31　明灰褐色シルト
Ⅱ-32　褐色シルト
Ⅱ-33　明黄色シルト
Ⅱ-34　褐色微砂シルト
Ⅱ-35　暗黄褐色シルト微砂（5cm程の角礫及び木炭粒混入）
Ⅱ-36　明黄色微砂
Ⅱ-37　白色細砂
Ⅱ-38　暗黄灰褐色粘質シルト（木炭粒、径10cm程度の円礫若干混入）
Ⅱ-39　黒褐色シルト（木炭、焼土多）
Ⅱ-40　黄灰色シルト微砂（木炭粒が少量混入）
Ⅱ-41　明黄色シルト（近世基盤層）

Ⅲ-1　淡灰色微砂シルト
Ⅲ-2　暗橙色微砂シルト
Ⅲ-3　明黄橙色微砂シルト
Ⅲ-4　橙灰色シルト（鋤床層）

Ⅳ-1　暗灰色微砂シルト（土器細片混在）
Ⅳ-2　暗褐色シルト微砂（土器片混在Ⅳ-1より少ない）
Ⅳ-3　黒褐色シルト微砂
Ⅳ-4　灰褐色シルト
Ⅳ-5　淡黄灰色シルト
Ⅳ-6　灰褐色シルト
Ⅳ-7　黒褐色シルト（斜面堆積）
Ⅳ-8　黒褐色シルト（Ⅴ-1ブロック土混在）
Ⅳ-9　褐色シルト微砂（古墳・弥生の包含層）
Ⅳ-10　淡灰褐色粘質微砂シルト（マンガン沈着、土器細片少量入る、包含層、西半よりうすい）
Ⅳ-11　淡黄灰色シルト微砂（よくしまる、弥生・古墳の基盤層）

Ⅴ-1　黄色シルト微砂
Ⅴ-5　淡青灰色微砂（基盤層）

遺構埋土

（Pit）
1　暗灰色シルト（木炭粒多）
2　黄色シルト
3　橙灰色微砂シルト
4　明黄灰色微砂シルト

（溝2）
5　淡黄色微砂
6　淡灰色微砂シルト（円礫多量）
7　明黄色シルト微砂と灰色シルト微砂のラミナ
8　灰色シルト微砂（礫若干）
9　黒褐色粗砂と明黄色粘土の混合層［裏込め埋土に対応］
10　灰褐色粘質シルト（花崗岩細粒若干）［裏込め埋土に対応］
11　灰色シルト微砂（鉄分沈着）［裏込め埋土に対応］
12　灰色微砂シルトと黄灰色シルトのラミナ層（木炭粒混在）
13　灰色微砂シルト（木炭粒混在）

（溝11）
14　橙色シルトと灰色シルトの混合層

（Pit）
15　明黄灰色微砂シルト（27層の境目付近に焼土粒混入）
16　黄灰色微砂（木炭粒多量）

（Pit）
17　灰色シルト・橙色シルト・黄白色シルトの混在層

（Pit）
18　橙黄色微砂
19　黒褐色微砂（角礫・木炭粒多）

（Pit）
20　淡灰色土及び明黄色微砂（小円礫及び木炭粒多）

（Pit）
21　淡黄灰色シルト（木炭粒・円礫若干混入）
22　黄白色粘土シルト

（Pit）
23　暗黄橙色粗砂混じり微砂と明黄灰色粘土の混合層

（Pit）
24　黄白色微砂細砂（円礫多量）
25　灰褐色シルト微砂（灰白色微砂混入）
26　黒褐色粘土（一部グライ化）
27　灰黄色微砂シルト
28　灰色粗砂と明橙色粗砂の互層
29　灰色粘土と褐色粘土の混合層
30　橙色粗砂
31　暗黄灰色粗砂（Ⅱ-64層との境目に小円礫集中）
32　灰色粘土
33　暗灰色粘土と橙色微砂の混合層（土器細片・焼土・木炭粒多）
34　暗灰色シルト微砂（木炭粒多）

（Pit）
35　黄白色微砂
36　灰褐色シルト微砂（円礫若干混入）

（Pit）
37　淡黄灰色微砂粗砂
38　黒褐色粘土（一部グライ化）

（Pit）
39　暗灰色粘土
40　黄灰色粘土

（Pit）
41　褐色シルト（灰色粘土が帯状に入る）

（Pit）
42　淡灰色シルト
43　淡灰橙色シルト

（Pit）
44　黒褐灰色粘質シルト

（溝6）
45　暗褐色シルト

（溝4c）
46　暗灰褐色微砂シルト

（溝14）
47　黄褐灰色微砂シルト
48　褐灰色微砂シルト

（溝8）
49　灰褐色微砂シルト（鉄分沈着）
50　暗褐色シルト

（溝9）
51　灰褐色微砂シルト
52　暗褐色微砂シルト（鉄分沈着）
53　淡灰褐色微砂シルト
54　暗褐灰色微砂シルト
55　灰色微砂（マンガン粒沈着）
56　淡褐色微砂シルト

（P197）
57　褐色粘質シルト（焼土、木炭粒の若干含む）
58　淡灰黄色微砂シルト（やや粘性あり）
59　暗黄色微砂
60　暗黄色微砂（15層より粒子大）
61　暗褐黄色微砂シルト

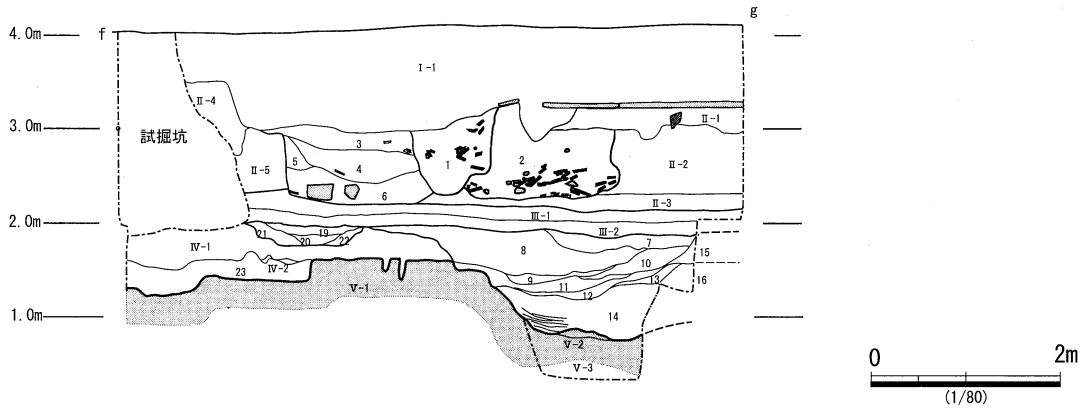
（P184）
62　暗黄色微砂
63　暗黄灰褐色微砂シルト（木炭粒多量に入る）

（P244）
64　暗黄褐色シルト（木炭、焼土粒若干含む）
65　暗黄色シルト
66　灰褐色シルト微砂（かなり砂粒が多い）（木炭粒多量に混入）
67　灰色シルト

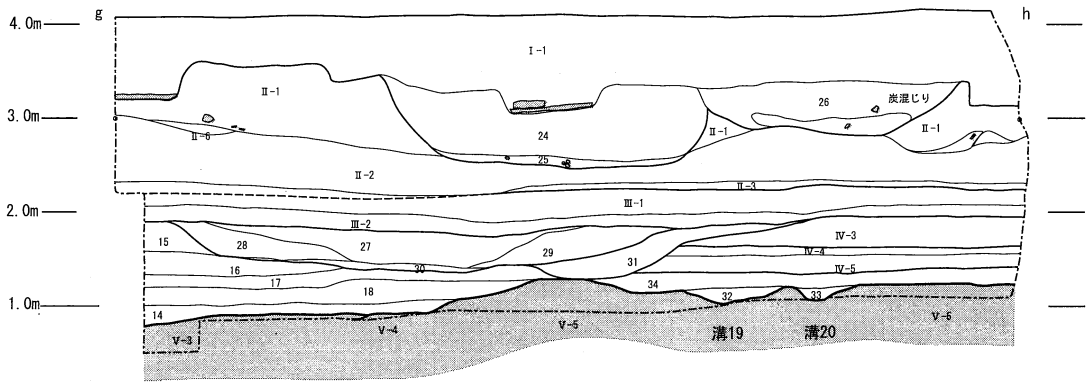
（低湿地堆積土層）
68　黒褐色粘質シルト
69　黒褐色シルト微砂（細砂粒混入）
70　黒灰色粘土

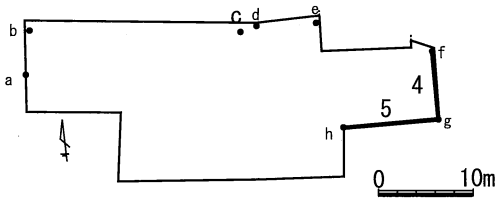
第8図　土層1・2・3（1/80）

土層4



土層5





土層図位置

Ⅰ－１　現代基礎廃材および造成土

Ⅱ－１　暗褐色細砂（炭混じり）
Ⅱ－２　淡褐色微砂シルト［近世造成］
Ⅱ－３　黄褐色シルト
Ⅱ－４　褐色粘質シルト
（ごく新しい近世ゴミ穴の可能性有り）
Ⅱ－５　黄橙褐色シルト微砂（近世基盤層）
Ⅱ－６　暗黄褐色粗砂［近世造成］

Ⅲ－１　淡灰黄色粘土（中世水田層）
Ⅲ－２　橙黄灰色粘土（鋤床）

Ⅳ－１　暗灰褐色シルト（弥生・古墳包含層）
Ⅳ－２　黄灰色シルト
Ⅳ－３　暗黄灰褐色微砂
Ⅳ－４　明灰褐色微砂
Ⅳ－５　明黒褐色微砂

Ⅴ－１　黄灰色シルト微砂
Ⅴ－２　明青色微砂
Ⅴ－３　黒褐色粘質土
Ⅴ－４　黄灰褐色粘質土
Ⅴ－５　灰白色粗砂

遺構埋土

（Pit）
1　黄灰褐色微砂シルト（瓦片含）

（P179）
2　灰褐色微砂シルト（瓦片多量含）

（P204）
3　橙黄褐色微砂（瓦片若干）
4　明黄色微砂（瓦片少量含）
5　明黄褐色微砂細砂
6　褐灰色微砂＋シルト（瓦片、割石混入）

（溝16）
7　淡灰色微砂シルト（鉄分帯状に沈着）
8　灰色微砂シルト（鉄分、マンガン帯状に沈着）
9　灰色シルト微砂＋黄色粗砂の混合層
10　淡灰色シルト（鉄分粒状に沈着）
11　灰色粘質シルト（鉄分帯状に沈着）
12　黄白色微砂＋灰褐色粘質シルト混合層
13　灰色シルト微砂
（上方にマンガン、下方に鉄分沈着）
14　灰褐色粘質シルト
（木片腐食したものまばらに混入）
15　灰褐色シルト微砂
16　淡灰（褐）色細砂
17　淡灰褐色粗砂
18　淡黄灰色シルト

（P15）
19　暗黄色微砂
20　暗黄色微砂（マンガン多量に沈着）
21　暗灰褐色シルト＋暗黄色微砂
22　暗灰褐色シルト

（低湿地堆積）
23　暗褐色シルト（黄色微砂が細にブロックで入る）

（P187）
24　黄褐色粗砂
25　淡灰色微砂（炭混じり）

（Pit）
26　淡黄褐色砂質土

（溝16上層落ち込み）
27　灰白色細砂
28　灰白色細砂
29　暗灰褐色微砂
30　橙灰褐色砂質土（鉄分含む）
31　灰褐色シルト

（溝19）
32　淡黒灰色シルト

（溝20）
33　淡黒灰色シルト

（低湿地堆積）
34　黒灰褐色微砂

第９図　土層４・５（1/80）

2　近現代

近現代の遺構は、解体校舎の基礎及び地中梁が縦横に施されていたため、遺構の残存状況は概して良好ではなかった。調査区内からは、基礎杭、梁跡等旧建物関連と、その基礎掘削による損壊を免れた井戸、石敷、土坑等が検出された。

a) 校舎基礎

二種の杭跡が検出された。コンクリートパイル杭と木杭の二種である。

コンクリート杭跡

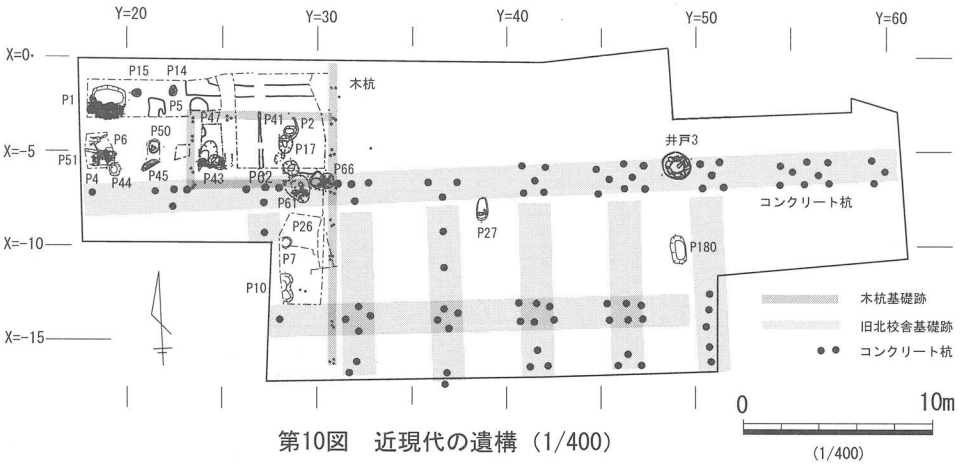
直径30cm程のコンクリートパイル杭で、今回解体撤去された北校舎[昭和33年(1958)建築] の基礎杭である。加重のかかる柱等の個所は、四隅と中央部と5本杭を打ち込んでおり、地中梁部分は単体で打ち込んでいるだけである。基礎梁は第10図のように配置されており、基礎及び梁底には砂利を敷きセメントで補強していた。

木杭

もう一種は、直径10cm程の木杭群。3本一単位で検出されている。杭の検出される部分には筋堀が掘られ、円礫ないし礫が充填されていた。丁寧に作事された建物基礎であろう。この杭は西半部に限って検出され東半部には見いだせない。当木杭の時期は、出土物からの限定は困難であった。しかし、これら木杭の検出が、後述する道状遺構から西側に限られることから、城下町の区画が機能していて、その内に建築された施設類の建物基礎であると想定できる。検出時の土層から判断すると、戦前に遡りしかも近世溝2よりも新しいことが明らかであるため、女子師範学校関連の建物基礎と想定した。第２次調査区からも同様の杭跡が検出され、こちらは女子師範学校関連の建物配置と一致する。当基礎杭も女子師範学校関連の建物の一部ではあろう。

b) その他の遺構

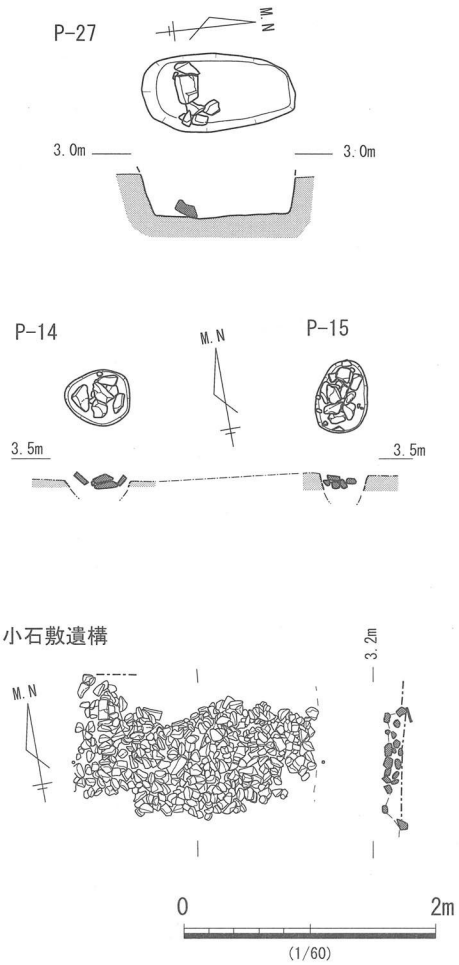
学校造成土の除去後に検出される遺構に、井戸や土坑、柱穴跡等がある。西半部に集中するのは、学校建物の基礎による損壊が及ばなかったためであり、深めの遺構や基礎梁外の遺構が検出されてい



第10図　近現代の遺構（1/400）

る。大半は遺物を含まず年代の確定が困難であるが、西半部においては、溝2の埋没後に形成された遺構であることが確かな一群である。溝2の廃絶年代は、外堀への排水が意味を為さなくなった時期、すなわち外堀の埋立、1875(明治8)年以降のことであり、また木杭基礎跡設置の前であるから、近代の初期、出土物では江戸末との区別が困難な時期のものであろう。

西半部においては、小石のつまった土坑や柱穴跡などの所在が特徴である。これら遺構は集中と配列性が窺えることから、建物や関連施設が配置されていたであろう。しかし保存状況等から全体の復元はできなかった。



第 11 図　その他の遺構 (1/60)

P27（第 11 図上）

座標(-8.1、38.7)にある長さ1.2m、幅0.57m、深さは検出面から0.35mを測る土坑。底に人頭大の角石が置かれており、中世墓の様相を呈している。しかし、素焼土管片が埋土中に混在していたこと、この素焼土管と同類のものが井戸3からも出土していることから近現代の遺構と判断した。座標(-10、49)のP180も、瓦片、肥前磁器急須、備前匣鉢、土師質土器等が出土しているが、凸レンズも出土しているので同様の時期の土坑と判断した。両者とも性格等は不明である。

柱列（第 11 図中）

土坑、柱穴跡には小円礫が詰まった遺構が散見される。その中で一連の柱穴と判断されるのが、座標(-1.8、20.5 ～ 22.5)のP14・P15である。両者とも径40cmほどの穴で、柱心心間が1.9m。小石が詰まっていて、礎石の詰石のように見える。周辺にあるP43 ～ P45等も同類であるが規則性は窺えず、建物の復元には至っていない。後述の小石敷遺構との関連性があるのかもしれない。

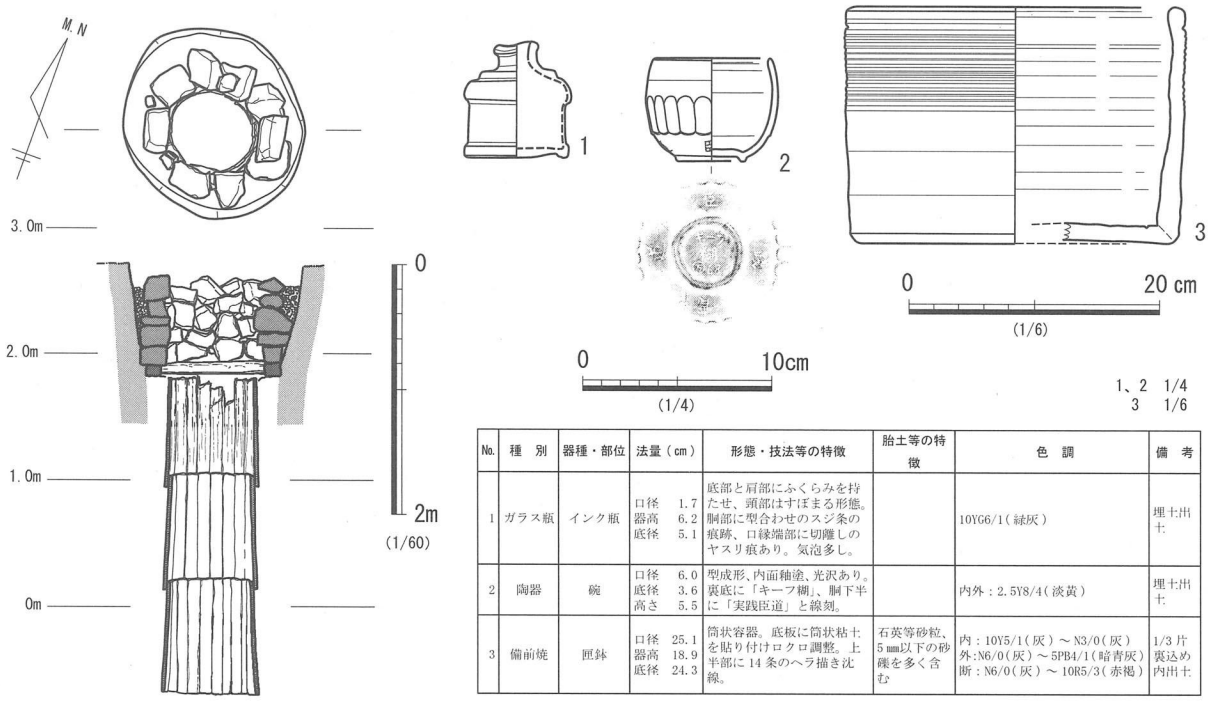
小石敷遺構（第 11 図下）

溝2の上層部ないしその周辺部に検出される遺構である。座標(-3、18 ～ 20)にかけて、小円礫や小石が2ないし3段にわたり集中して検出され、あたかも敷かれたような状況を呈する。下層の溝2との関連性はなく、その落ち込みに、ブロックとして残存した状況である。後の基礎や土坑などで損壊している。水処理施設の土間か廊下など、ある範囲に敷設された痕跡と判断している。近代以降の学校関連遺構の一部であろう。

井戸 3（第 12 図）

座標(-5.8、49)から検出された石積の井戸。円筒形に掘り込み、下半には桶を三段積み上げ井筒とし、最下部は湧水層である砂層に達している。桶最上段端部に角柱を井桁に組み、さらに人頭大の角礫を、検出時で、4 ～ 5段に積み上げている。石積の背後には円礫を充填。また、井戸内から豊島石の残欠が出土することから、石組みの上部に豊島石製の井筒が据えられていたのであろう。

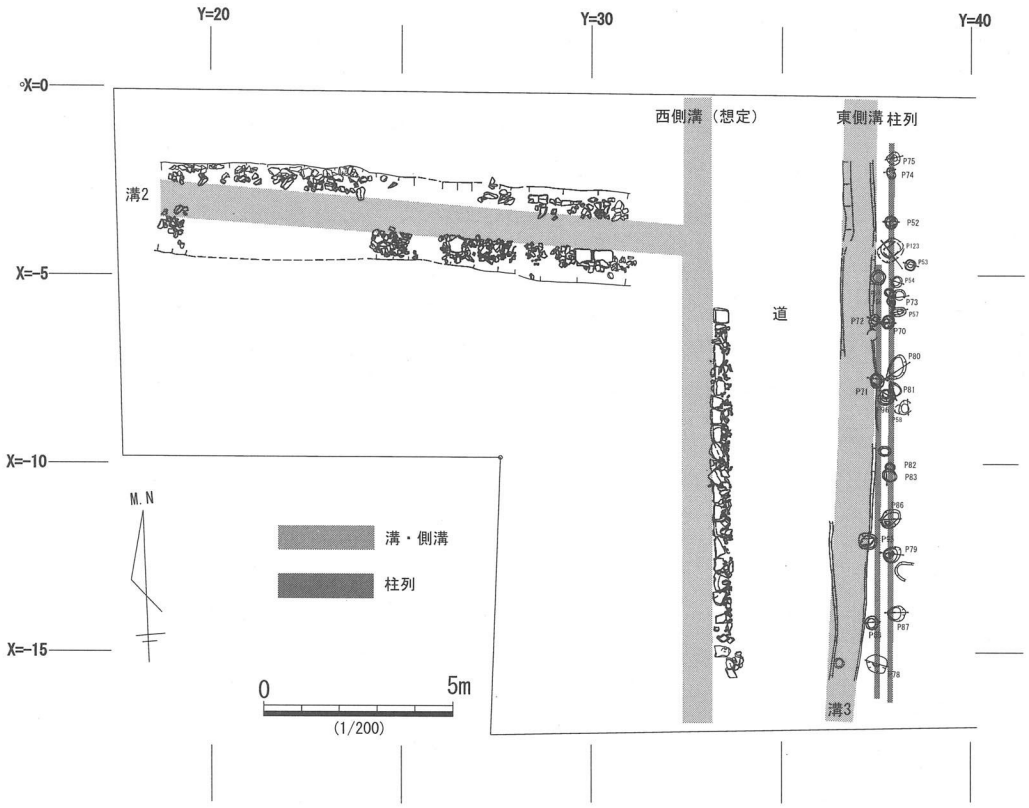
井戸内は、瓦礫・建物廃材が投棄された状況で検出された。瓦は橙色を帯びた桟瓦で熱を被けている



No.	種　別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調	備　考
1	ガラス瓶	インク瓶	口径　1.7 器高　6.2 底径　5.1	底部と肩部にふくらみを持たせ、頭部はすぼまる形態。胴部に型合わせのスジ条の痕跡、口縁端部に切離しのヤスリ痕あり。気泡多し。		10YG6/1（緑灰）	埋土出土
2	陶器	碗	口径　6.0 底径　3.6 高さ　5.5	型成形、内面釉塗、光沢あり。裏底に「キーフ糊」、胴下半に「実踐臣道」と線刻。		内外：2.5Y8/4（淡黄）	埋土出土
3	備前焼	匣鉢	口径　25.1 器高　18.9 底径　24.3	筒状容器。底板に筒状粘土を貼り付けロクロ調整。上半部に14条のヘラ描き沈線。	石英等砂粒、5㎜以下の砂礫を多く含む	内：10Y5/1（灰）～N3/0（灰） 外：N6/0（灰）～5PB4/1（暗青灰） 断：N6/0（灰）～10R5/3（赤褐）	1/3片裏込め内出土

第12図　井戸3（1/60）と出土遺物（1/4・1/6）

状況である。石積み背後の埋め土から江戸期の陶磁器、土師器細片や備前焼水桶等が出土するが、ガラス片も見られる。埋土からも陶器製の糊容器やインク瓶が出土していることから、井戸の掘削が江戸期に遡る可能性を否定できないものの、石積部分は近代に改修されていることは明らかである。恐らく近代以降までも機能していた井戸であろう。



第13図　道・側溝・溝と柱列(1/200)

３　近世

a) 遺構面の概要

近世遺構は基本層序でも述べたように、土層的にはおよそ3面ほど確認できる。しかし、基礎などの影響が顕著で、各遺構の検出面を同一水準で確認する作業は困難であった。そのため、上層部検出遺構を近世遺構面Ⅰとし、下半部および最下層検出遺構を近世遺構面Ⅱとして紹介する。遺構面の分離基準は、おおよそ標高3m辺りを目安にし、それより高いレベルでの検出は近世遺構面Ⅰ、それ以下を近世遺構面Ⅱとする。ただし、東半においては基礎掘削による遺構面の損壊が著しく、標高3mあたりはすでに掘削されている。近世遺構面Ⅰは西半部の一部が良好な保存状態であったので、その部分に集中して表現されているが、損壊を免れていたためで、土地利用の実態を示すものではない。また、遺構年代の帰属については、出土遺物の検討により最終的には決定されよう。

近世遺構面ⅠとⅡを分離し、かつ調査区全体の理解に有効であったのは、石列と石組み遺構（第13図）である。この遺構は幕末の城下絵図[1]に描かれている道及び排水施設の場所に相当し、それら施設の一部と判断した。道状遺構、あるいは単に「道」と呼称するが、この道は中央部分に鉄製の旧水道管が埋設されており、近代に至るまで道として機能されていたことは明らかである。それが戦災復興の区画整理事業により、学校用地の中に編入され、道としては廃絶されたようだ。区画としての道は近世を通して存在していたが、その検出レベルの大半は標高3mあたりで、近世遺構面ⅠとⅡを分離するレベルの目安に近い。近世遺構面Ⅰと溝2が併存していたとすれば、近世遺構面Ⅰの年代は、遡っても1830年（十九世紀第2四半期）代まで。終末は1875年（十九世紀第3四半期）頃との想定が可能となり、近世遺構面Ⅱはそれ以前の時期となる。

当該調査区はこの道と溝とに区画されており、それぞれ別個に土地利用がなされている。両区画とも、基本的には宅地としての利用であるが、西半部はある意味公的な性格を有した土地であり、東半部は私的な屋敷地である。さらに東半部北側は廃棄土坑が重複し複雑な様相を呈している。それと比べて南側は、井戸と柱穴が検出されるだけで、廃棄土坑は認められない。廃棄土坑は屋敷を避けて設置されるから、北半に庭、そして南半に建物が建てられていたと推定できる。

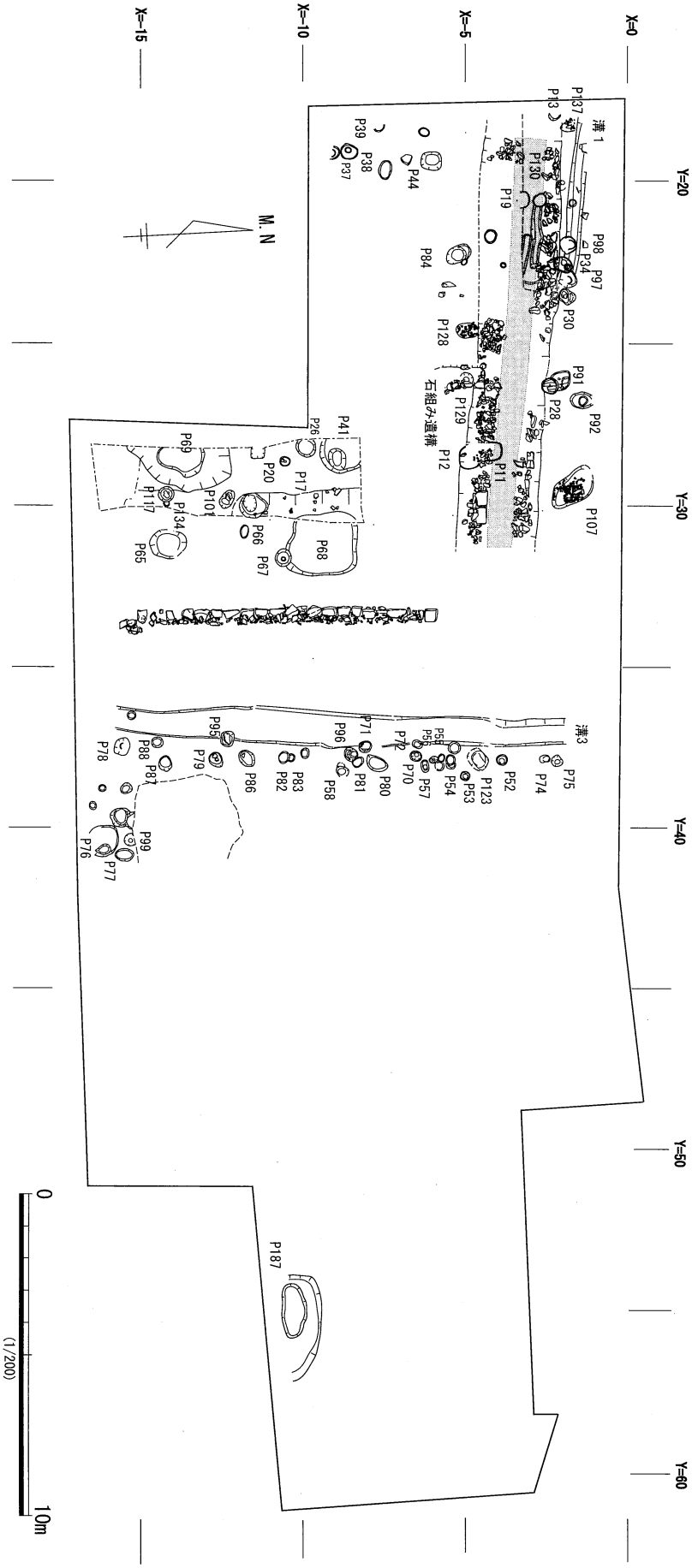
道路東側溝の周辺には、柱痕跡が直線上に密に検出されるが、その状況は溝と屋敷地を区画する板塀あるいは柵を巡らせていたであろうし、その板塀あるいは柵に伴う杭が打たれていたと想定できる。また、井戸4･5は所在敷地が異なるが、井筒を三段重ね、石積は検出されないなど、規模･構造とも類似している。この掘削個所は、古代の河道跡の中あるいは沿うかのように設置されていて、地下水が得られやすい筋道を選定していたことを示している。

b) 近世遺構面Ⅰ（第14図）

道状遺構（第15図）

道状遺構は、Y=33.5ラインに沿って南北方向に、X=-6 ～ -15の範囲で検出された石列を主とした遺構である。当初石列西側に、モルタルで補修された断面U形の溝が検出され、さらに東側には鉄製水道管が埋められた跡もあったことから、現代建物の基礎および構造物の一部と認識していた。ところが、溝2の存在が明らかになるにつれ、その関連性から幕末に遡る年代の遺構であることが明らかになってきた。その後、東方に溝3が、その脇に多数の柱穴痕が検出された。ここにいたり、石列と溝2･3を一体的に理解し、道状遺構と把握することとなった。

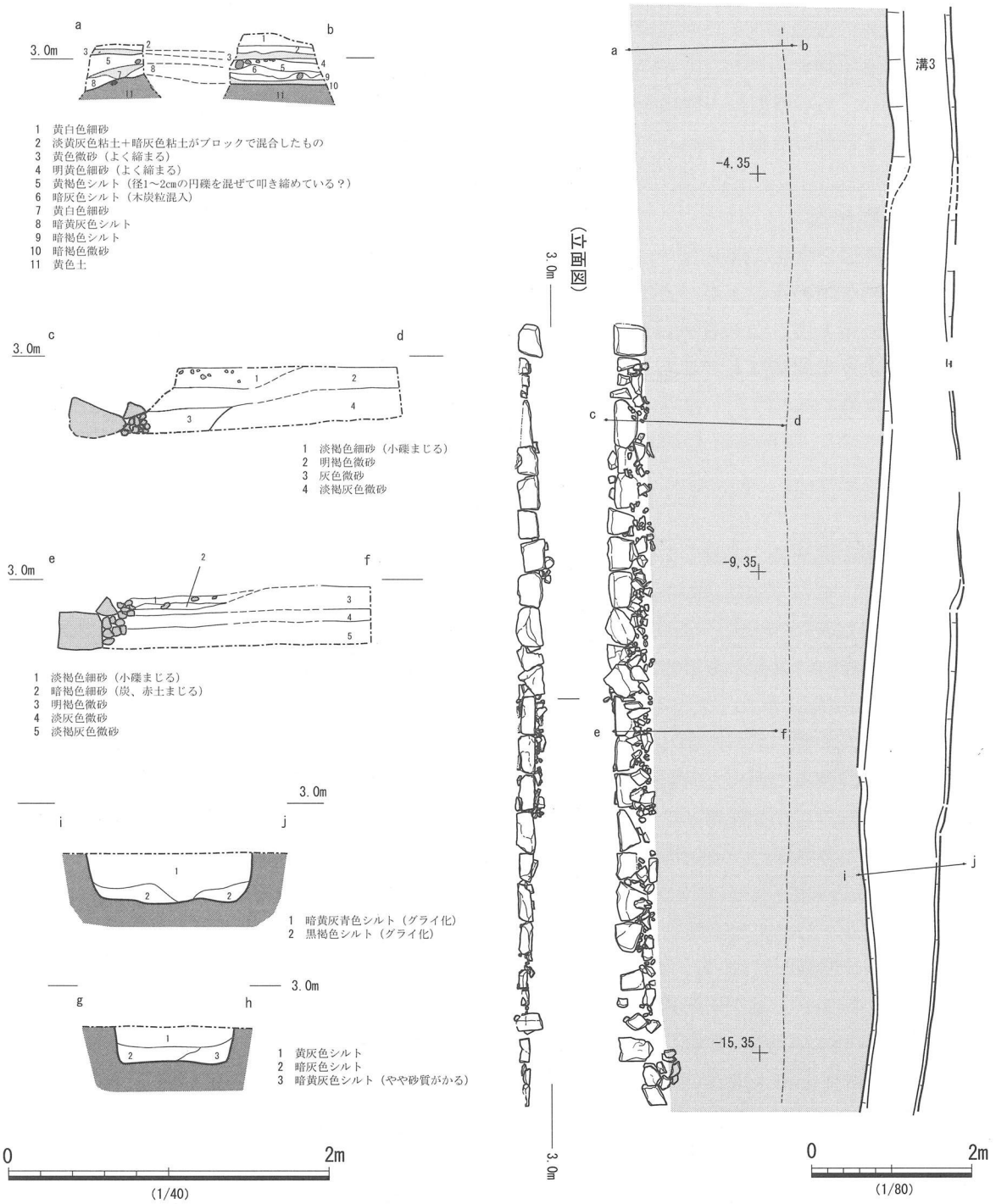
石列は、検出時の状況では標高2.8mあたりで石の上端を揃えて整然と据えている。当初から一段積



第14図　近世遺構面Ⅰ（1/200）

みであったのかはわからない。しかし部分的に10cm程の段差が生じている個所も見られ、道の造成土層が標高3m付近までは確認されるようなので、路肩まで石で補強されていたとして、少なくとももう一段ほど積み上げられていた可能性はある。一方、第15図e-f断面に示されているように、背後の掘方に小礫を充填し、上部に小角礫を噛ませ造成土の流出を防いでいたとも想定できる。どちらにせよ、道の維持管理に対して配慮した施工を実施している。ただし石で養生されているのは西側だけであり、東側には石が据えられていた形跡もない。石の基底部の高さと溝3の底の高さとはおおむね標高2.5m付近と一致し、両者とも道の側溝を構成していたことが窺える。

前述したように宝永5年(1708)の「岡山内曲輪絵図」の当該地付近には二間と書入れがあり、道幅が約



第15図　道状遺構（1/80）と断面（1/40）

4m弱であったことがわかる。また、当地にいまだ藩学校が描かれていない時期の「備前国岡山城下之図」にもやはり道幅二間と註記されている。町割形成から一貫して道幅二間とされていたことがよく理解できる。さらに、この図には道の両側に溝らしき表現のある個所も描かれており注目に値する。

道状遺構は、石列外端から溝3西端までおよそ3.0～3.4mを測り、計測点の選定によっては絵図の記載と近似する値を示す。この点からも石列と、恐らく石列に沿ってあったであろう溝と溝3は、道路とその付設施設と判断できる。

この道は、寛永9年(1632)の「岡山古図」にすでに描かれていることから、外堀が掘削され城内の整備が進行していたころには、道の原形は存在していたと判断できる。ただ、当初から石列で補強されていたかどうかはわからない。石列は道の西端に築かれているものの、東側には認められない。絵図類によると、西側の区画は古くは学校奉行の屋敷や池田主膳殿御屋敷、幕末には「屋敷方請込御長屋」と記載されている土地であった。土地所有の形態がどうなっていたか詳細は不明であるが、東側の私的な屋敷地に対し、ある程度公の性格を持った敷地であったろう。屋敷地の管理形態が道の整備・管理状況にも反映していたのであろうか。

溝3と柱列（第16図）

Y=38ライン周辺を南北に溝3に沿って検出される柱穴群は、厳密な規則性は希薄だが、おおよそ柱列1と柱列2の配列を認めることができる。柱穴群のなかには径20cmほどの柱痕を有するものが少なからず認められる。そして、この柱列は道と屋敷地を遮蔽する施設の痕跡であろうが、柱穴の状況から、板塀か柵列のような簡略なものであったと思われる。たび重なる修繕により雑然と密集して検出される状況になったのであろう。ちなみに当該地は「備前岡山地理家宅一枚図」(文久3年)に「久保田市太夫」邸と記載されており、久保田市太夫は慶應三年改めの「岡山藩御侍帳」[4]に180石扶持と記載されている。

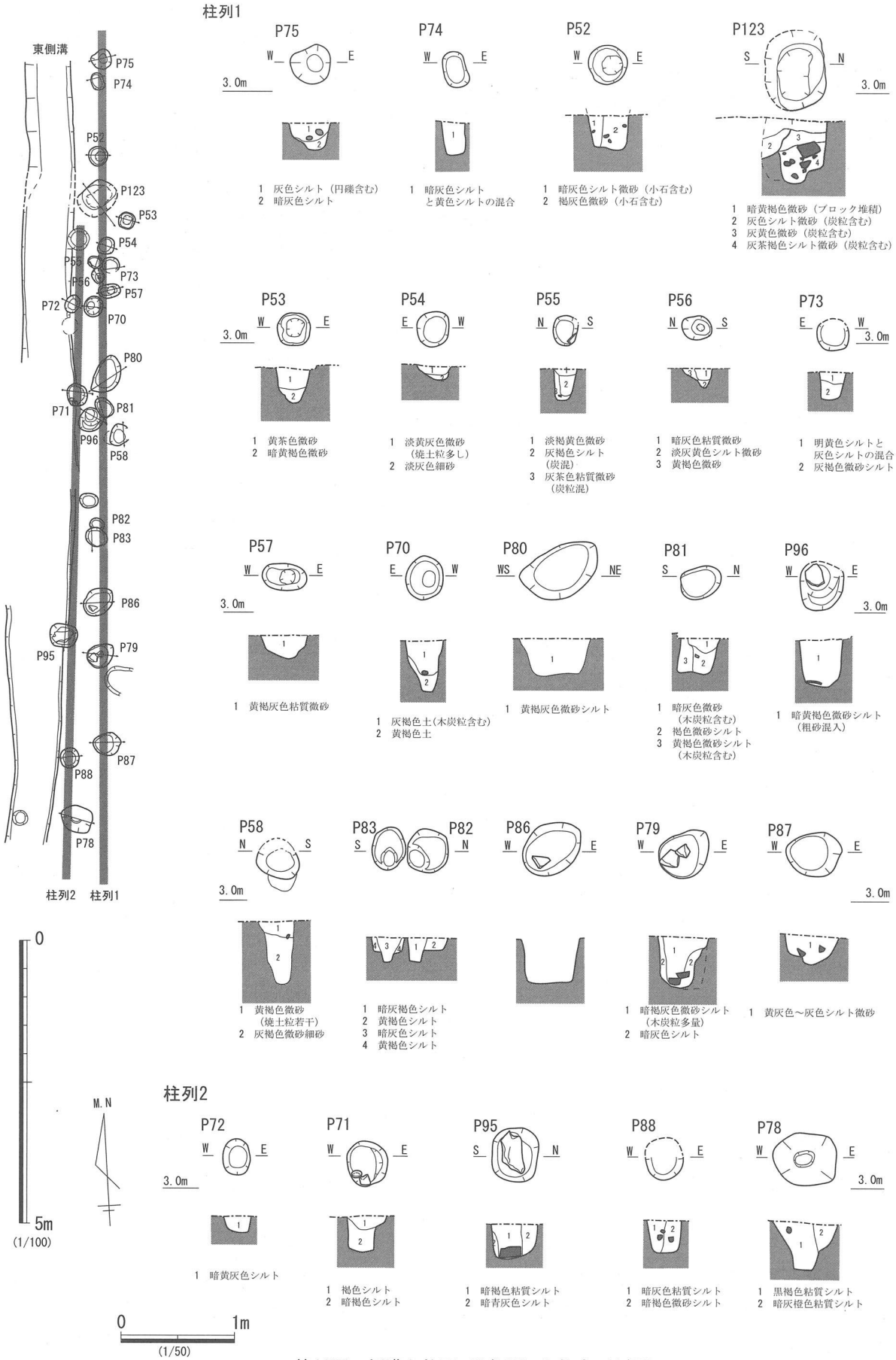
溝2（第17図）

近現代造成土の除去後、座標(-3～-4、19～31)にかけて検出される石列を伴った溝。道状遺構とはほぼ直交して、東西方向に延びる。道と交差する部分は、後の基礎で損壊し詳らかではない。溝は埋没放棄された状況ではなく、石列の石などが撤去された後に、意識的に埋められた状況であった。さらにその後、溝内に大量の廃棄物が投棄された。廃棄物を除去した状況が、断面2・4である。

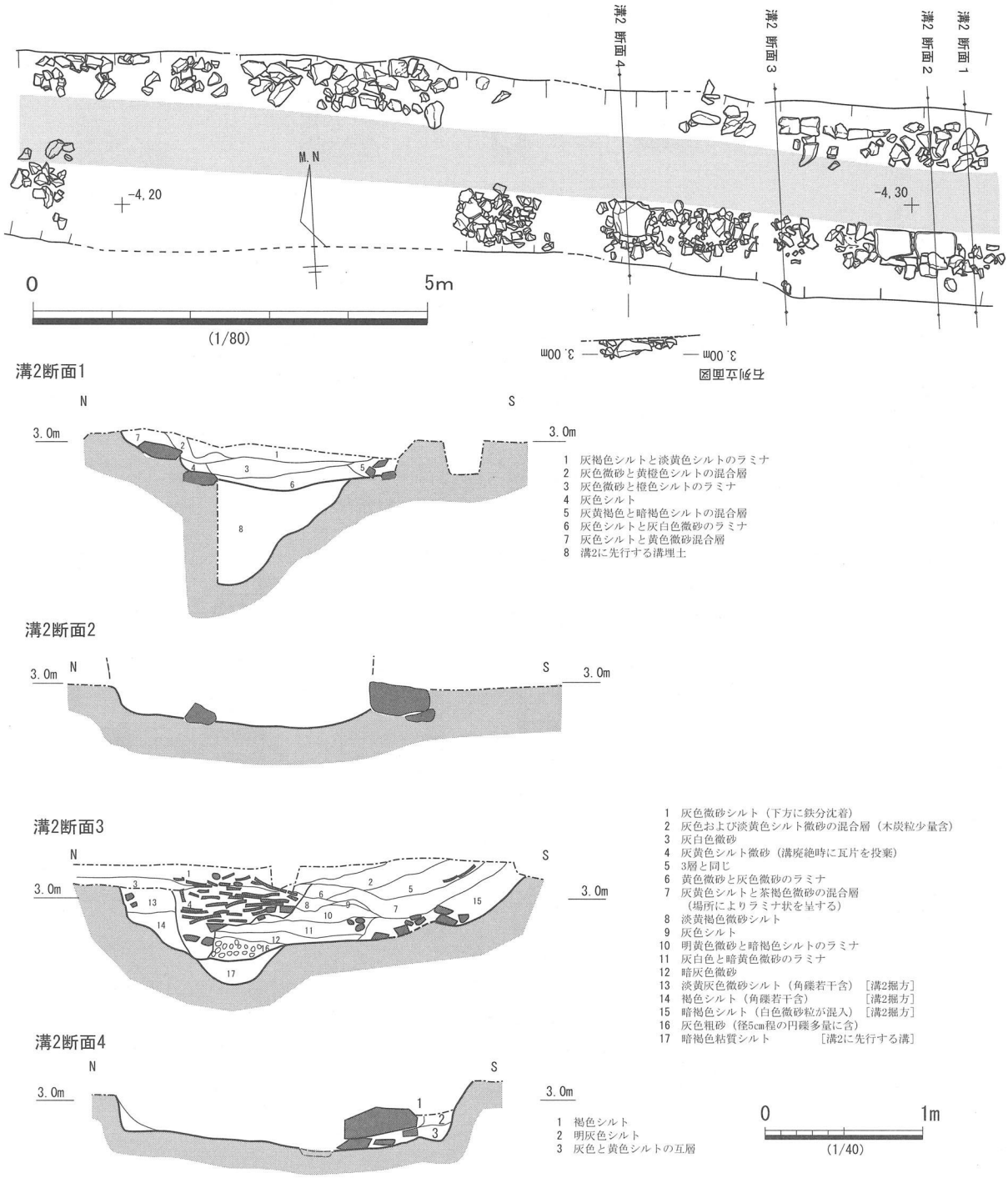
石列は、溝の最下底に拳大の栗石を敷き、その上に30cm四方厚さ20cm程の平石を小口積で据えている。平面図のとおり石の残存状況が悪く、当初の石積の様子を窺い知ることはできないが、溝掘方の高さからすると、二段積みであった可能性がある。石は道の石列の状況と類似しており、同時代性ならびに一連の普請であることを推測させる。溝2底の水準は標高約2.8m、道の側溝底は標高約2.6m程となっており、道側溝の方が深い。道側溝→溝2→外堀へと排水されていたと単純には想定できないことになるが、溝2はその方向性から外堀を指向していたのは確実であり、当地域の排水のための施設であることも確かであろう。それが放棄整理されたのは、外堀が埋められたことと連動した経緯と考えられる。

断面1(8)および断面3(17)から、溝2と重複する位置に、溝2に先行する溝の存在が想定できる。外堀－排水溝－道の関係が、城下町形成初期にまで遡り、連綿と踏襲されていたことが岡山中央小学校での調査[5]で確認されている。外堀の改修に伴い、また排水溝も素掘りから石積へと整備された状況が判明した。同様のことが、溝2にも実施されたと考えていいだろう。

溝2埋土からは、土師質土器皿、備前焼灯明皿・擂鉢、肥前磁器、肥前陶器、砥石、土錘などがコンテナ3箱ほど出土している。日常雑器類は少なく、圧倒的な量は瓦である。瓦も大振りで焼成のしっかりしたタイプや表面にキラコを塗布した薄手で吸水率の高い瓦まで多様であるが、大半が平瓦で軒瓦は稀少。軒瓦と平瓦のうち刻印あるものを保管している。瓦は溝の凹みに大量に投棄されており、再



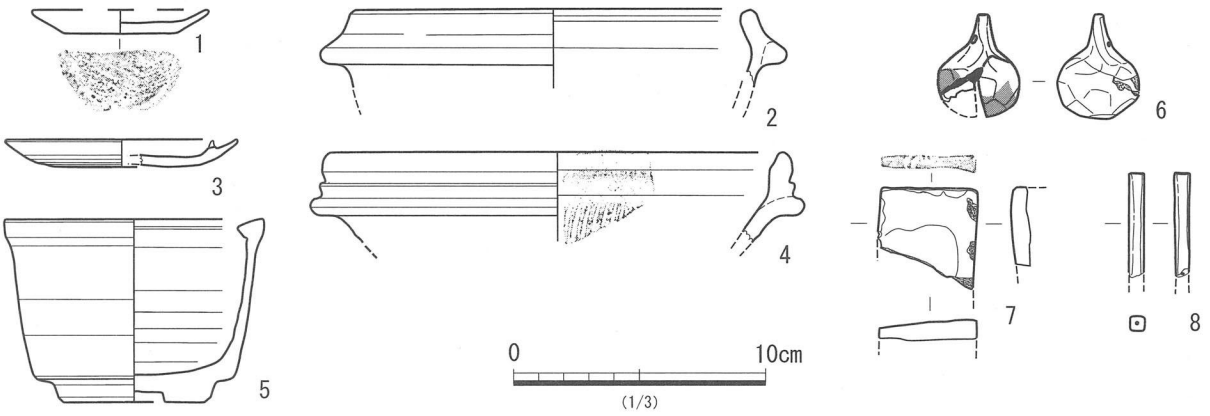
第16図　側溝と柱列（1/100）と柱穴（1/50）



第17図　溝２(1/80･1/40)

利用可能品は抽出されているにしろ、倒壊した家屋の瓦を無造作に一括廃棄した印象である。ここでは日常雑器類の代表例(第19図)と刻印(第20図)を掲載した。第18図6は土鈴。中空であり紐を通す孔が穿たれている。中空部に土玉が入っていたのであろう。実用品かミニチュアかは不明。7は砥石であるが、側面に文様を削り出している。8は中心部に針穴状の細孔あるガラス棒状製品である。

瓦刻印は、図示の15種が確認できる。軒平瓦に1･11･15、丸瓦に5･6･8･11･13、そして平瓦には1･2･3･4･5･6･7･8･9･11･12･14･15が打刻されている。軒丸瓦への打刻は今のところ確認されていないが、丸瓦との分離ができていないのかもしれない。しかし、軒丸瓦は別に、珠文の位置に「大･鍵形文」などが陽刻される例があるから、識別標としては打刻の必要がなかったのかもしれない。刻印の位置は、



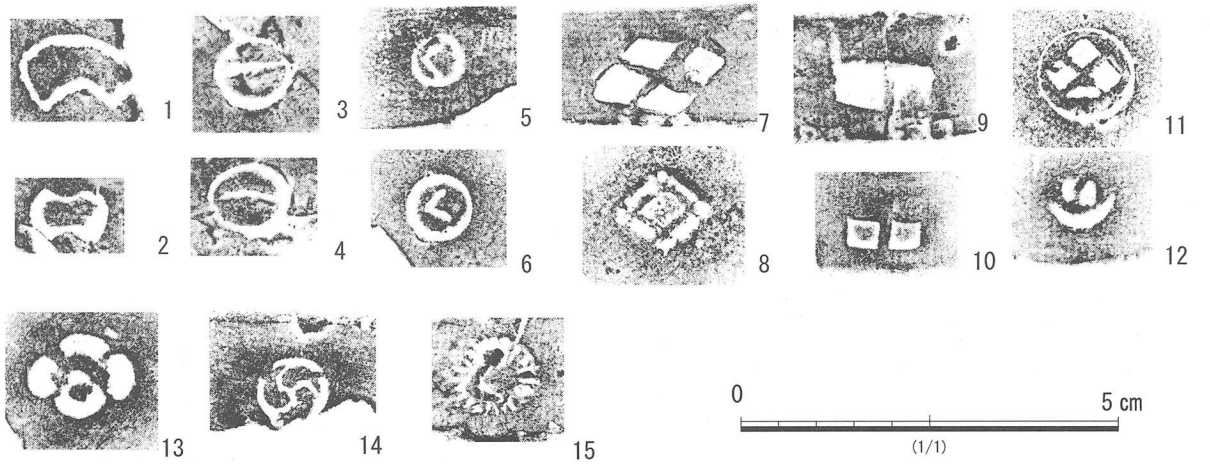
NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	口径　6.9 底径　4.4 器高　0.95	底部回転糸切り、口縁ナデ摘み上げ。	（胎土）微砂粒多く含 （焼成）良	内外：10YR8/2（灰白） 断：10YR8/2（灰白）	口縁 1/12 片
2	瓦質土器	鍔付き鍋	口径　12.0?	やや内傾する口縁、口縁屈曲部に付けられた鍔。	（胎土）雲母、長石等微砂粒多く含 （焼成）良	内外：5Y5/1（灰） 断：N7/0（灰白）	小片
3	備前焼	灯明皿	口径　9.1 底径　5.6 器高　1.1	ロクロ成形、底部ケズリ、体部ナデ調整、反りにU形の抉り。	（胎土）長石微粒多含、精良。 （焼成）良	内外：10YR3/1（黒褐） 断：5YR5/4（にぶい赤褐）	1/4 片
4	備前焼	擂鉢	—	口縁下方に拡張、凹線２条。	（胎土）2mm 以下の砂粒多く含 （焼成）良好	内：2.5YR5/2（灰赤） 外：10R4/2（灰赤） 断：10R5/2（灰赤）	小片
5	磁器・青磁	火入れ	口径　10.15 底径　5.55 高さ　7.3	ロクロ成形、蛇の目高台、角斜めケズリ、露胎。口縁内側に屈曲し肥厚。	（胎土）微砂、黒色粒含、精良。 （焼成）良好	（釉）5GY7/1（明オリーブ灰） （胎土）N8/0（灰白）	埋土 口縁 3/4 欠
6	土製品	鈴	胴部最大径　3.2 高さ　4.2	手ずくね、紐部分摘みあげ、一部スス付着。中央に 1.5mm 幅の切り込みあり。	（胎土）精良 （焼成）良	内外：2.5Y8/3（淡黄）	一部欠
7	石製品	砥石	巾　3.9 現存長　4.0	一面使用痕あり。側面に刻印状ケズリあり。	粘板岩？		
8	ガラス製品	棒？	方 0.6 × 0.6 現存長　4.2	表面銀化、中心に針大の孔		10GY6/1（緑灰）	

第 18 図　溝２出土遺物（1/3）

瓦の種類や刻印の種類により偏在性が窺われる。軒平瓦は瓦当周辺部に打刻される共通性はあるが、1は左端、15は右端である。丸瓦は背部の中央、そして平瓦は小口中央部に打刻される。11と14は小口右よりに打刻される。この印は生産者の標章であろうが、分布等は今後の課題である。

溝2も道状遺構と同時期に機能していたものである。石列の残石が検出されており、本来石積の護岸を擁していたことは確かである。それが、溝としての機能が消滅したため、石材は再利用され、溝は埋められ廃絶された。道の側溝から枝分かれした溝2は、土居を暗渠でくぐり外堀に開口し、城内の排水を担っていた。この排水溝を石積で整える様子は、同じ外堀に面した岡山中央小学校敷地内の外堀・土居・屋敷地の状況と類似[(2)]する。

岡山中央小学校敷地の様相は、文政13年(1830)の『御堀浚土居繕御普請出来絵図并品々御入用寄帳』[(3)]に記載ないし描かれていた内容と一致し、この普請が外堀全体に施されていることを示してい

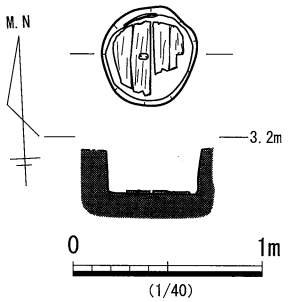


第 19 図　溝２出土瓦刻印拓影（1/1）

る。すなわち溝2及び道状遺構は、1830年以降の当地の状況を垣間見せていることになり、溝2の埋立も1875(明治8)年の外堀の埋立と同時期と想定できる。とするならば、溝2埋没後の遺構は1875年以降に、先行する遺構は1830年を遡る年代と比定できることになる。

P28(第21図)

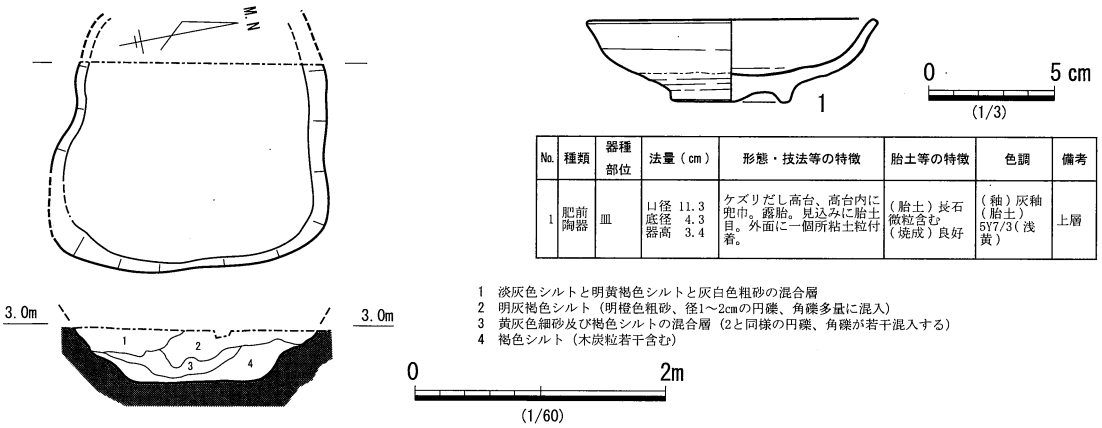
座標(-2.4、26.3)で検出された径50cm、深さ22cmの埋桶遺構。底板と側板の一部が残された状況で検出された。桶の大きさぎりぎりに掘りこまれた穴に埋められていた。内からの出土物は検出されていない。埋葬関連遺構ではなく、溝2あるいは溝1との関連性から、地中に設置された水処理施設としての水桶と判断。



第20図　P28 (1/40)

P68(第22図)

座標(-9.4、31.2)にある径2m、深さ40cm程の不定形な土坑。敷地東端に、塀に沿って掘られた廃棄土坑であろう。上層(1～3)と下層(4)とで遺物を取り上げている。細片が多く、図示の皿は特徴が捉えられる破片である。肥前陶器の皿で胎土目の痕跡が見込みに認められる。十七世紀代の特徴を示す。このほかにも肥前陶器・白磁片・土師質土器片・土錘・瓦片等が出土している。



No.	種類	器種 部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	肥前陶器	皿	口径 11.3 底径 4.3 器高 3.4	ケズリだし高台、高台内に兜巾。露胎。見込みに胎土目。外面に一個所粘土粒付着。	(胎土)長石微粒含む (焼成)良好	(釉)灰釉 (胎土)5Y7/3(浅黄)	上層

1　淡灰色シルトと明黄褐色シルトと灰白色粗砂の混合層
2　明灰褐色シルト(明橙色粗砂、径1～2cmの円礫、角礫多量に混入)
3　黄灰色細砂及び褐色シルトの混合層(2と同様の円礫、角礫が若干混入する)
4　褐色シルト(木炭粒若干含む)

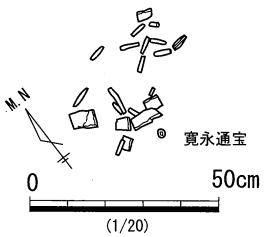
第21図　P68(1/60)と出土遺物(1/3)

土錘検出状況(第23図)

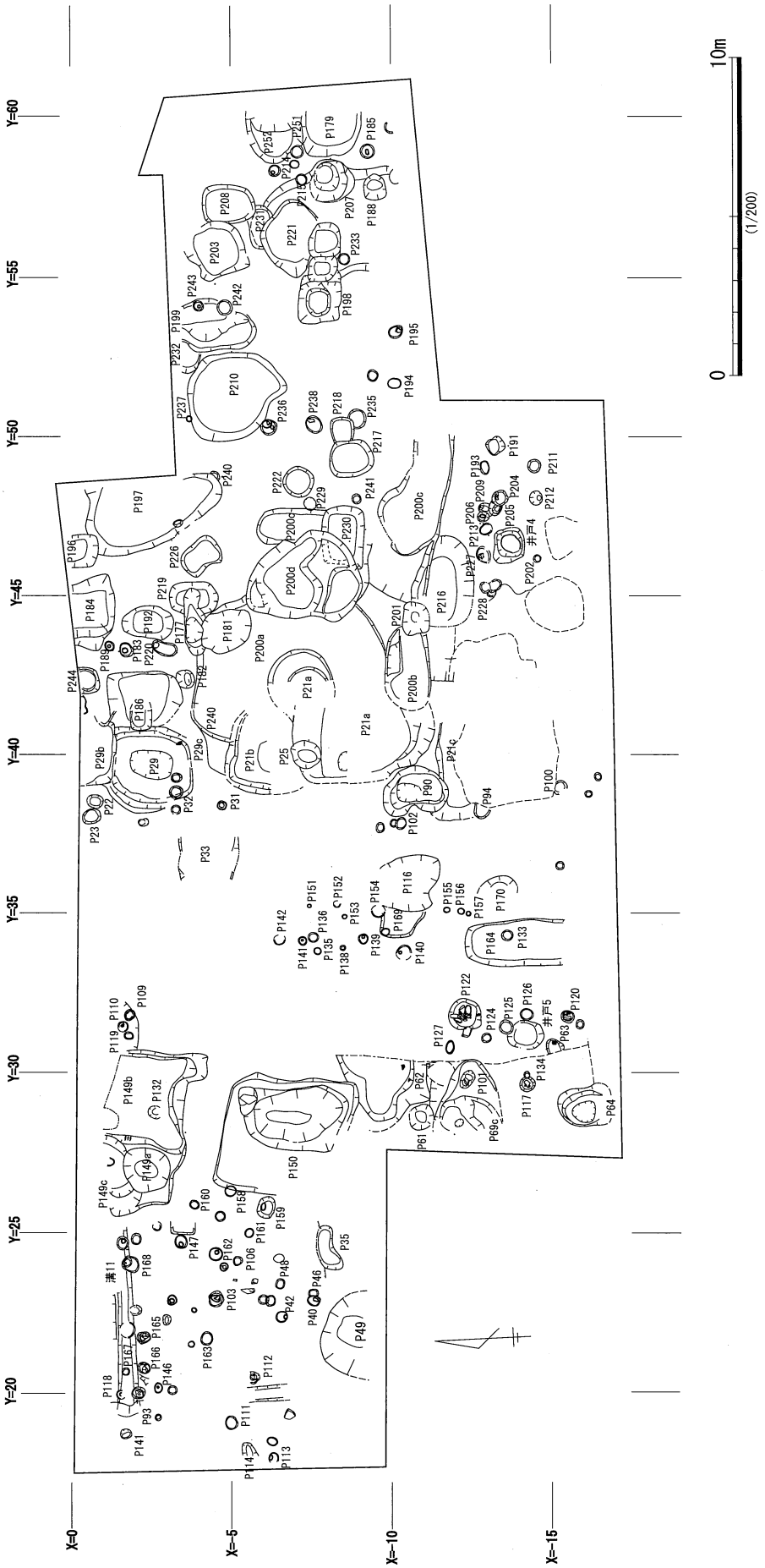
溝2の西端脇、座標(-1.3、18.6)で検出された土錘群。寛永通宝(新寛永)も直近から出土している。検出面(標高3.0m)でほぼ水平に集中して出土した。網に装着されたまま無造作に放置された状況であろう。溝周辺が日常雑具類の置き場になっていたことを示している。この下方からP137が検出されていて、土師質土器細片が出土している。出土位置が重複するが、土錘との直接的な関連性はないであろう。

溝1

溝2の西半部北側に、平行して溝1が検出されるが、途中で途切れている。検出レベルは標高3.15m、断面U形で幅50cm、検出時の深さ10cmほどの浅い溝。溝2に沿い形成された余水処理溝のようなものか。例えば、P28(埋桶)と関連性を持たせ、雨水・余水を埋桶に導き、溝2へと排水する集水枡的な設備といえようか。溝2を挟んで南側に石積遺構(石列囲い)が所在することも、この想定を後押しする。溝の両側に対峙して集水枡的な遺構が設置されていたと思われる。



第22図　土錘出土状況 (1/20)



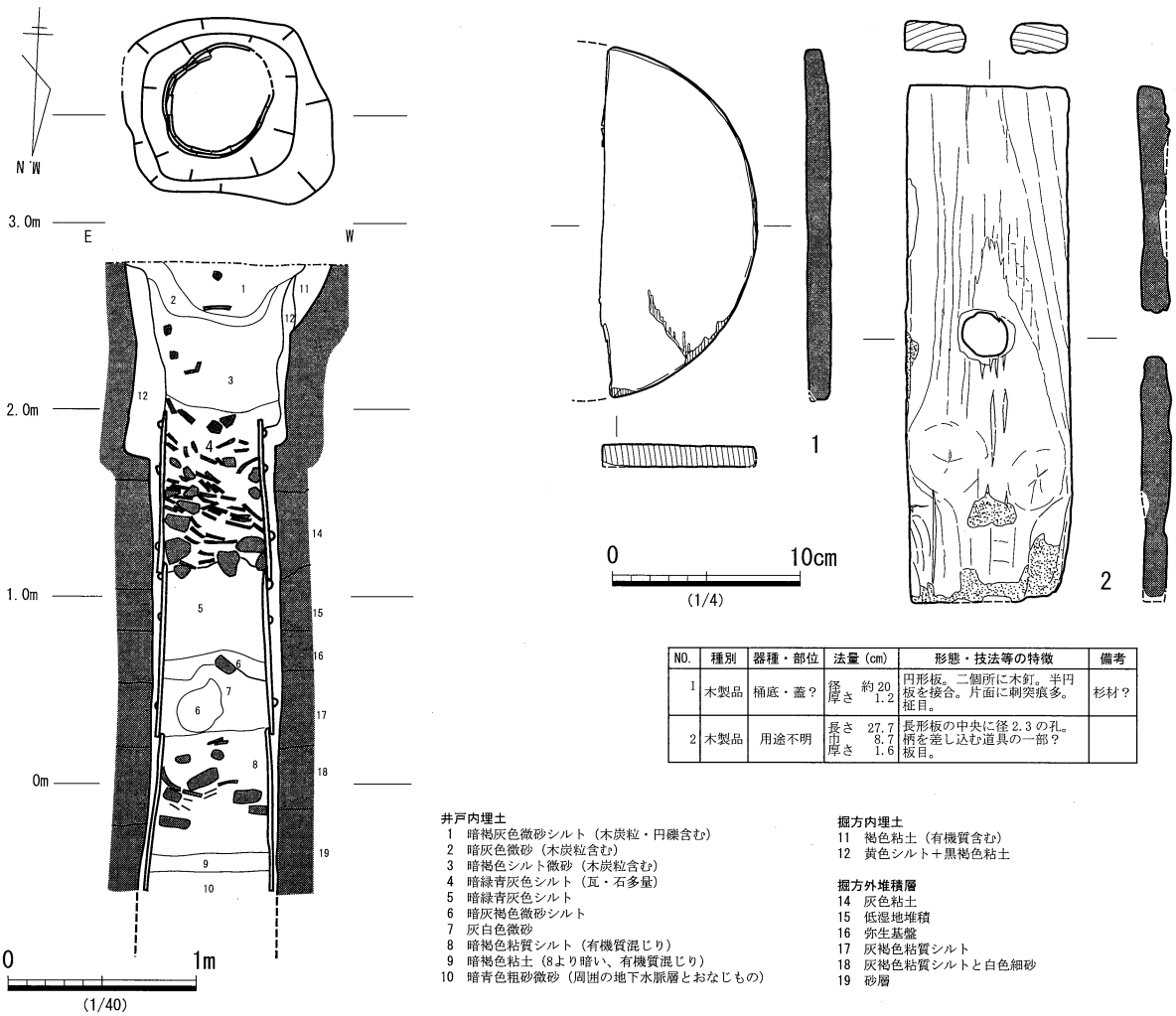
第23図　近世遺構面Ⅱ（1/200）

c ）近世遺構面Ⅱ（第 15 図）

近世遺構面Ⅱは、標高3m以下から検出される遺構を機械的に抽出している。道、溝に沿って廃棄土坑が検出される。井戸、柱穴等も検出されているが、調査区の大半を占める遺構は廃棄土坑である。雑然と配列された遺構であるが、それでも井戸は南半に、土坑は北半に集中しているように見える。廃棄土坑は屋敷地の中心を外して敷地縁辺部に設置され、井戸は屋敷の周辺に設置されていたであろうから、屋敷地南半に建物、北半は空閑地など裏手に相当していたらしい。廃棄土坑が一個所に集中し重複傾向にあるのは、当敷地において建物の所在にそれほど変化がなく、廃棄土坑を設置する場所が限られていたからであろう。

また、近世遺構面Ⅰの道や溝に沿って、この遺構面の土坑も配列しているように見えるのは、道や溝がやはり近世初頭からここに存在していたことを示している。ところが、道の石列下から土坑が検出された。道は外堀を掘削して以降一貫してこの場所に所在していたとしたが、この土坑は廃棄土坑で私的な存在である。絵図類によると、屋敷割りは若干の変動が認められるものの、道などに大きな変動はないように見える。道が拡幅されたか、あるいは修繕の時に廃材捨て場に供されたのであろうか。

これら土坑群の中でも単なる廃棄土坑でない性格の土坑もある。P198などはその例である。この土坑は長形を呈し、深さの異なる3つの土坑が重複している。炭の堆積が多く、地下に焚き口を持つ火所関連土坑であろう。



NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	備考
1	木製品	桶底・蓋？	径 約20 厚さ 1.2	円形板。二個所に木釘。半円板を接合。片面に刺突痕多。柾目。	杉材？
2	木製品	用途不明	長さ 27.7 巾 8.7 厚さ 1.6	長形板の中央に径2.3の孔。柄を差し込む道具の一部？板目。	

井戸内埋土
1　暗褐灰色微砂シルト（木炭粒・円礫含む）
2　暗灰色微砂（木炭粒含む）
3　暗褐色シルト微砂（木炭粒含む）
4　暗緑青灰色シルト（瓦・石多量）
5　暗緑青灰色シルト
6　暗灰褐色微砂シルト
7　灰白色微砂
8　暗褐色粘質シルト（有機質混じり）
9　暗褐色粘土（8より暗い、有機質混じり）
10　暗青色粗砂微砂（周囲の地下水脈層とおなじもの）

掘方内埋土
11　褐色粘土（有機質含む）
12　黄色シルト＋黒褐色粘土

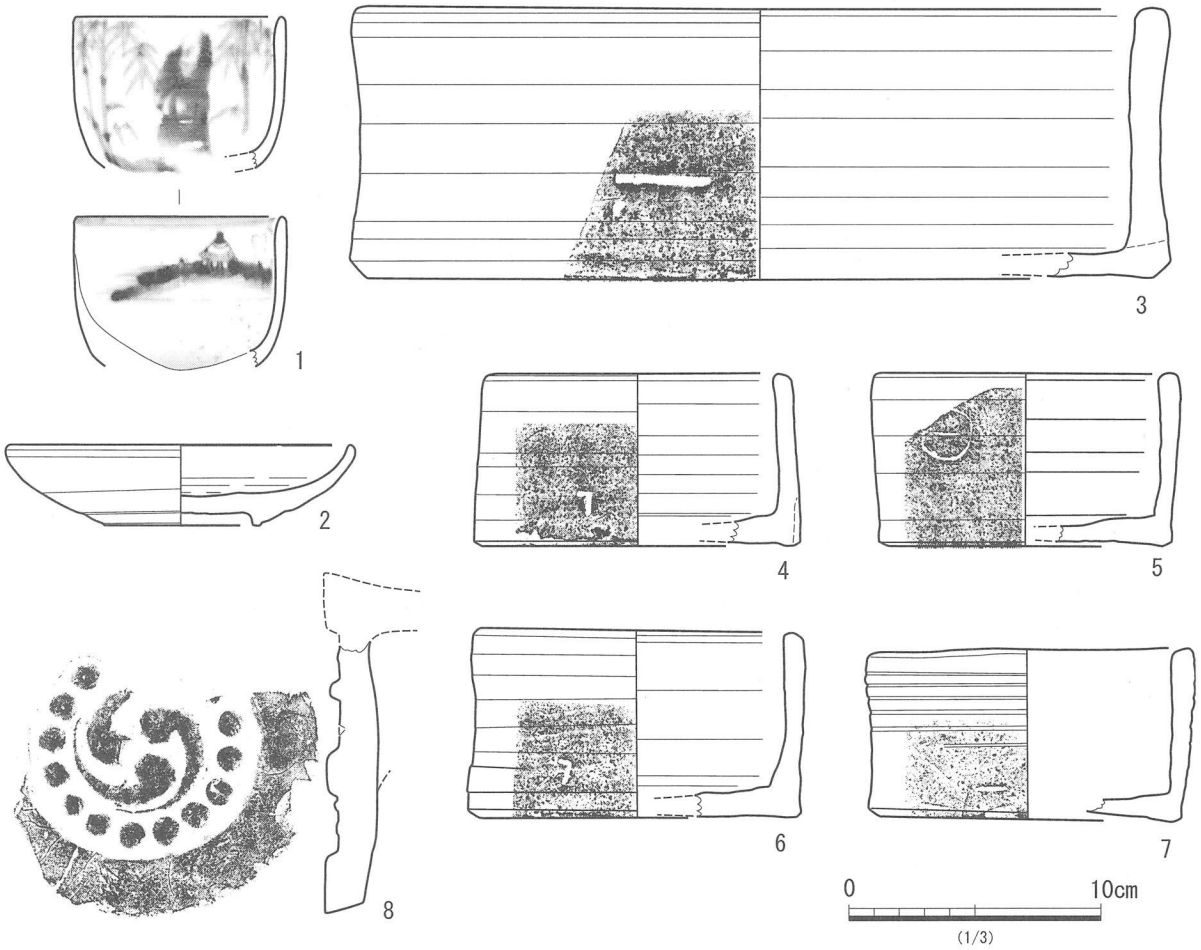
掘方外堆積層
14　灰色粘土
15　低湿地堆積
16　弥生基盤
17　灰褐色粘質シルト
18　灰褐色粘質シルトと白色細砂
19　砂層

第24図　井戸４(1/40)と出土木製品(1/4)

井戸４（第24･25図）

道東側の屋敷地にあたる、座標(-13.5、46.7)に所在する。井戸掘方は、1m四方の方形土坑を検出面から1mほどまで掘り下げている。その下方には径50～60cm、高さ90cm強の桶を、広口を下に向け、三段積み重ねて井筒としている。桶部分は径ぎりぎりの幅で掘り下げられているようだ。桶上部から地上までどのような構造であったのかは明らかでない。現状では掘方以外何も認められない。化粧側があったのか、井戸3のように豊島石製の井戸枠があったのかも不明。上部は掘方の様子が異なっているから、木組み枠のような構造体があったのかもしれない。

埋土は3層までと4層、5層以下と異なる。5層以下は有機質が混じり自然堆積。4層は大量の瓦と礫が混在していて、意図的に投棄され埋められた土である。また3層以上は木炭粒を含み、整地土･造成土の落込み土層であろう。井筒の底は、検出面から3.4m掘り下げられており湧水砂層に達している。



NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	肥前染付磁器	碗	口径　8.1 残存高　6.0	ロクロ成形。表竹林と仙人、口縁内側風水風景に東屋。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/（灰白）	2/3片
2	肥前染付磁器	皿	口径　13.5 底径　6.1 高さ　3.2	ロクロ成形、やや内はん気味に立ちあがる。高台はケズリ込み、釉剥ぎ。見込み中央五弁花文、周縁唐草文、蛇の目釉剥ぎ。	（胎土）微砂粒含、精良。 （焼成）良	内外：10Y7/1（灰白） 断：N7/（灰白）	口縁2/3欠
3	備前焼	匣鉢	口径　31.2 底径　31.1 高さ　10.8	底部ケズリ、端斜めにケズリ面、体部ヨコナデ調整。体部中央に陶印「 ･」	（胎土）2mm大の長石等砂粒多含。 （焼成）良	内：7.5R4/3（にぶい赤褐） 外：5YR5/6（明赤褐） 断：n4/（灰）	埋土 2/3片
4	備前焼	匣鉢	口径　11.2 底径　13.0 高さ　6.9	底部ケズリ、端斜めにケズリ面、体部ヨコナデ調整、端の斜めケズリ顕著でない。陶印「逆L」	（胎土）1mm以下の砂粒含。 （焼成）良	内：2.5YR3/4（暗赤褐） 外：7.5YR6/6（橙） 断：2.5YR6/6（橙）	口縁2/5片
5	備前焼	匣鉢	口径　11.4 底径　11.5 高さ　6.9	底部ケズリ、端斜めにケズリ面、体部ヨコナデ調整。体部下半に陶印「①」	（胎土）1mm以下の砂粒含。 （焼成）良	内：5YR5/4（にぶい赤褐） 外：2.5YR4/4（にぶい赤褐） 断：5PB4/1（暗青灰）	埋土 1/3片
6	備前焼	匣鉢	口径　12.3 底径　13.2 高さ　7.6	底部ケズリ、端斜めにケズリ面、体部ヨコナデ調整。体部下半に陶印「逆L」	（胎土）1.5mm大の砂粒含。 （焼成）良	内外：10R4/6（赤）～5Y5/1（灰） 断：10R6/6（赤橙）	2/3片
7	備前焼	匣鉢	口径　12.3 底径　11.6 器高　6.9	底部ケズリ、端斜めにケズリ面、体部ヨコナデ調整。ヘラ描き沈線５～６条巡る。体部下半に陶印「 ･」	（胎土）2mm以下の砂粒をおおく含む （焼成）良	内：10R4/6（赤） 外：2.5YR4/4（赤褐） 断：10R5/6（赤）	底部中央欠損
8	瓦	軒丸瓦	推定径　13.6	三巴右巻、キラコ	（胎土）雲母、長石等微砂粒含、精良 （焼成）良	表：N3/（暗灰） 断：N7/（灰白）	埋土内

第25図　井戸４出土遺物（1/3）

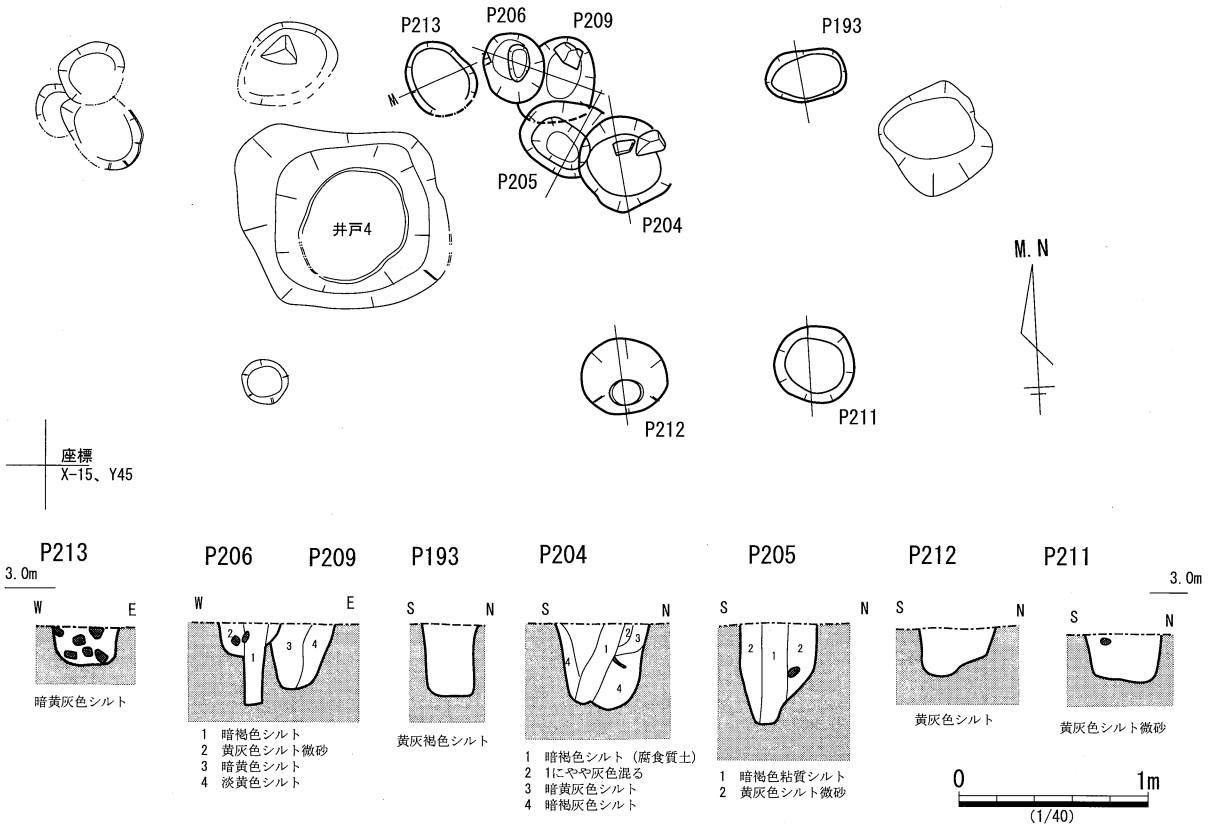
4層出土遺物の年代観が、埋土状況から井戸放棄の年代観の参考となる。瓦と備前焼が4層から大量に出土しているが、瓦は第25図8のような巴頭、珠文とも大振りで、離れ剤にキラコを使用。備前焼は匣鉢が主、少なくとも十数個体数えることができる。他の遺物はごく少量でほとんど見られない。匣鉢胴部に陶印ある個体を掲載している。「一」「L」「①」陶印が刻印されている。この陶印は同一の刻印が、伊部南大窯周辺の西1号窯の製品[6]や北大窯採集品にも見られる。操業時期は1840(天保11)年～明治初年の年代であることが判明している。

木製品も出土している。桶の底板様の製品と用途不明のもの。用途不明品は、中央に孔が穿たれ柄か棒を差し込み用いる構造物の一部と思われる。

井戸4は、開削時期は詳らかにならないが、放棄されたのは早くとも1840年代である。

井戸4周辺柱列（第26図）

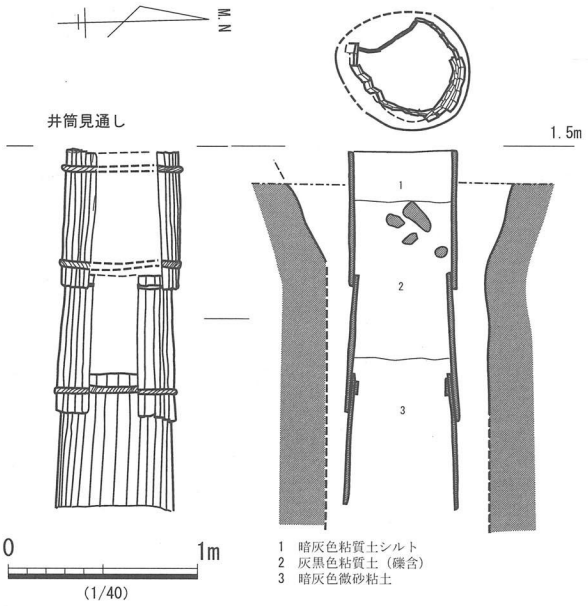
井戸4上部および地上施設については、その様子は全く窺い知ることができない。ただ、井戸4周辺には柱穴痕が、井戸本体を取り囲むように集中して検出される。太線は断面図を掲載している柱痕であるが、細線で表示されている柱穴痕も他と一体となる遺構である。これらは1～1.5m間隔と規則的に配置されている様に見え、上屋が存在していたとすれば、これら柱穴痕の組合せが有力である。P205から瓦片、P204から肥前系陶磁器類片、豆粒大の三足がつく土師質土器皿が出土。特に土師質大皿は器形、内面が黒色であることとともに特徴的である。P209は信楽の小鉢蓋と思われる破片が出土。P211は器形の復元できる肥前系陶磁器類、土師質土器皿類、備前灯明皿片が出土している。備前焼灯明皿は井戸4で出土する備前焼匣鉢と同時期とみなしてよい。上屋を想定しなくとも、井戸の周囲に遮蔽としての板塀あるいは垣根を想定できるだろう。



第26図　井戸4周辺柱列（1/40）

井戸５（第27図）

道西側の屋敷地になる座標(-14.2、31.3)に所在する井戸。井戸4と同様で、桶を三段重ねて井筒に利用している。桶最下底は標高-50cmまで掘られ、湧水砂層に到達している。桶の高さは60～70cm。井戸4と比較すると低い桶を利用している。井戸上半については、他の土坑と誤認し掘りあげてしまっていたので詳細は不明であるが、井戸4と大差ない構造と思われる。年代を限定できる出土物はないが、構造および規模などが井戸4と類似しているので、同時期に開削・運用されたと考えていいのだろう。



第27図　井戸５（1/40）

P21a（第22～26図）

調査が西半と東半と分断され、さらに基礎掘削で破損著しい状態であったが、形状・規模、また出土遺物の構成など廃棄土坑例の代表として紹介する。

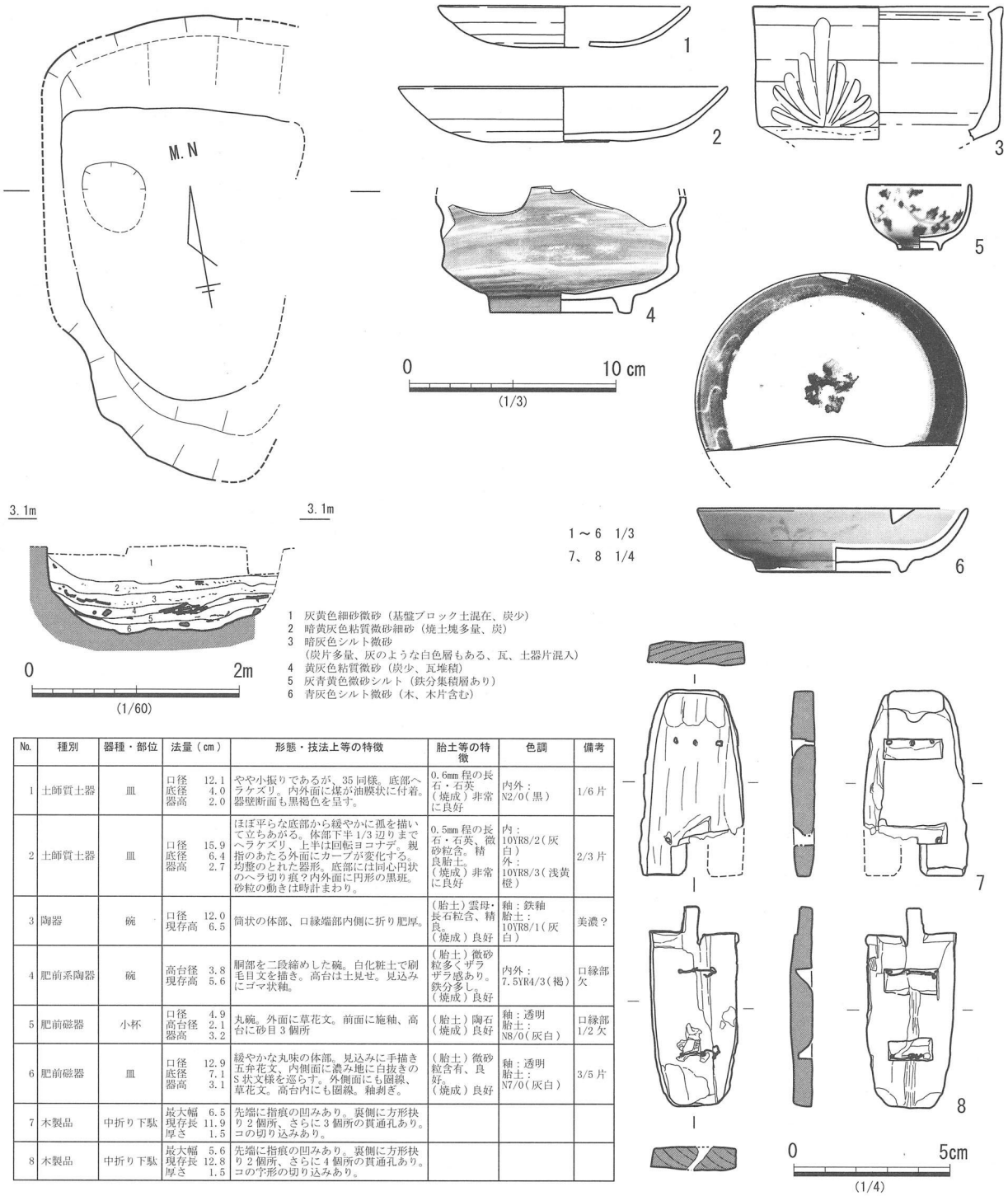
P21aは、座標(-10.6、40.4)にある長径4.5m程の隅丸方形状の土坑。埋土は整然と堆積しており、順次埋められていった印象である。1は土坑を覆う整地土。土坑埋土は2～6であるが、瓦片が集中する層を基準に上層(2～4)と下層(5・6)とに分離して遺物を採取した。この土坑は、炭や焼土の混在が顕著である。特に3層は灰のような白色薄層が何層も筋状に見られる。焼土の存在などからも、火災の後処理に掘られた土坑かと思われる。この土坑からはコンテナ[7]9箱ほどの出土物があった。大半は陶磁器類であるが、瓦や金具・鉄釘・砥石も出土している。陶磁器類の処分だけでなく、建具や家具類の廃材処分もされていた。

第28図は下層からの出土物。土師質土器皿、瀬戸美濃系の筒碗、肥前磁器碗皿、下駄が出土している。

土師質土器の皿は、1・2に代表される。1・2は法量は異なるが成形調整は同一。体部下半をロクロで削り、ミガキ調整を施し、非常に精緻である。焼成も良好で固くしまっている。他の土師質皿と比べると、ミガキが丁寧に施された手法である点が大きな特徴である。土師質皿は破片だけではなかなか特徴が抽出できないが、このタイプは識別が容易であり、各土坑でも出土しているので遺構年代の共時性を求めるのに有効であり、比較基準の資料となる。1は内面全体に油煤が付着している。灯火具に使用されていたのであろう。3は瀬戸美濃系筒碗、鉄釉掛で胴下半に菊花文のシノギが入る。4は肥前系陶器、白化粧土刷毛目塗手法の碗。上層も肥前陶器はこの手法の碗が顕著である。十八世紀をまたがる年代であろう。

下駄が下層から出土している(7・8)。下駄はやや特異な「中折り下駄」であるが、割れた板を銅線で接合してあり補修の跡が見られる。補修後も下駄として使用し続けたのであろうか。このタイプの下駄は、岡山城下ではあまり出土していない。現在のところ岡山城外堀跡での出土例[8]があるだけである。この例も用途不明として紹介されている。その他、下層から桟瓦片が出土した。磁器片には焼継が認められるものも見られる。

第29～32図は上層出土遺物。土師皿(10～12)の成形は下層出土(第28図1・2)と同一。口縁部全周に灯芯痕がみられ、灯芯の場所をずらしながら継続的に使用したことを示している。炮烙は小形(13)と大形(14)と法量に差が見られるが、成形法は一致する。関西系である。外底面は形が整っているがザラザラ感があり、離れ剤に細砂を用いた型押し成形法と思われる。陶磁器類では肥前・美濃・備前・信楽

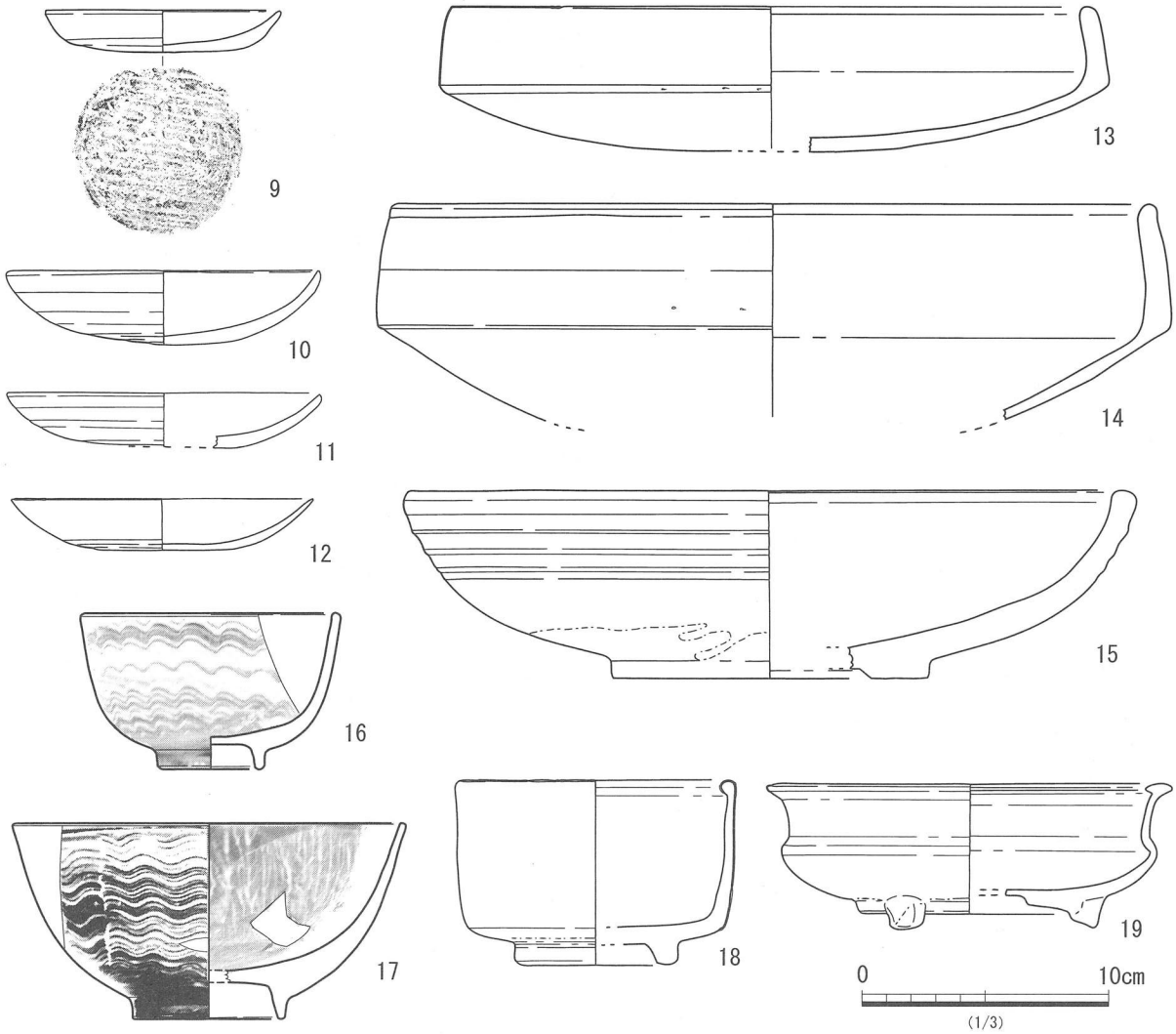


No.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法上等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	皿	口径 12.1 底径 4.0 器高 2.0	やや小振りであるが、35同様。底部へラケズリ。内外面に煤が油膜状に付着。器壁断面も黒褐色を呈す。	0.6mm程の長石・石英（焼成）非常に良好	内外：N2/0（黒）	1/6片
2	土師質土器	皿	口径 15.9 底径 6.4 器高 2.7	ほぼ平らな底部から緩やかに孤を描いて立ちあがる。体部下半1/3辺りまへラケズリ、上半は回転ヨコナデ。親指のあたる外面にカーブが変化する。均整のとれた器形。底部には同心円状のヘラ切り痕？内外面に円形の黒斑。砂粒の動きは時計まわり。	0.5mm程の長石・石英、微砂粒含。精良胎土。（焼成）非常に良好	内：10YR8/2（灰白） 外：10YR8/3（浅黄橙）	2/3片
3	陶器	碗	口径 12.0 現存高 6.5	筒状の体部、口縁端部内側に折り肥厚。	（胎土）雲母・長石粒含、精良。（焼成）良好	釉：鉄釉 胎土：10YR8/1（灰白）	美濃？
4	肥前系陶器	碗	高台径 3.8 現存高 5.6	胴部を二段縮めした碗。白化粧土で刷毛目文を描き。高台は土見せ。見込みにゴマ状釉。	（胎土）微砂粒多くザラザラ感あり。鉄分多し。（焼成）良好	内外：7.5YR4/3（褐）	口縁部欠
5	肥前磁器	小杯	口径 4.9 高台径 2.1 器高 3.2	丸碗。外面に草花文。前面に施釉、高台に砂目3個所	（胎土）陶石（焼成）良好	釉：透明 胎土：N8/0（灰白）	口縁部1/2欠
6	肥前磁器	皿	口径 12.9 底径 7.1 器高 3.1	緩やかな丸味の体部。見込みに手描き五弁花文、内側面に濃み地に白抜きのS状文様を巡らす。外側面にも圏線、草花文。高台内にも圏線。釉剥ぎ。	（胎土）微砂粒含有、良好。（焼成）良好	釉：透明 胎土：N7/0（灰白）	3/5片
7	木製品	中折り下駄	最大幅 6.5 現存長 11.9 厚さ 1.5	先端に指痕の凹みあり。裏側に方形抉り2個所、さらに3個所の貫通孔あり。コの切り込みあり。			
8	木製品	中折り下駄	最大幅 5.6 現存長 12.8 厚さ 1.5	先端に指痕の凹みあり。裏側に方形抉り2個所、さらに4個所の貫通孔あり。コの字形の切り込みあり。			

第28図　P21a(1/60)と下層出土遺物(1/3・1/4)

・京焼系などの製品が認められる。26は文箱を忠実に表現した精巧品である。備前は人形徳利と灯明皿が出土。底部に陶印「○」に「く」と「へ」の下に「L」が打刻され、井戸4と同様に伊部南大窯周辺西1号窯や北大窯採集品[9]に見られる陶印と一致する。十九世紀初頭以降の製品であろう。

その他、大半は肥前系の陶磁器類である。これらには小形の丸碗、大振りの碗、端反り碗、蓋、仏飯器、筒碗などがある。文様も図示のように様々であるが、見込みに五弁花文(34・35・38)、鳥が羽ばたく図像を描いた製品(39)、高台内に「大明年製」(32・38)、「福」(34)と記銘した例などもある。また、白磁碗(42)、猪口(44)など様々な種類の製品が混在している。十七世紀中葉まで遡る製品もあるが、十七世紀後半から十八世紀前半までの製品が大半を占める。ただし35は肥前磁器碗編年Ⅳ・Ⅴ期に同類

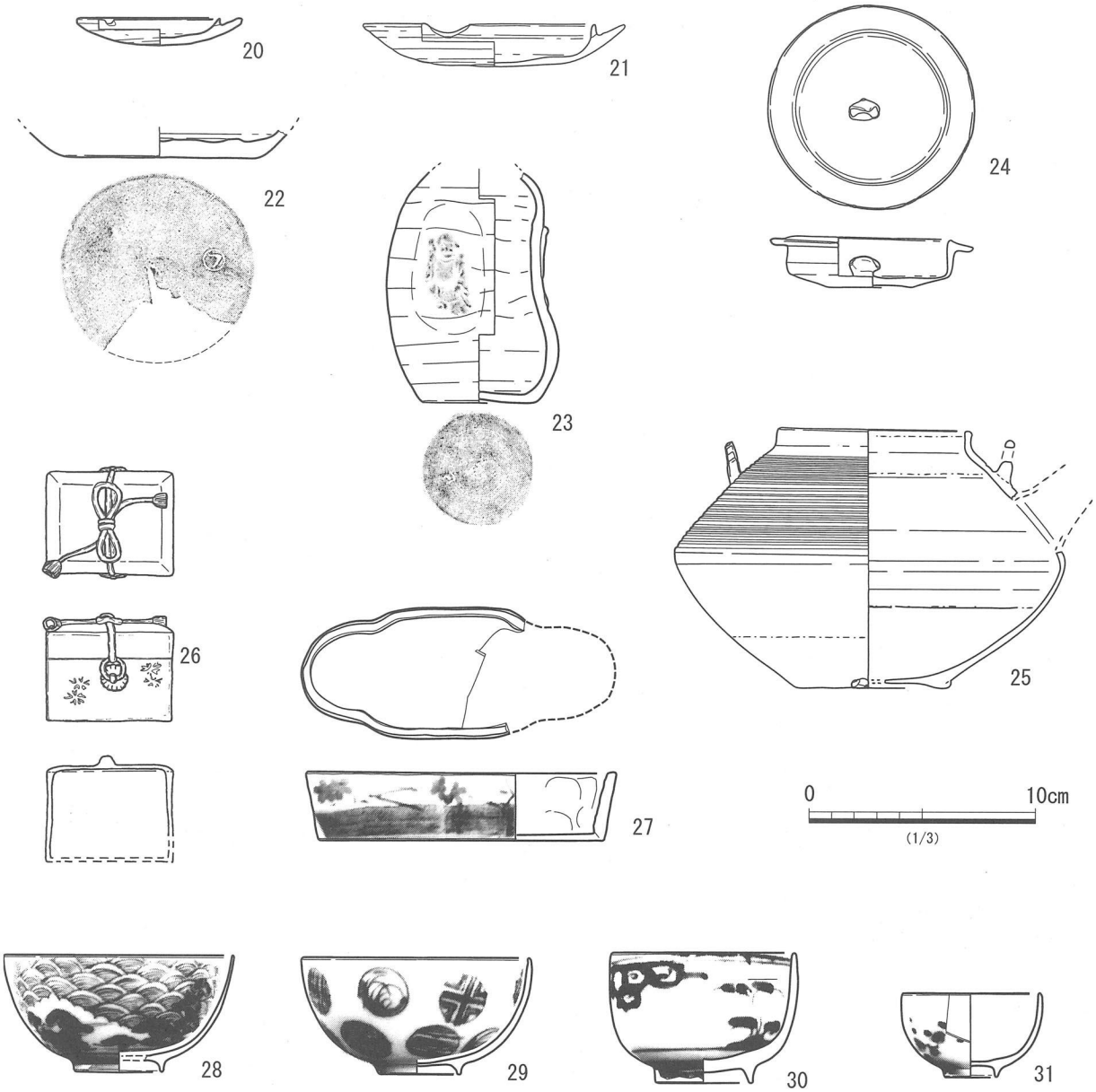


NO.	種類	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
9	土師質土器	小皿	口径　9.5 底径　4.2 高さ　1.8	口縁部に一個所スス付着、底部回転糸切り、板圧痕。体部回転ナデ、内底ナデ。口縁摘んでやや外反。	（胎土）微砂褐色粒多。 （焼成）良好。	内外：10YR8/3（浅黄橙）	
10	土師質土器	皿	口径　12.6 高さ　3.0	体部下半ヘラケズリ、上半は回転ヨコナデ。底部静止糸切り。そののち同心円文。底部は押されて丸味を持つが、基本的には同一。口縁部にスス付着。	0.5mm程の長石・石英、微砂粒含。精良胎土。 （焼成）非常に良好	内：10YR8/2（灰白） 外：10YR8/4（浅黄橙）	1/2片
11	土師質土器	皿	口径　12.7 高さ　2.3	口縁部内外全周にスス付着、底部糸切り。砂粒の動きは時計回り	0.5mm程の長石・石英、微砂粒含。精良胎土。 （焼成）非常に良好	内：10YR8/3（浅黄橙） 外：10YR8/4（浅黄橙）	1/2片
12	土師質土器	皿	口径　12.2 高さ　2.1	体部下半ヘラケズリ、上半は回転ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	0.5mm程の長石・石英、微砂粒含。精良胎土。 （焼成）非常に良好	内：2.5Y7/3（浅黄） 外：10YR7/3（鈍い黄橙）	1/4片
13	土師質土器	炮烙	口径　26.1 胴部最大径　27.3 現存高　5.9	底部は型押し成形、口縁部を貼り付けヨコナデ。接合部はヘラナデで面を形成。内面ナデ。口縁部にすす付着。	（胎土）0.5～1mm程の長石、石英含、雲母、褐色粒多量。 （焼成）良好。	内外：7.5YR7/4（鈍い橙）	1/2片
14	土師質土器	炮烙	口径　31.1 胴部最大径　32.2 現存高　8.8	底部は型押し成形、口縁部を貼り付けヨコナデ。接合部はヘラナデで面を形成。内面ナデ。口縁部にすす付着。	（胎土）0.5～1mm程の長石、石英含、雲母、褐色粒多量。 （焼成）良好。	内：7.5YR7/4（鈍い橙） 外：5YR8/4（淡橙）	1/4片
15	瀬戸系	大皿	口径　29.3 高台径　12.8 高さ　7.7	体部外面に三条の回線。胴上半、内面釉掛。高台部貼り付け、露胎。	（胎土）長石、石英、雲母等微砂粒多し。空気胞多し。 （焼成）普通	（釉）5Y7/3（浅黄） （胎土）5Y8/1（灰白）	2/5片
16	陶器	碗	口径　10.2 高台径　4.0 高さ　6.4	口縁部内外全周にスス付着、底部糸切り。砂粒の動きは時計回り	（胎土）緻密、精良 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）5PB4/1（暗青灰）	1/2片
17	陶器	碗	口径　15.6 高台径　6.2 高さ　6.1	大振りの深碗。ロクロ成形。白化粧土を刷毛塗文様。高台内の深さは高台脇寄り深い。釉剥ぎ。見込みに重ね焼きの痕跡の文様の乱れあり。	（胎土）緻密、精良 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）5R5/1（赤灰）	1/2片
18	陶器	火入	口径　11.4 高台径　6.6 高さ　7.6	筒状に直立するがやや外に傾斜する。口縁は内側に折り込まれ肥厚。ロクロ成形、高台ケズリだし。口唇部・外面施釉、高台無釉。内底面砂目の痕跡。外面に白土塗り草花文を描き、透明釉。	（胎土）黒色微粒を含む、緻密	（釉）透明 （胎土）N7/（灰白）	1/2片
19	陶器	火入	口径　16.4 底径　8.6 高さ　5.9	鉄釉。内彎気味から稜をもって外反。口縁は折りまげてＴ字に肥厚。高台部ケズリだし、露胎。内面ゴマ状に釉かかる。小豆大の粘土塊を付着。見込み周縁部に2.5YR4/6（赤褐）に変色。	（胎土）精良 （焼成）良好	（釉）5P1.7/1（紫黒） （胎土）2.5Y6/3（にぶい黄）	

第29図　P21a上層出土遺物１（1/3）

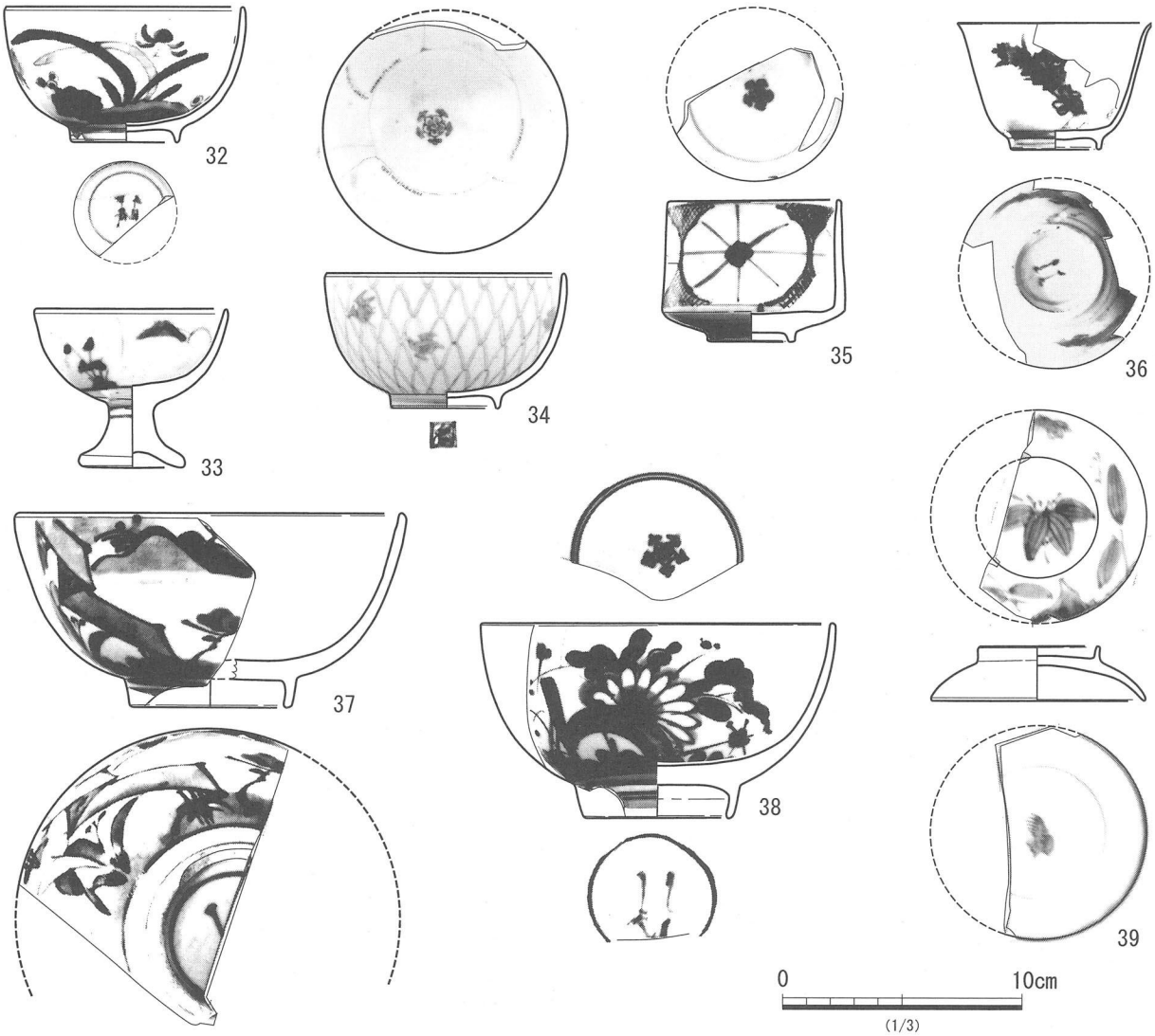
品が見られ、1770年代から1810年代の製品と推定されている[10]。土瓶(25)は信楽系と思われ、算盤形の体部におとし蓋(24)がセットとなる。十八世紀第4四半期に多くなるタイプという[11]。

また、平瓦(49)の小口中央には、井戸4でみられない刻印(菊花文様)が押されている。



NO.	種類	器種・部位	法量 (cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
20	備前焼	灯明皿	口径　7.3 高さ　1.2	ロクロ成形。外面ヘラケズリ、内面ナデ。三カ所抉り。	(胎土)長石細粒、良好 (焼成)良好	内：5YR5/3(鈍い赤褐) 外：5YR5/4(鈍い赤褐)	
21	備前焼	灯明皿	口径　11.5 高さ　1.9	底部静止糸切り、外面ヘラケズリ、上半ナデ。ケズリとの境に重焼き痕跡あり、内面ナデ。受け部藁灰のためかザラザラ。	(胎土)微砂粒、精良。	内：7.5YR3/1(黒褐) 外：7.5YR4/2(灰褐)	1/3 片
22	備前焼	細首壺？底部	底径　8.8 現存高　1.3	ロクロ成形、底部やや凹む。底面に刻印。	(胎土)微砂粒、精良。	内：2.5YR5/2(灰赤) 外：2.5YR5/3(鈍い赤褐)	
23	備前焼	徳利	底径　5.3 現存高　10.2	ロクロ成形。腹部に三方凹みをつくり一個所に布袋貼り付け。底部外面に窯印。	(胎土)精良緻密 (焼成)良好	内：7.5YR6/2(灰褐) 外：5YR4/4(鈍い赤褐)	
24	信楽系	土瓶蓋	口径　9.0 高さ　2.3	つまみが受部よりも低い位置にある落としぶたタイプ。25 の蓋か？表面灰釉がかり。内面は回転ヘラケズリ、火襷状に発色している。	(胎土)精良 (焼成)良好	(釉)灰釉、7.5Y71(灰白) (胎土)5Y7/1(灰白)	25 の蓋か
25	信楽系	土瓶	口径　8.3 底径　6.3 高さ　11.5	ロクロ成形、算盤玉状の体部。とって受部が二個所、底に豆粒大の粘土粒付着。外面 2/3 程釉がかり、内面口縁付近まで釉。底部付近に煤付着。内面は褐色をおびる、鉄釉か。	(胎土)精良 (焼成)良好	(釉)灰釉、7.5Y71(灰白) (胎土)5Y7/1(灰白)	
26	陶器	水滴	長さ　5.6 幅　4.9 高さ　4.7	厚さ 2.5mm 程の粘土板を貼り合わ背手成形。角に注ぎ口、天部に水入れ口兼空気孔を開けている。文箱を忠実に再現した細工物。	(胎土)精良、緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)5Y6/1(灰)	側面 1、底面欠
27	磁器	小鉢	長径　13.6 短径　5.6 底径　12.4 器高　3.1	粘土板を貼り合わせ成形。楕円形の四点を絞った形状。外面に草花文を巡らし、下半は鉄釉。口縁釉剥ぎ。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)N8/0(灰白)	2/3 片
28	肥前染付磁器	碗	口径　10.1 高台径　3.9 高さ　5.2	丸碗。ロクロ成形。全面透明釉。外面に松と青海波文、高台内に文字銘？。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)N8/0(灰白)	1/2 片
29	肥前染付磁器	碗	口径　10.0 高台径　2.7 高さ　5.2	丸碗。ロクロ成形。全面透明釉。外面に円の中にススキ、網、十字などの文様を配す。高台経高さとも縮小。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)N8/0(灰白)	2/3 片
30	肥前染付磁器	碗	口径　8.0 器高　5.8 底径　4.3	丸碗、ロクロ成形、全面施釉。口縁端部、高台釉剥ぎ、砂付着。外面、山水文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)N8/0(灰白)	口縁 1/4 欠
31	肥前染付磁器	小杯・丸碗	口径　6.0 高台径　2.3 高さ　3.3	ロクロ成形、全面施釉。外面に梅枝を巡らす。高台釉剥ぎ。	(胎土)陶石、黒色微粒含 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)N8/0(灰白)	口縁 1/2 欠

第 30 図　P21a 上層出土遺物 2 (1/3)



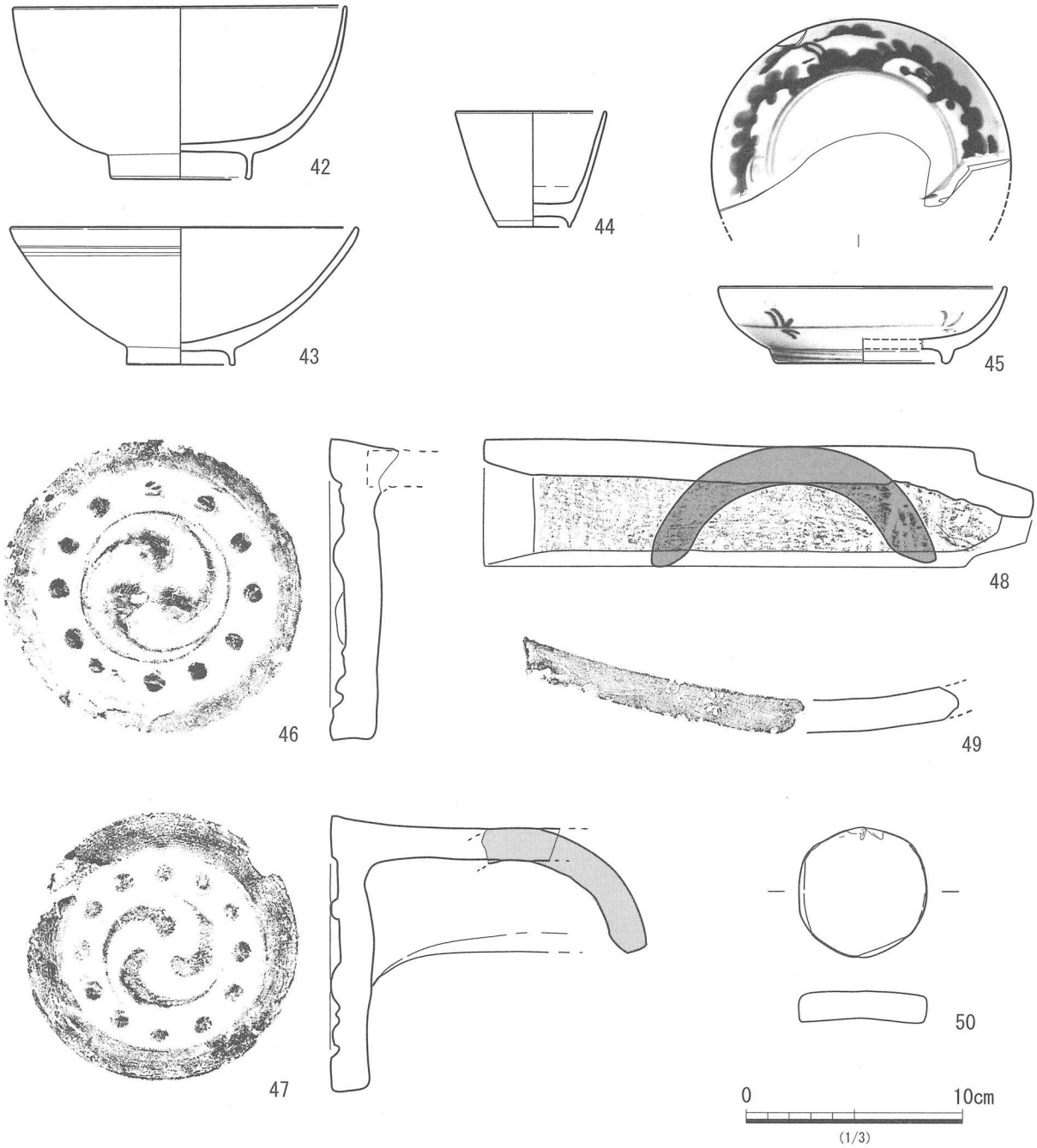
NO.	種類	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
32	肥前染付磁器	碗	口径 9.9 器高 5.7 底径 4.4	ロクロ成形、全面施釉。高台釉剥ぎ。体部外面に芙蓉文。高台内圏線と「大明年製」。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 1/2 欠
33	肥前染付磁器	仏飯器	口径 8.0 器高 5.7 底径 4.2	ロクロ成形、全面施釉。底内は凹面、釉剥ぎ、砂付着。体部外面に草花文。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、ややにごる （胎土）N8/0（灰白）	ほぼ完
34	肥前染付磁器	碗	口径 9.8 器高 5.5 底径 4.0	ロクロ成形、全面施釉。高台釉剥ぎ。体部外面に網と飛鳥文。見込み五弁花文、高台内に方形枠に「福」銘。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 1/4 欠
35	肥前染付磁器	碗	口径 7.0 高台径 3.4 高さ 5.0	筒形碗。全面施釉、高台釉剥ぎ、砂痕。外面は花文、見込みに圏線とコンニャク印判による五弁花文。口縁内にも二重横線。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、7.5Y8/1（灰白） （胎土）N8/0（灰白）	
36	肥前染付磁器	小杯	口径 8.1 高台径 3.8 高さ 5.3	ロクロ成形、全面施釉。口縁端部が反る。外面に草花文、高台内に崩れて判読困難な銘。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 3/4 欠
37	肥前染付磁器	碗	口径 16.0 高台径 6.8 高さ 8.2	大振りの深碗。ロクロ成形。全面透明釉。高台釉剥ぎ。外面に山水文、高台内に圏線と文様。畳付けに鉄釉。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N7/0（灰白）	1/4 片
38	肥前染付磁器	碗	口径 14.5 高台径 6.2 高さ 8.2	大振りの深碗。ロクロ成形。全面透明釉。高台釉剥ぎ。外面に草花文、見込みに二重圏線と五弁花文、高台内に圏線と紀年銘「大明年製」	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N7/0（灰白）	1/4 片
39	肥前染付磁器	蓋	口径 8.9 高さ 2.3	浅くやや内彎する。全面釉、畳付け釉剥ぎ外面草花文と鳥、見込みに圏線と中央に鳥	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/0（灰白）	1/2 片

第 31 図　P21a 上層出土遺物 3（1/3）

これら出土物は、それまで使われていた生活用品が、十九世紀前半に一括廃棄された一群であり、十九世紀代に用いられていた日常用品の構成を示す例である。

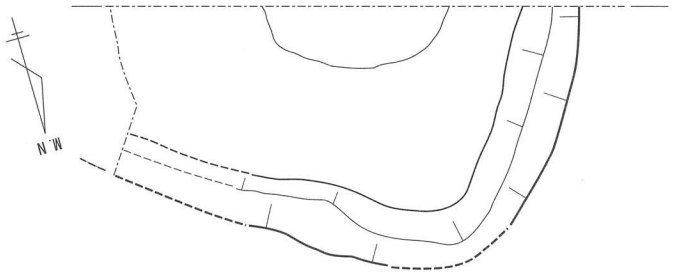
P21b（第 33 図）

P21aの北側に、それに切り込まれて掘削されていた土坑。基礎等で損壊しているが、径3m、深さ70cmほどの方形土坑。座標（-6.2、40）に中心がある。埋土の状況はやや乱れていて、上層（1 ～ 6）と下層（8 ～ 15）とで様子が若干異なるが、大きな差ではない。どちらも炭・焼土が混在するが、下層につれ粘質

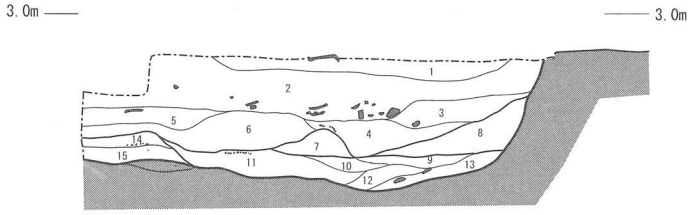


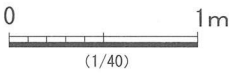
NO.	種類	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
42	白磁	碗	口径　15.3 高台径　6.3 高さ　8.1	大振りの深碗。ロクロ成形。全面透明釉。高台は薄く高く、釉剥ぎ。	（胎上）陶石、黒色微粒含 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎上）N8/0（灰白）	2/3 片
43	磁器	碗	口径　15.9 高台径　5.0 高さ　6.4	体部が大きく開く碗。ロクロ成形。全面施釉、高台釉剥ぎ、口唇部鉄釉。高台畳付けに砂痕。口縁外面に四条の細沈線。	（胎上）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、5GY8/1（灰白） （胎上）N8/0（灰白）	1/2 片
44	肥前磁器	猪口	口径　6.8 器高　5.4 底径　3.3	開き気味に直立、ロクロ成形、全面施釉。高台釉剥ぎ。	（胎上）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎上）N8/0（灰白）	口縁 1/5 欠
45	肥前染付磁器	皿	口径　13.2 高台径　7.7 高さ　3.6	ロクロ成形、全面施釉。外面に唐草文、内面に松をあしらえた山水文を巡らす。高台釉剥ぎ、砂付着。	（胎上）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、ややくすむ （胎上）N8/0（灰白）	
46	瓦	軒丸瓦 瓦当	瓦当径　14.0 厚さ　1.7	左巻三巴、珠文 12。珠文は稜があり、尻尾が円を描くように長く伸びる。周辺ヨコナデ、裏面ナデ。珠文	（胎上）石英長石砂粒多し。 （焼成）あまい。	内外：N7/（灰白） 断面：芯 N6/0（灰）、周辺 N8/0（灰白）	瓦当のみ
47	瓦	軒丸瓦 瓦当	瓦当径　17.8	左巻三巴、珠文 12。瓦頭周縁ナデ、体部外面板ナデ、内面、コビキ B、布目粗、板ナデ。	（胎上）0.5 ～ 1mm 程の長石、石英含。 （焼成）良好。断面	内：7.5Y7/1（灰白） 外：7.5Y6/1（灰）	
48	瓦	丸瓦	長さ　25.4 幅　13.1 厚さ　1.7	内面、吊紐痕、コビキ B。粗い布目。側縁、外面ヘラナデ。玉縁ナデ。	（胎上）雲母多し、微砂粒含。	内外：2.5Y7/2（灰黄） 断面：芯 N4/0（灰）	焼戻り、1/4 欠損。
49	瓦	平瓦 広端側	現存長　14.5 現存幅　20.0 厚さ　1.6	凹面平滑なナデ調整、凸面縦方向に粗いなで調整。板材の痕跡を残す。広端面に菊花押印。	（胎上）0.5 ～ 1mm 程の長石、石英含。 （焼成）良好。断面	内外：N3/（暗灰） 断面：芯 N6/0（灰）、周辺 N8/0（灰白）	1/4 片
50	瓦質製品	上製円板	縦　6.1 横　5.9 厚さ　1.3	平瓦片を利用、周縁よく擦れている。	（胎上）雲母、長石等砂粒多し。	内外：N6/0（灰）	

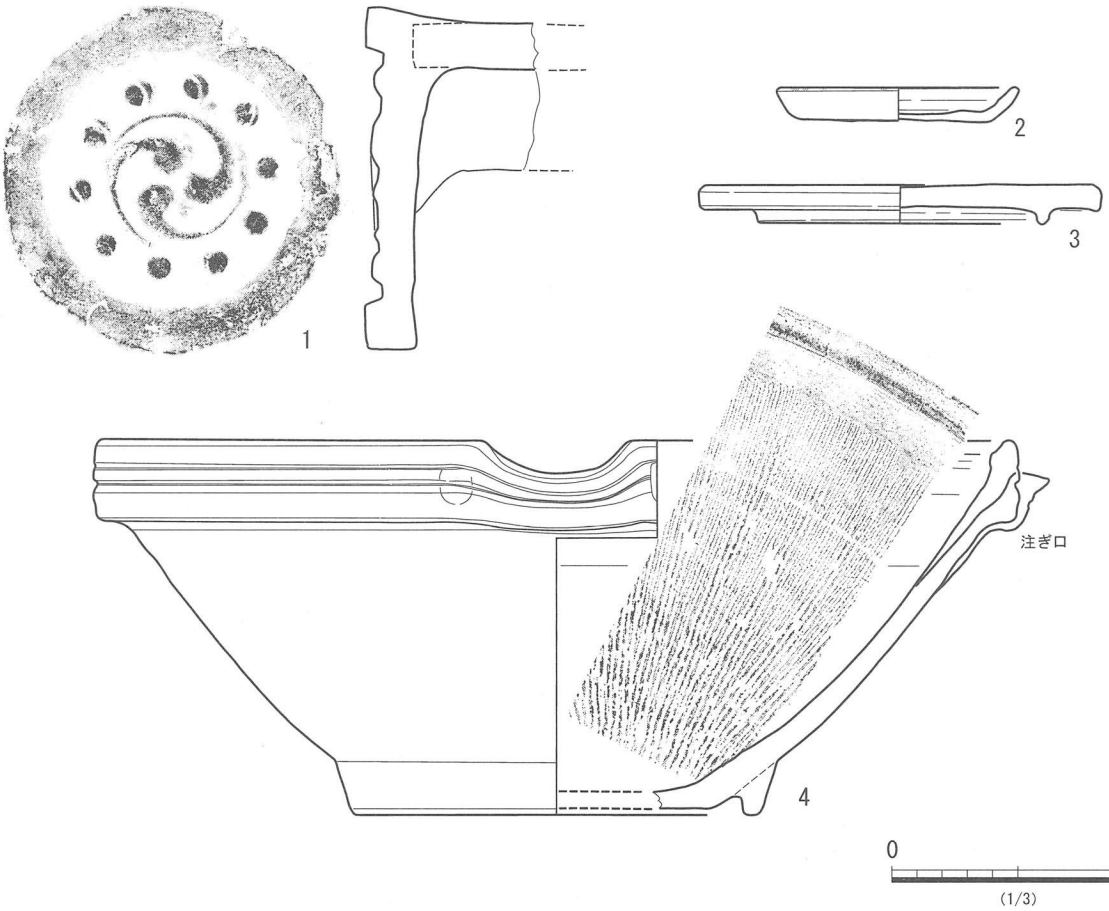
第32図　P21a上層出土遺物4（1/3）



1　暗褐黄色粘質微砂（備前擂鉢含む）
2　黄褐灰色粘質微砂（炭混在、瓦片、小石含む）
3　灰黄褐色粘質微砂（焼土粒、炭混在）
4　灰褐色粘質微砂（炭混在）
5　褐黄灰色粘質微砂（マンガン）
6　灰(褐)色微砂（焼土、炭若干、黄色シルト混在）
7　灰色シルト微砂
8　灰黄色粘質微砂（炭、焼土粒含）
9　灰黄褐色シルト微砂
10　灰褐色シルト微砂
11　灰色シルト（細砂）（鉄分）
12　淡黄灰色シルト（鉄分）
13　黄褐色粘質微砂
14　黄褐灰色粘質微砂（鉄分）
15　灰黄色シルト微砂（炭粒含む）







No.	種類	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	瓦	軒丸瓦 瓦当	瓦当径　13.6 文様区径 10.3	左巻三巴文、珠文数 10。瓦当内面ナデ、丸瓦内面ナデ、丸瓦部外面に板状工具による整形、内面にも板状痕。珠文に範のクズレあり。瓦当面に砂痕。	（胎土）1mm 以下の砂粒、長石、石英、雲母を含む。 （焼成）良好	内外：N1/0（灰） 断：7.5Y6/1（灰）	
2	土師質土器	皿	口径　9.6 底径　7.1 器高　1.1	外内面回転ヨコナデ、内底面ヨコナデ。外底面回転糸切り、糸切りの範囲は底径内 6.5mm、その周辺部はやや盛り上がりヨコナデ、糸切りとの境には段が生じ明瞭に分離。切り離しの後反転しナデ。口唇部に４個所灯芯の跡あり。	（胎土）0.5mm 以下の長石少し。 （焼成）良好	内：7.5YR8/2（灰白） 外：10YR8/2（灰白）	ほぼ完形
3	備前焼	蓋	直径　16.0 底径　11.6 器高　1.6	上面、切り離しケズリ痕のちナデ。下面は回転ナデによる成形と調整。周辺部はやや黒みを帯びる。	（胎土）0.5mm 位の長石、石英含む。 （焼成）良好	内外：5YR6/4（にぶい橙）	完形
4	備前焼	擂鉢	口径　36.0 高台径　15.9 器高　14.9	櫛目は一単位幅 10 本 /cm。工具は底部から口縁へと引き上げられ、深く明瞭な状況から、口縁に従い浅くなる。 体部外面に緋襷状の変色あり、口縁下部に重ね焼の時の粘土残痕あり。高台部は貼り付け。	（胎土）0.5mm 大の長石、石英し。 （焼成）良好	内：7.5YR5/2（灰赤） 外：7.5YR4/3（にぶい赤褐） 断：5Y8/1（灰白）～5Y6/1（灰）	1/4 片

第33図　P21b(1/40)と出土遺物(1/3)

が強くなる。土師質土器皿・鍋・備前擂鉢・蓋・煙管・瓦がコンテナ1箱ほど出土。陶磁器類の出土は少ない。遺物中袋で土師質、陶磁器類、備前焼、瓦片それぞれ1袋づつ程の量である。

備前焼擂鉢(4)の摺り目は、中心から放射状に隙間無く密にひかれていて、高台は貼り付。口縁端部内側は摘んで強くナデられ、稜線を形成している。全面に塗土し、体部外面のヘラケズリは上半まで及ぶ。摺り目は金具状工具で底から口縁部へとひかれ、端部の調整はおこなわれていない。近世4期(十八世紀中葉～十九世紀前半ごろ)に位置づけられる[12]。土師質小皿(2)は、底部周縁に糸痕がめぐり、特徴的な形状を呈している。灯芯痕が観察できる。その他、備前焼蓋(3)や、珠文に笵のズレが見られる軒丸瓦(1)などの出土を見る。

P29・P29b(第34～35図)

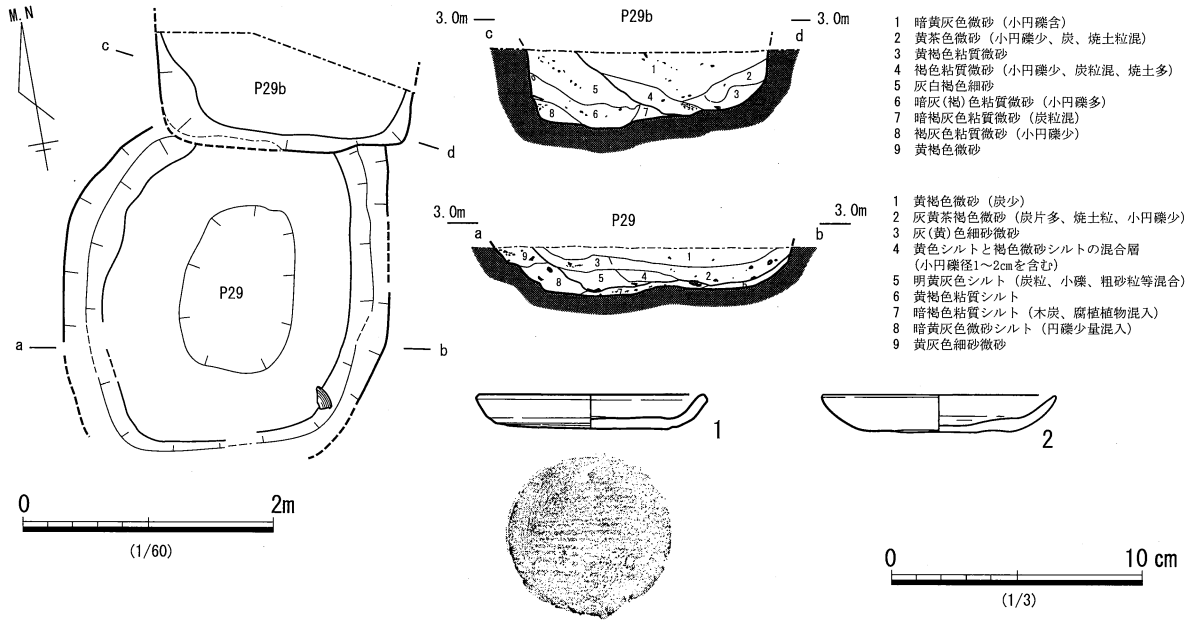
P21の北側、座標(-2.4、39.6)に中心がある。P29とそれを切って掘られているP29bとの相重なる二つの土坑。P29は約3m程の隅丸方形で深さは35cmほど。皿状の比較的浅い土坑である。北隅の肩から備前焼擂鉢が出土(第35図10)した。P29bは、調査区外に広がり規模の確定ができない。P29よりは小形の方形土坑である。しかし、深さ70cmと深い。両者とも土層の堆積が複雑である。細かな掘り直しや複数の土坑を見過ごしている可能性がある。

P29bの出土物は、図示以外に、下層から土師質皿が4点ほど、その内の1点に灯芯痕があり、もう1点には内面に油煤が付着している。陶磁器も細片ばかり14点、備前焼は建水、壺の破片や器形不明の陶印「○」ある備前焼底部、径12～13cmほどの備前焼皿などが出土している。

備前皿には口縁端部に油煤が付着。この皿の成形手法は、P21aの土師質土器で述べた手法に近似する。備前焼と素焼きの違いだけで、使用法も一致する。

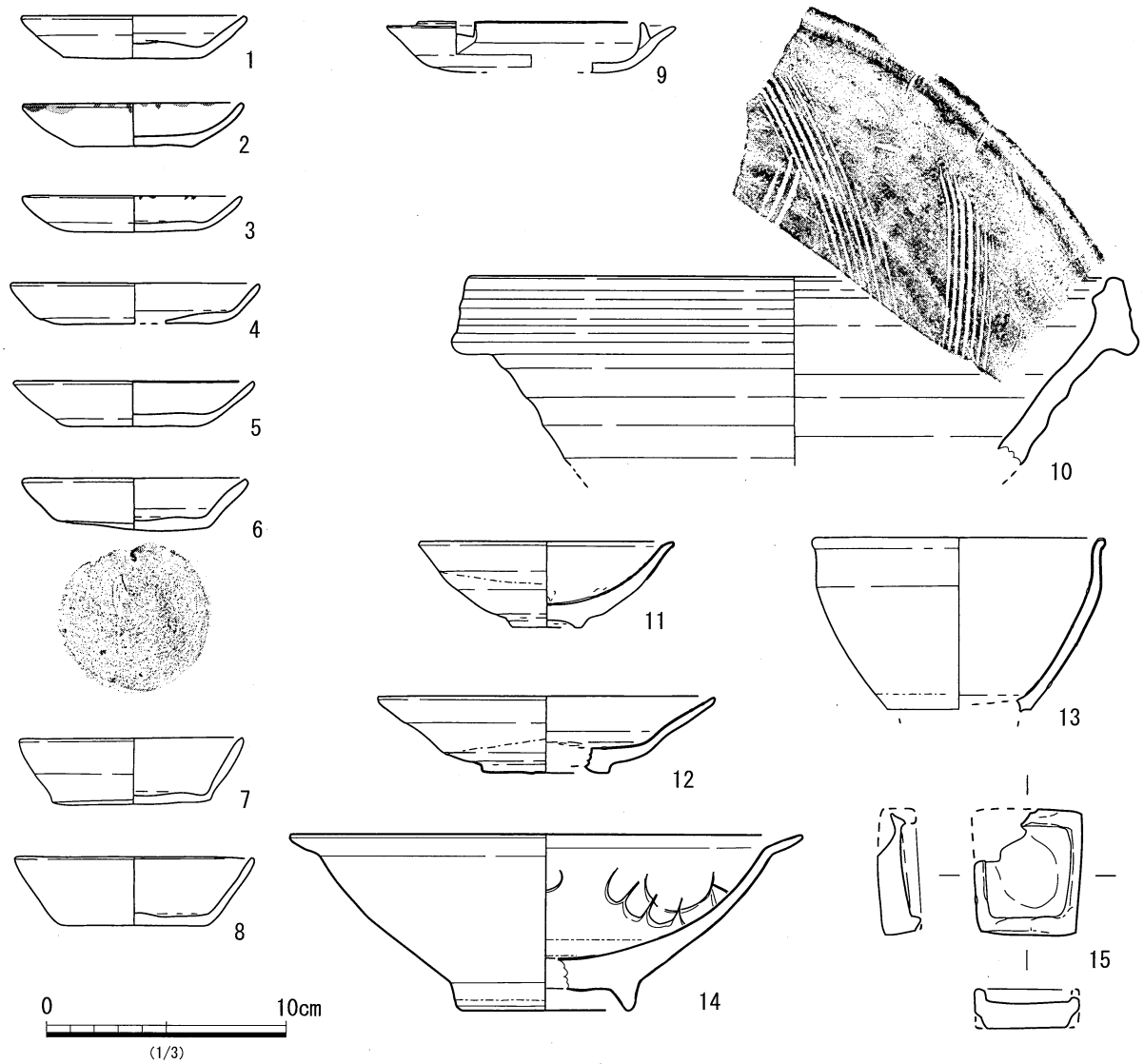
上層からは、端反り碗を含む肥前陶磁器、備前焼片出土している。土師質小皿はP21bの小皿製作技法と同一である。

P29の出土物は、肥前陶磁器・備前焼・土師質土器など様々な種類のものが出土している。土製硯(15)



NO.	種別	器種・部位	法量(cm)	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	口径 9.0 底径 6.1 器高 1.1	円形粘土板に体部貼り付け、底部指頭圧後ナデ。内面ユビナデ。屈曲部に強いヨコナデ。	(胎土)2.5mm以下の砂粒少 (焼成)良	内：7.5YR8/2(灰白) 外：7.5YR7/3(にぶい橙) 断：7.5YR8/3(浅黄橙)	口縁1/6欠 上層
2	土師質土器	小皿	口径 9.1 底径 6.2 器高 1.5	ロクロ成形、底部糸切り。内底面凹み渦状のナデ、中央ナデ。	(胎土)1mm大の砂粒含 (焼成)良好	内：10YR8/2(灰白) 外：10YR8/3(浅黄橙)	1/2片 下層

第34図　P29・P29b(1/60)とP29b出土遺物(1/3)



NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	口径 9.2 底径 5.8 高さ 1.8	底部回転糸切り。	（胎土）褐色粒、雲母、微砂粒含む （焼成）普通	内外：7.5YR7/6（橙）	口縁 3/4 欠 上層
2	土師質土器	小皿	口径 9.1 底径 5.0 高さ 1.9	大きく開く口縁部、口唇に芯痕多、スス付着。ロクロ成形、底部回転糸切り。内底面渦状ナデ。	（胎土）1mm 弱の砂粒含、精良 （焼成）良好、堅致	内外：10YR8/3（浅黄橙）	口縁 1/6 欠 下層
3	土師質土器	小皿	口径 9.1 底径 5.4 器高 1.5	底部糸切り後板目。底部端をナデ面を形成。内底面強いナデ。口縁部二個所灯芯跡	（胎土）精良 （焼成）良好	内外：10YR8/2（灰白）	口縁 1/3 欠 下層
4	土師質土器	小皿	口径 10.2 底径 6.5 器高 1.7	底部糸切り後板目。底部端をナデ面を形成。内底面強いナデ。	（胎土）微砂粒多 （焼成）良	内外：10YR8/2（灰白）	口縁 1/2 下層
5	土師質土器	小皿	口径 9.9 底径 5.4 器高 1.9	底部回転糸切り。内底面渦状にナデ。	（胎土）精良 （焼成）良好	内外：10YR8/3（浅黄橙）	口縁 5/6 欠 下層
6	土師質土器	小皿	口径 9.2 底径 6.3 高さ 1.3	底部糸切り。内底面中央大きく凹む。成形雑。	（胎土）0.5 ～ 1mm の長石、石英、褐色粒多く、粗い （焼成）良	内外：7.5YR7/6（橙）	口縁 1/3 欠 上層
7	土師質土器	小皿	口径 9.3 底径 6.6 高さ 2.9	円形粘土板に体部貼り付け、底部指頭圧後ナデ。内面ユビナデ。屈曲部に強いヨコナデ。	（胎土）0.5 ～ 1mm の長石、石英、褐色粒多し （焼成）良	内外：10YR7/4（浅黄橙）	口縁 1/6 欠 上層
8	土師質土器	深皿	口径 9.8 底径 6.1 高さ 2.9	ロクロ成形、体部回転ヨコナデ、底部糸切り。内面渦状にナデ。	（胎土）微砂粒、雲母 （焼成）良	内：10YR7/2（鈍い黄橙） 外：10YR7/3（鈍い黄橙）	口縁 2/3 欠 下層
9	備前焼	灯明皿	口径 9.2 底径 12.0 高さ 2.1	ロクロ成形、立ち上がり部貼り付け、後回転ナデ。抉り推定３個所。煤付着。	（胎土）微砂粒含、精良。 （焼成）良好	内：10YR5/6（赤） 外：10YR5/4（赤褐）	1/3 片 上層
10	備前焼	擂鉢	口径 27.4 現存高 8.0	口縁端部下方に拡張、口唇部にナデによる凹線。摺り目６条 /2.6 ㎝、そこから上、間隔疎。口縁部下に重ね焼きの粘土残。内面使用で摩滅。	（胎土）0.5 ～ 2mm の長石、石英多し （焼成）良好	内：5YR7/2（明褐灰） 外：7.5YR7/3（鈍い橙）	1/4 片 上層
11	陶器	皿	口径 10.4 高台径 2.9 高さ 3.6	内彎気味に開く口縁、見込みに胎土目。高台のケズリシャープ、胴下半無釉	（胎土）1mm 大の褐色粒含 （焼成）良	（釉）灰釉 （胎土）10YR7/3（にぶい黄橙）	1/3 片 上層
12	陶器	皿	口径 13.9 高台径 5.3 高さ 3.2	胴過半で大きく屈曲し、内面に稜を形成、見込みに胎土目。高台のケズリシャープ、胴下半無釉	（胎土）0.5mm 大の長石粒含 （焼成）良	（釉）灰釉、5Y7/2（灰白） （胎土）2.5Y7/2（灰黄）	1/8 片 上層
13	陶器	天目碗	口径 11.9 現存高 7.5	ロクロ成形、高台部鋭いケズリ、体部外面指の起伏残す。口唇外反。鉄釉。高台無釉。	（胎土）黒色微粒含、精良 （焼成）良	（釉）10YR2/1（黒） （胎土）2.5Y8/1（灰白）	1/3 片 下層
14	肥前磁器	皿	口径 21.2 高台径 6.9 高さ 7.4	ロクロ成形、内彎気味に大きく開き、口縁「く字」に外反。見込み蛇の目釉剥ぎ、高台無釉。	（胎土）陶石、精良 （焼成）堅致	（釉）2.5GY7/2（明オリーブ灰） （胎土）N 7/0（灰白）	1/6 片 下層
15	瓦質製品	硯	長さ 5.3 幅 4.6 高さ 1.8	中央には磨りによる窪みあり。墨付着。	（胎土）0.5mm 弱の砂粒、長石含 （焼成）良	内外：2.5Y8/2（灰白）	上層

第 35 図　P29 出土遺物（1/3）

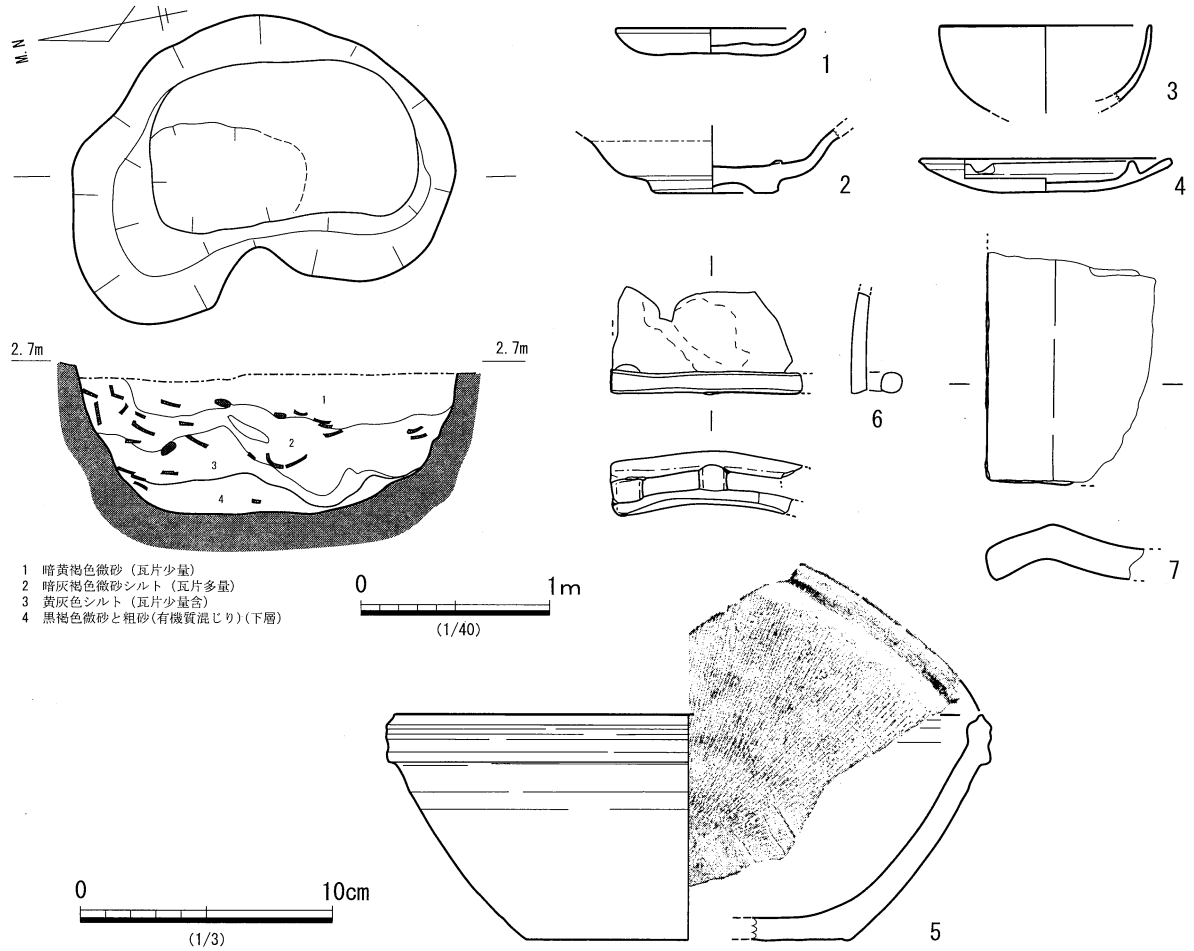
や獣骨片も見られる。また、鉄釘や銅製家具飾りも出土している。

P29の出土物は他の土坑と比べて、土師質土器の比率が高い。深皿が目に付くのも特徴の一つ。底部から上半部へと強く撫でて、体部が波を打つ器形(7･8)は特徴的である。また、P21bの皿成形手法の皿(3)もある。3は特に、内面に灯芯痕とは別に墨様のものが付着している。入れた油の汚れであろうか。2にも灯芯痕が多数残されているが、内外面に桃色の輪状変色した部分がある。重ね焼きの痕跡である。幾重にも重ねて焼成したことが窺える。

備前焼擂鉢(10)は、口縁部したが拡張され摺り目が放射状に疎の特徴を持つ。内面はよく使用されていてすり減っている。Ⅰ期の範疇であろう。肥前陶器皿(11･12)は胎土目が残る。十六世紀末～十七世紀初頭頃の年代に属す。

P90(第36～39図)

P21aに隣接して検出された土坑。座標(-10.8、38.8)にある4×5m程の不定形を呈し、大きさの割に



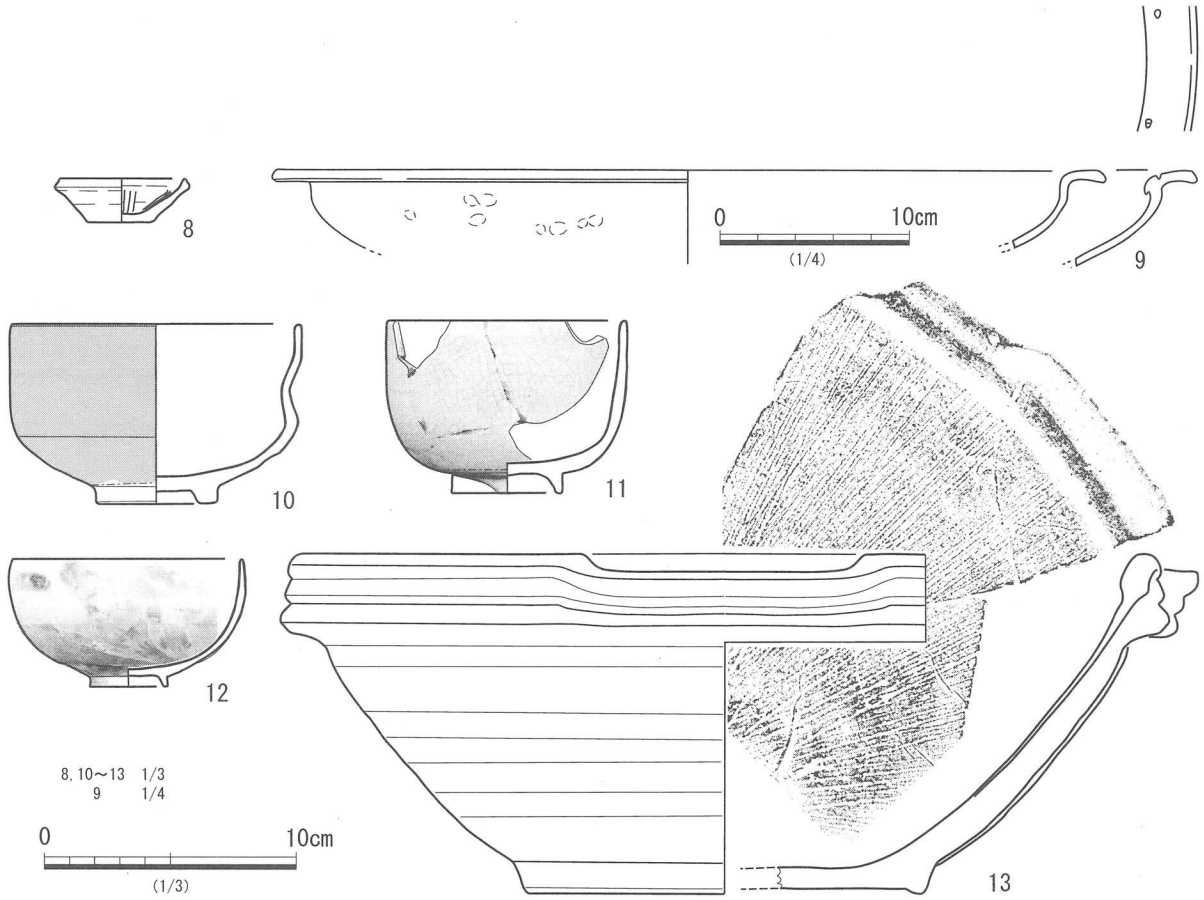
NO.	種別	器種・部位	法量(cm)	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	皿	口径 8.4 底径 4.4 器高 1.1	底部糸切り、回転ナデ成形。内底面渦状の凹凸あり。	(胎土)長石、石英、褐色粒含 (焼成)良	内：7.5YR7/4(鈍い橙) 外：10YR7/3(鈍い黄橙)	1/4片 下層
2	肥前陶器	皿	高台径 4.7 現存高 2.6	ロクロ成形、底部に兜巾の痕跡。露胎。胎土目。	(胎土)砂粒多含 (焼成)良好	(胎土)5Y7/2(灰白)	口縁部欠 下層
3	肥前磁器	碗	口径 8.4 残存高 3.4	ロクロ成形	(胎土)陶石 (焼成)良好	(胎土)N8/0(灰白)	底部欠損 下層
4	備前焼？	灯明皿	口径 9.8 底径 2.8 器高 1.4	底部2.5mmほど糸切り痕。ヘラケズリ。受け部に三個所U形の抉り。銹び釉塗。	(胎土) (焼成)	内：5YR3/4(暗赤褐) 外：5YR4/4(鈍い赤褐)	口縁部1/6欠 下層
5	関西系	擂鉢	口径 23.2 底径 12.8 器高 9.0	回転成形、砂粒の動き左→右。口縁内側1条、外3条凹線、摺り目底部→口縁。	(胎土)長石、石英粒含 (焼成)	内：2.5YR5/6(明赤褐) 外：2.5YR5/8(明赤褐)	1/4片 下層
6	陶器	箱庭道具 橋	現存長 7.6 現存幅 4.3	粘土板、粘土紐で細工、透明釉と手すり部は緑釉	(胎土)微砂粒 (焼成)良好	(胎土)10YR7/6(明黄褐)	1/2片 下層
7	瓦	桟瓦	現存長 9.2 現存幅 6.8 厚さ 1.3	ヘラナデ調整	(胎土)雲母、長石、褐色粒含 (焼成)軟	表：N5/0(灰) 裏：N4/0(灰) 断：5Y8/1(灰白)	小片 下層

第36図　P90(1/40)と下層出土遺物(1/3)

深さ75cmと深い。断面が碗形に緩く傾斜して掘られている。土層は上層(1～3)、下層(4)と4層に分層した。1が覆土、2～4層が土坑埋土である。2層に瓦の混入が多い。

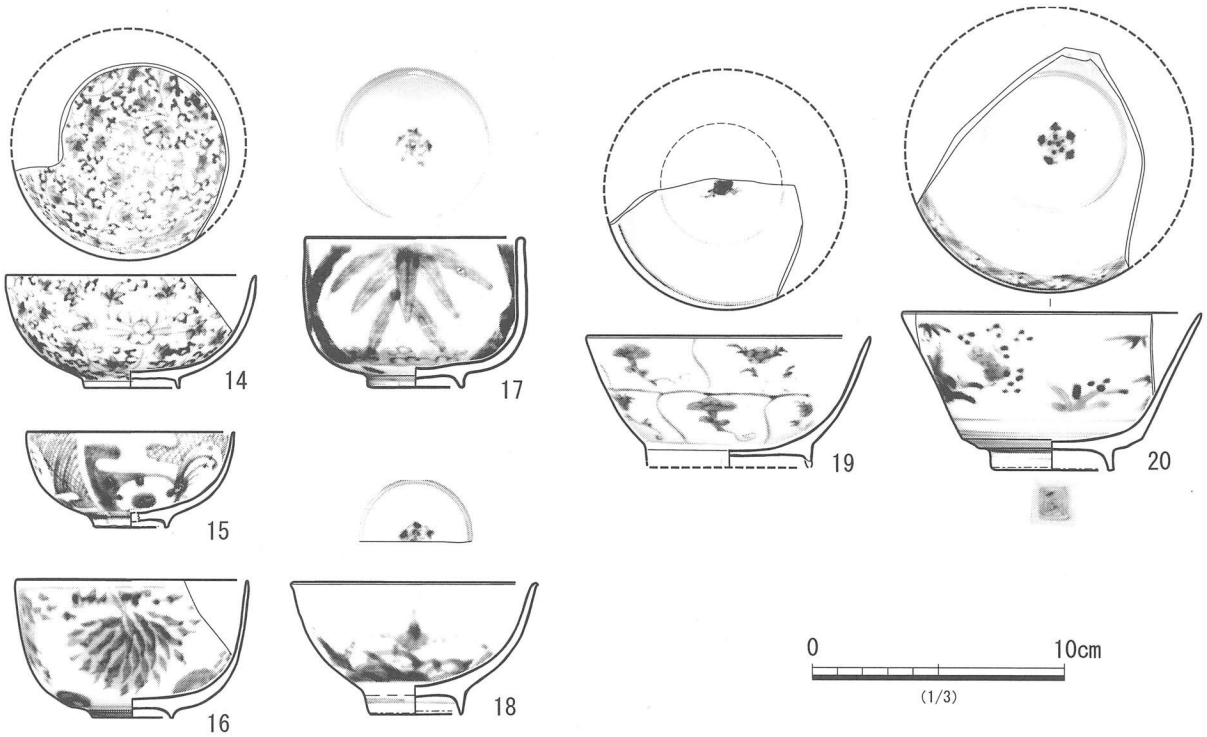
下層の出土部は土器・陶磁器・備前などが出土している。肥前陶器皿は兜巾・胎土目の特徴を示す。擂鉢は口唇部が強くナデられ凹線を形成している。備前焼類似品で関西系であろう。受け部にU形に抉りを入れた備前灯明皿も出土。特徴的な出土品として、下層から箱庭道具である橋の欄干部残片(6)が出土している。手すり部に緑釉がかかる。上層のミニチュア擂鉢(8)もままごと道具の一種。両者とも京焼系。十八世紀～十九世紀にかけて緑釉製品が増えるという[13]。

第37～39図は上層からの出土品。炮烙(9)は底が浅く口縁部が屈曲するタイプ。内耳に2孔を穿いている。内面の滑らかさに比べて、外面には押圧痕が顕著。十八世紀末から十九世紀ごろの時期。肥前陶器碗(10)は鉄釉掛で黒褐色を帯びる。胴部半ばに指頭圧痕で凹みをつけている。京焼系碗(12)は透明釉の上から赤色顔料で草花に彩色を施している。顔料は熱変して消えかかっている。擂鉢(13)は底端部に粘土を足し、強くナデ調整して高台様とする。注ぎ口は幅広く面取りしているが大きく大きく窪ませていない。



NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
8	ミニチュア陶器	擂鉢	口径　4.9 底径　2.2 器高　1.7	底部糸切り、内摺り目３本１単位、６組	（胎土）1mm以下の砂粒少含 （焼成）良好	内外：2.5YR5/6（明赤褐） 断：2.5YR6/6（橙）	1/3片 上層
9	土師質土器	炮烙	口径　44.0 現存高　5.2	口縁部が水平に拡張した浅い鍋。内面はヨコナデで平滑化、外面は凹凸。口縁部付近煤顕著。口縁内側に粘土貼り付け、一対２孔。	（胎土）長石、雲母、微砂粒多含 （焼成）良好	内：10YR7/2（鈍い黄橙） 外：10YR5/2（灰黄褐）	1/5片 上層
10	肥前陶器	碗	口径　11.4 高台径　4.8 器高　7.2	ロクロ成形、畳付平らにナデ、露胎、高台内は鉄釉。	（胎土）微砂粒、黒色粒含 （焼成）良好	（釉）鉄釉 （胎土）2.5Y8/1（灰白）	口縁3/4欠 上層
11	信楽系陶器	碗	口径　9.4 高台径　4.2 器高　6.9	ロクロ成形、高台露胎。	（胎土）微砂粒若干含、精良 （焼成）良好	（釉）灰釉、やや薄緑かかる （胎土）5Y7/1（灰白）	口縁5/6欠 上層
12	京焼系陶器	碗	口径　9.1 高台径　3.1 器高　5.1	丸碗、ロクロ成形、高台露胎。釉の上から赤絵具で草花、一部変色。	（胎土）微砂粒含、精良 （焼成）良好	（釉）透明、やや薄緑かかる （胎土）5Y8/1（灰白）	口縁3/4欠 上層
13	備前焼	擂鉢	口径　33.2 底径　15.7 高さ　13.5	底部ヘラケズリ、高台粘土貼り付け、ロクロナデ、口縁外側拡張部粘土貼り付け。摺り目８条/2.6cm、中心から放射状。	（胎土）1mm大の長石等砂粒含。 （焼成）良好	内外：10R4/4（赤褐）	1/2片、口縁1/8片 上層

第37図　P90上層出土遺物1（1/3・1/4）



NO.	種別	器種・部位	法量(cm)	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
14	肥前染付磁器	碗	口径 9.8 高台径 3.8 器高 4.5	丸碗、全面に施釉、高台畳付けケズリ。内外面に同一の花草花文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明、やや薄緑かかる (胎土)N8/0(灰白)	口縁3/4欠 上層
15	肥前染付磁器	碗	口径 8.2 高台径 2.8 器高 3.8	全面に施釉、高台畳付け斜めにケズリ。外面に○と雲?を描く、○の中にすすき	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明 (胎土)N8/0(灰白)	1/2片 上層
16	肥前染付磁器	碗	口径 9.2 高台径 3.2 器高 5.5	丸碗、全面に施釉、高台畳付け斜めにケズリ。外面草花文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明 (胎土)N8/0(灰白)	1／2片 上層
17	肥前染付磁器	碗	口径 8.5 底径 3.8 器高 6.0	ロクロ成形、全面施釉、釉剥ぎ。外面に竹文、見込みに二重圏線と五弁花、口縁内側に四方襷文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)N8/0(灰白)	完品 上層
18	肥前染付磁器	碗	口径 9.6 高台径 3.6 器高 5.3	丸碗、口縁端外反。全面に施釉、高台畳付け斜めにケズリ。外面草花文、見込みに二重圏線と五弁花文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明、やや薄緑かかる (胎土)N8/0(灰白)	1/2片 上層
19	肥前染付磁器	碗	口径 11.2 高台径 6.6 現存高 5.0	ロクロ成形、全面施釉。外面に牡丹唐草文、見込みに花。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明、やや濁る (胎土)N8/0(灰白)	口縁1/4 上層
20	肥前染付磁器	碗	口径 11.8 高台径 4.5 器高 6.3	ロクロ成形、開き気味に立ちあがる。畳付け斜めに釉剥ぎ、腰部ケズリ。外面草花文、口縁内側、四方襷文、見込み二重圏線、五弁花、高台内に渦福文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明、やや薄緑かかる (胎土)N8/0(灰白)	口縁3/4欠 上層

第38図　P90上層出土遺物2 (1/3)

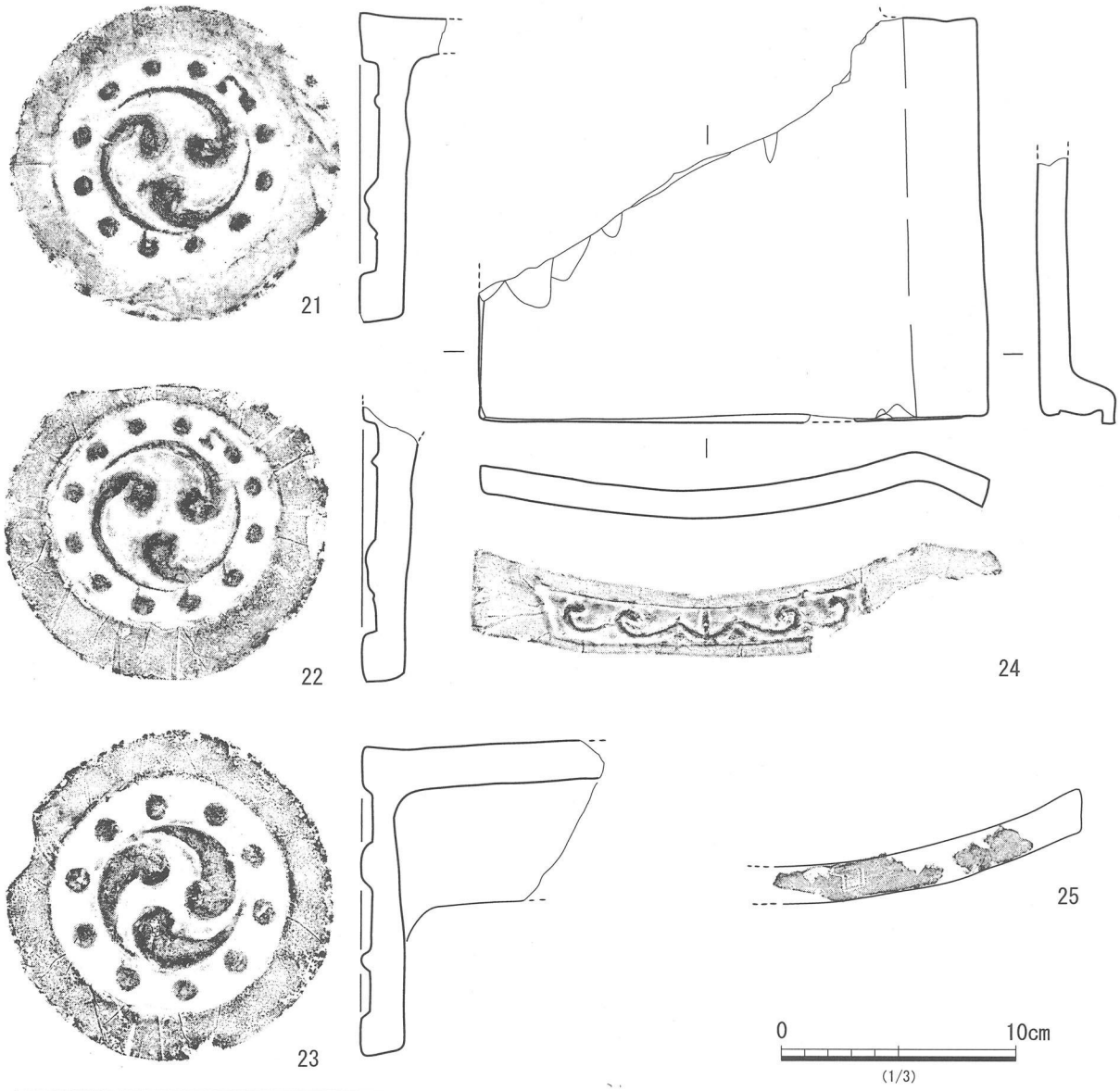
肥前染付磁器は、見込みに五弁花文(第38図17・18・20)や花木文様(19)を描く例、また内口縁に四方襷文を巡らす碗(20)がある。内外面に同類の草花文を全面に描く製品(14)など、文様にも様々なバリエーションが見られる。四方襷文が盛行するのは十八世紀中頃からという[14]。

第39図には上層出土の瓦類を掲載。瓦当文様のある桟瓦(24)が出土している。中心飾りから左右均整に唐草が伸びるが、線での表現となっている。また平瓦には、小口に菱形の刻印がみられる個体(25)もある。下層からも桟瓦片(第36図7)が出土している。21・22は珠文の一部に鍵形文を配する軒丸瓦で、珠文が巴の尾に接続する笵傷が一致しており、同笵とみられる。

P150(第40図)

道の西側で溝2の南側の屋敷地内、座標(-7、28.0)にある。一辺4m程の方形土坑。浅い土坑内の一部がさらに深く掘り下げられている。埋土は上層(1～5層)と下層(6～9層)に分け、遺物を取り上げている。上層からの出土物を図示しているが、図示以外でも、陶磁器類で数点、土師質土器でも数点である。下層でも数点の瓦片が出土しているだけである。

土師質皿(1)は回転ナデによる強い渦状の起伏が生じている。肥前陶器皿(2)は兜巾と砂目が特徴。陶器片(3)は小片で器形等は不案内であるが、緑灰色に発色した釉掛かり。丸瓦は内面にコビキB、布目痕が見られる。上下層からの瓦にはコビキBがみられるなど特徴は同一である。



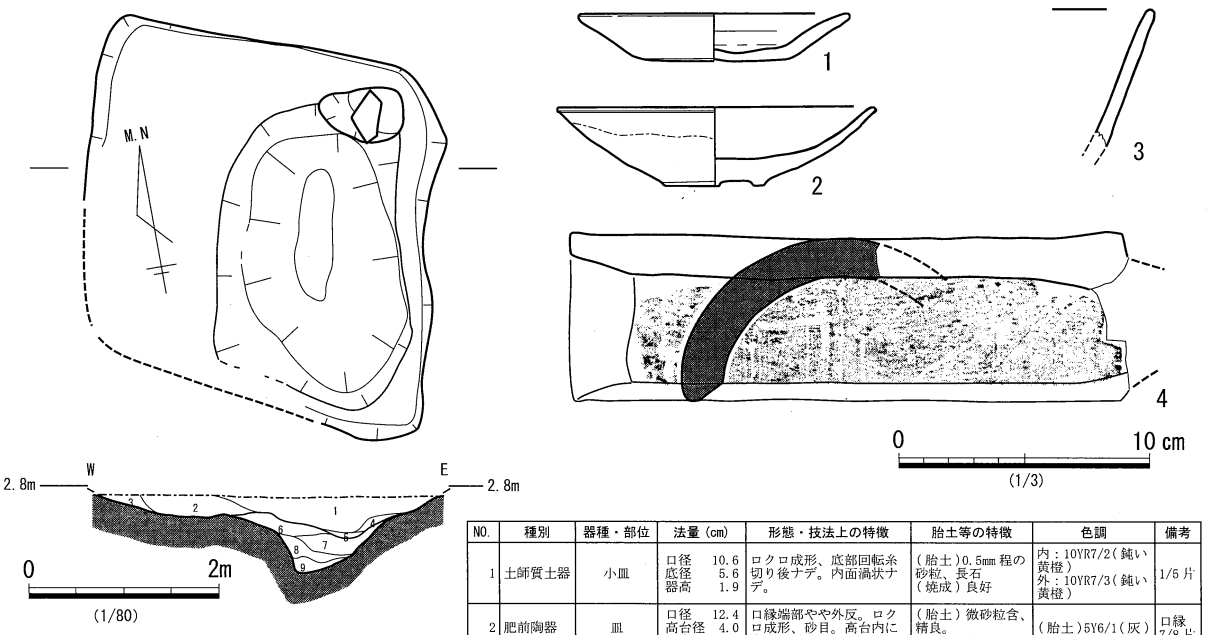
NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
20	瓦	軒丸瓦 瓦当	瓦当径　13.2	左巻三巴、珠文12、内１鍵文。珠文に笵傷３箇所。	（胎土）長石、砂礫含 （焼成）良	表：N3/0（暗灰） 裏：7.5Y7/1（灰白）	上層
21	瓦	軒丸瓦 瓦当	瓦当径　13.2	左巻三巴、珠文12、内１鍵文。珠文に笵傷３箇所。20と同笵。	（胎土）長石、砂礫含 （焼成）良	表：N4/0（灰） 裏：N5/0（灰） 芯：N4/0（灰）	上層
23	瓦	軒丸瓦 瓦当	瓦当径　13.3	左巻三巴、珠文10。コビキB	（胎土）長石、砂礫含 （焼成）良	表：N5/0（灰） 裏：N5/0（灰） 芯：N4/0（灰）	上層
24	瓦	軒桟瓦	長さ　21.8 幅　17.5 厚さ　1.3	ナデ調整 文様は均整唐草文、中心宝珠が錨形。	（胎土）長石、微砂含。 （焼成）良	表：N6/0（灰） 裏：N5/0（灰）	一部欠損 上層
25	瓦	平瓦	現存長　13.8 現存幅　15.0 厚さ　1.7	広端面に菱形刻印あり。表裏ナデ調整。コビキB痕あり。	（胎土）長石、砂礫含 （焼成）良	表：7.5Y7/1（灰白） 裏：N4/0（灰）	1/4片 上層

第39図　P90上層出土遺物3（1/3）

出土物が少なく、遺構年代は不確定であるが、肥前陶器皿(2)の十七世紀代より新しい年代の資料は見あたらない。

P164（第41･42図）

座標(-14、34)にある幅1.5m、長さは調査区外に延びるが、約4m程の長円形の土坑とみられる。道状遺構の石列の下方から検出された。土坑埋土は3層に分層できる。2層上半から大量の木端と板端切れが出土し、埋土上面に敷かれたような印象であった。1は造成土、埋め土の落ち込み層であろう。2は炭混じりの粘質土層。3は圧縮されて薄層であるが、純炭層である。2･3出土の遺物を下層として取



1　暗褐色粗砂（円礫・バイラン土多く含む）
2　淡褐灰色粗砂（小礫・バイラン土含む）
3　褐灰色細砂
4　暗褐灰色粗砂
5　暗黄褐色細砂
6　灰褐色細砂
7　淡灰褐色シルト
8　灰色砂質土
9　淡灰色砂質土

NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	口径　10.6 底径　5.6 器高　1.9	ロクロ成形、底部回転糸切り後ナデ。内面渦状ナデ。	（胎土）0.5mm 程の砂粒、長石 （焼成）良好	内：10YR7/2（鈍い黄橙） 外：10YR7/3（鈍い黄橙）	1/5 片
2	肥前陶器	皿	口径　12.4 高台径　4.0 器高　3.2	口縁端部やや外反。ロクロ成形、砂目。高台内に兜巾、露胎。	（胎土）微砂粒含、精良。 （焼成）良好。	（胎土）5Y6/1（灰）	口縁 7/8 片
3	陶器	碗 口縁部	－	緑灰色に発色。	（胎土）微砂粒含、精良 （焼成）良好	（釉）5G6/1（緑灰）	小片
4	瓦	丸瓦	現存長 22.1 現存幅　7.8 厚さ　1.5	コビキB、布目、ナデ調整	（胎土）長石、雲母、砂粒 （焼成）良	内外：2.5Y5/1（黄灰） 芯：N5/0（灰）	玉縁欠

第40図　P150（1/80）と出土遺物（1/3）

り上げた。埋土の粘性が強く、他の土坑と比べて木質の保存が良好で、木製品の出土も顕著であった。

出土遺物には、木材片の他に、土師質土器皿、砥石、硯ミニチュア、肥前陶磁器、備前擂鉢、獣骨片、鉄釘等が出土している。量は少なく、木片を除外するとコンテナ1箱にも満たない。

第41図は下層出土。1は長さ24cm程の長形板材である。当初、木釘孔が貫通しており、片側にタガ様の締めた痕跡が観察できる。表に「新太郎　荷物」裏に「□□（和気）高野武介」行をかえて「中内仁右正門殿」と読める墨書[15]が書かれていた。荷札として用いられていたものであろうか。2は円形板であるが、曲物の底か。その他の木製品として差歯下駄の台座(4)と差歯(3)が出土している。先端の鼻緒部分に、使用による指圧痕がみられる。台と歯は規格的にはちょうど良いが、同一下駄の部材かはわからない。なお、後枘穴に差歯の枘が残存しており、歯が折れて放棄されたのであろうか。

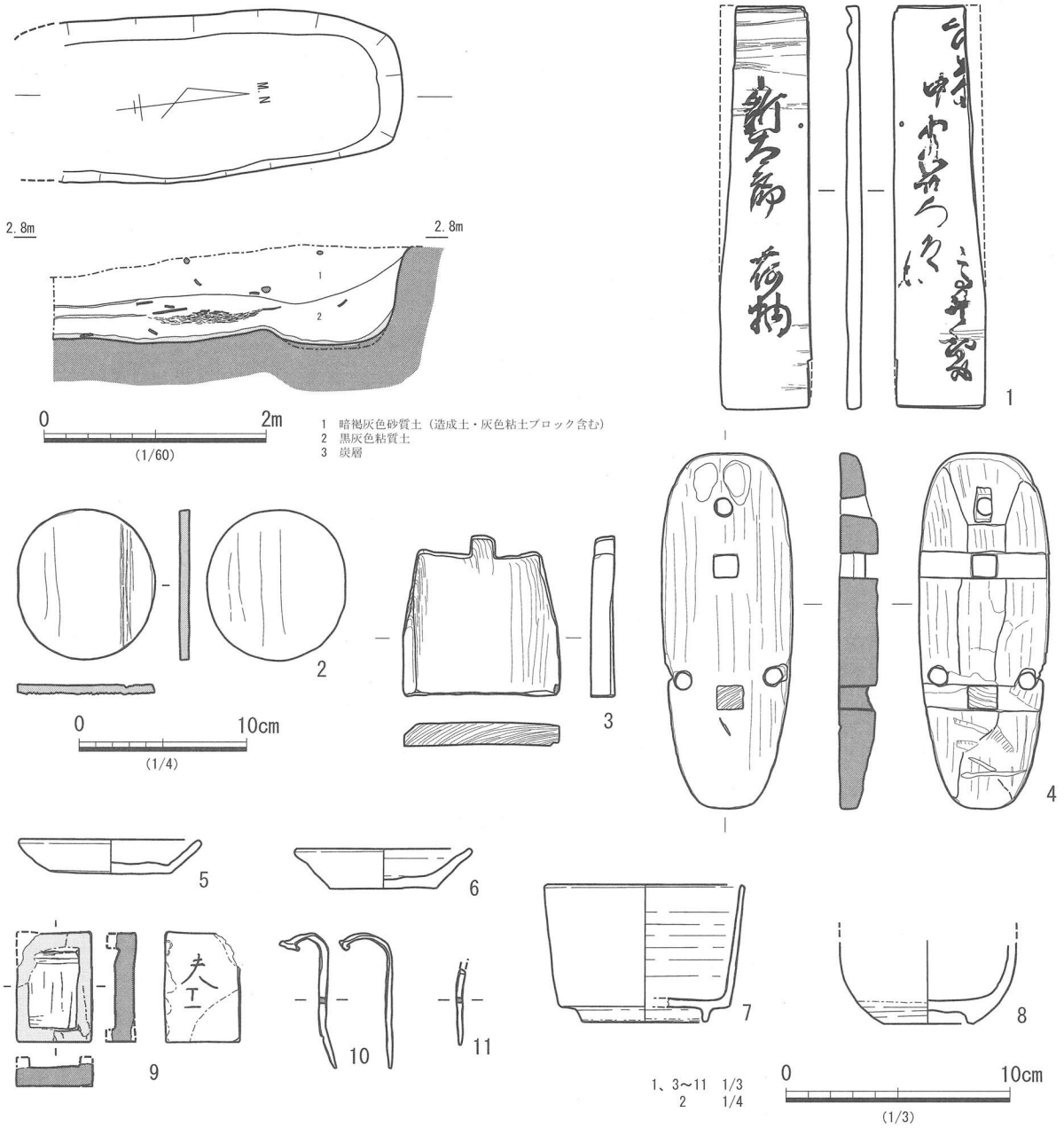
白磁碗(7)は円筒形の特徴ある碗であるが、高台畳付けに砂目の痕跡がある。また、漆と思われる皮膜が付着しており、「漆継ぎ」跡の可能性がある。この碗と同形品はP198でも出土している。8は瓶の底部であるが、肉厚の底部を削り込んで高台をつくり出している、外観は高台とはわからない。

9は小形石製硯。粘板岩製で、一部欠損しているが細部まで作り込んだ精巧品。砥石と同類の石材であるので、砥石の再利用か。裏に文字が印刻されている。複数の文字か単字かの判読は難しいが、「夫」・「十」か「丁」・「一」と読める。あるいは「大工」はたまた「奉」と読むべきなのかもしれない。

鉄釘(10・11)は3mmの角柱タイプ。頭をたたいて薄く延ばし折り込んでいる。当調査区で出土している釘は、ほとんどこのタイプである。

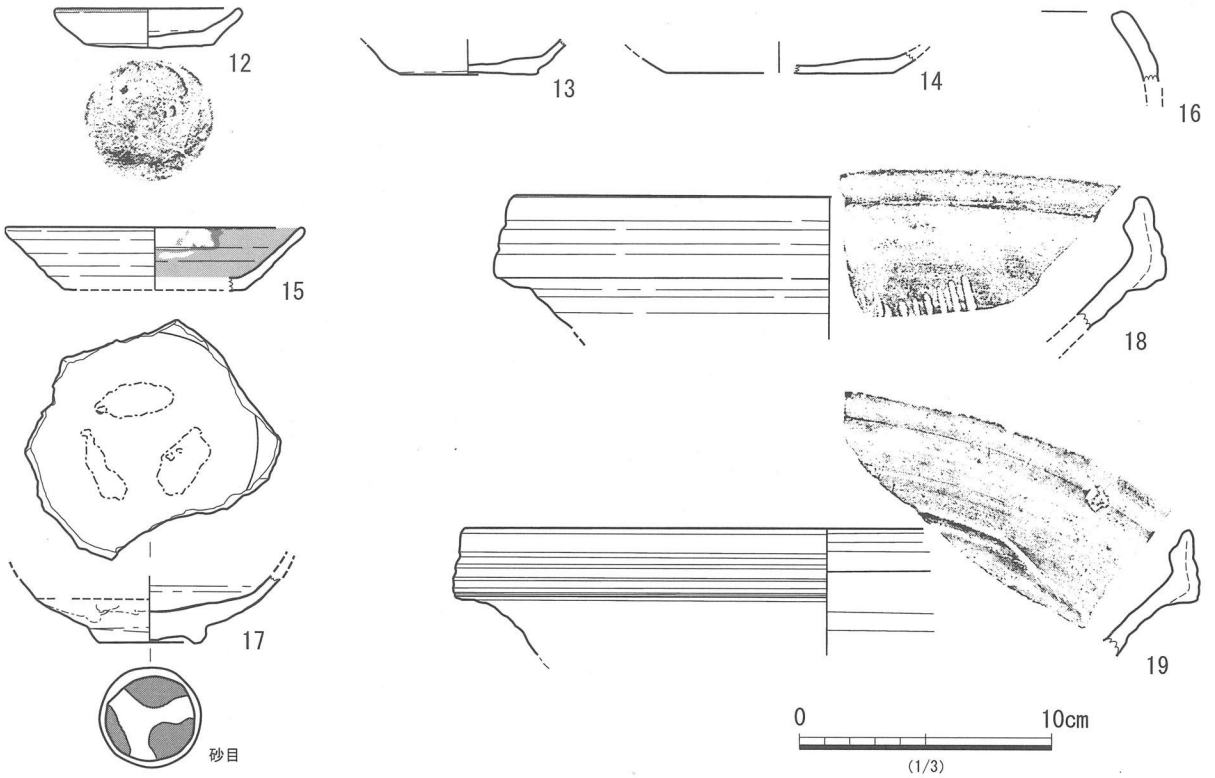
第42図は上層からの出土物。内面に油煤が顕著に付着した土師質皿(15)や高台内や見込みに砂が付着した肥前陶器碗が出土している。この碗の底部には兜巾様の突起が観察できる。備前擂鉢(18・19)は、口縁部が上方に拡張、立ちあがり、さらに内面端部が強くユビナデされ凹線が巡る。摺り目ははっきり施されているが密ではないという共通の特徴がある。

道状遺構の整備が、前述のとおり1830年ごろのこととすれば、このP164土坑は、道の改修に伴い掘られたか、それ以前の遺構となる。



NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	木製品	板材	高さ　24.1 最大巾　5.3 厚さ　0.8	桶部材の一部か、片端に凹みが形成、所々にも横筋が観察。側に小孔（木釘？）がうがたれている。 墨書「新太郎荷物」「和気カ高野武介」「中内仁右正門殿」			下層
2	木製品	円形板	長径　9.1 短径　8.1 厚さ　0.6	周辺を面取りしながら円形に加工、柾目。柄杓様の底板か			下層
3	木製品	下駄歯	歯長　8.5 最大巾　9.2 厚さ　1.4	下駄の差し歯、ほぞが突出している。台に接する側はU形。			下層
4	木製品	下駄	最大長　21.3 最大幅　7.7 厚さ　2.3	丸下駄、前がやや幅広く後が細い。歯の装着部に溝を彫りほぞ孔を穿つ。指部分がすれている。柾目。			下層
5	土師質土器	小皿	口径　7.9 底径　5.3 器高　1.5	円形底板に体部を貼り付け、ロクロ回転成形。底部糸切り、二重に糸切り痕あり。	（胎土）褐色微砂粒含、良。 （焼成）良好	内：7.5YR8/4（浅黄橙） 外：7.5YR7/4（鈍い橙）	口縁1/2欠 下層
6	土師質土器	小皿	口径　7.7 底径　4.8 器高　1.8	底部回転糸切り、内面渦状ナデ、口縁端部うすく収める。	（胎土）褐色微砂粒含、良。 （焼成）良好	内外：2.5Y6/3（鈍い黄）	口縁1/4欠 下層
7	肥前磁器	碗	口径　8.7 高台径　5.6 器高　7.2	ロクロ成形、釉剥ぎ、砂痕跡、漆接着痕あり。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、やや青味がかる （胎土）N8/0（灰白）	1/2片 下層
8	肥前染付磁器	瓶 底部	高台径　4.0 現存高　3.7	ロクロ成形、厚手の底部をケズリ込み、高台風に仕上げ。外面もケズリで調整。底部露胎。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明、やや青緑かかる （胎土）N8/0（灰白）	底部完 下層
9	石製品	硯	縦　5.0 横　3.4 厚さ　8.5 重さ　29.3g	小型ながら池、陸を削りだしている。裏面砥石のような凹面を形成。	粘板岩		砥石の再利用か？ 下層
10	鉄製品	釘	長さ　8.0 厚さ　0.3	重さ2.9g。角釘頭部平たく打出し曲げる			下層
11	鉄製品	釘	現存長　3.3 厚さ　0.2	重さ1.1g			下層

第41図　P164（1/60）と下層出土遺物（1/3・1/4）



NO.	種別	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
12	土師質土器	小皿	口径 7.2 底径 5.1 高さ 1.6	底部回転糸切り、後板ナデ。内面渦状のナデ。口縁部にスス付着。	(胎土)褐色微砂粒含、良。 (焼成)良好	内:10YR7/2(鈍い黄橙) 外:2.5Y7/3(浅黄)	口縁1/3欠 上層
13	土師質土器	皿	底径 5.4 現存高 1.1	底部回転糸切り、内面渦状ナデ。	(胎土)褐色微砂粒含、良。 (焼成)良	内外:10YR7/2(鈍い黄橙)	底部 上層
14	土師質土器	皿	底径 9.0 現存高 0.9	底部回転糸切り、板圧痕。	(胎土)褐色微砂粒含、良。 (焼成)良	内外:2.5Y8/2(灰白) 芯:N4/0(灰)	底部1/2片 上層
15	土師質土器	深皿	口径 11.7 底径 7.2 高さ 3.5	ロクロ成形、内外面強いヨコナデ、内面に油煤付着。	(胎土)0.5mm程の褐色微砂粒含、良。 (焼成)良	内外:2.5Y7/3(浅黄)	口縁1/8片 上層
16	土師質土器	塙・口縁部	−	口縁内外スス付着。	(胎土)0.5mm程、砂粒含、良。 (焼成)良	(胎土)5Y6/1(灰)	細片 上層
17	肥前陶器	碗	高台径 4.1 現存高 3.5	ロクロ成形、高台内兜巾、砂目跡、露胎。見込み砂目。	(胎土)微砂粒含、良 (焼成)良好	(釉)灰釉 (胎土)10YR7/2(にぶい黄橙)	底部完 上層
18	備前焼	擂鉢	口径 24.8 残存高 5.3	ロクロ調整、口縁部下方にやや張り出し、重ね焼きの痕跡。口縁強いナデ、内側に稜を形成、口縁端部3～4条の凹線。摺り目、間隔が大きく太い。	(胎土)0.5～2mm程長石、砂粒含、良。 (焼成)良好	内外:7.5YR5/2(灰褐)	口縁1/8片 上層
19	備前焼	擂鉢	口径 28.7 残存高 5.0	ロクロ調整、口縁部下方にやや張り出し、重ね焼きの痕跡。口縁強いナデ、内側に稜を形成、口縁端部2～3条の凹線。	(胎土)0.5～1mm程長石、砂粒含、良。 (焼成)良好	内:10R4/3(赤褐) 外:10Y4/2(灰赤)	口縁1/6片 上層

第42図　P164上層出土遺物(1/3)

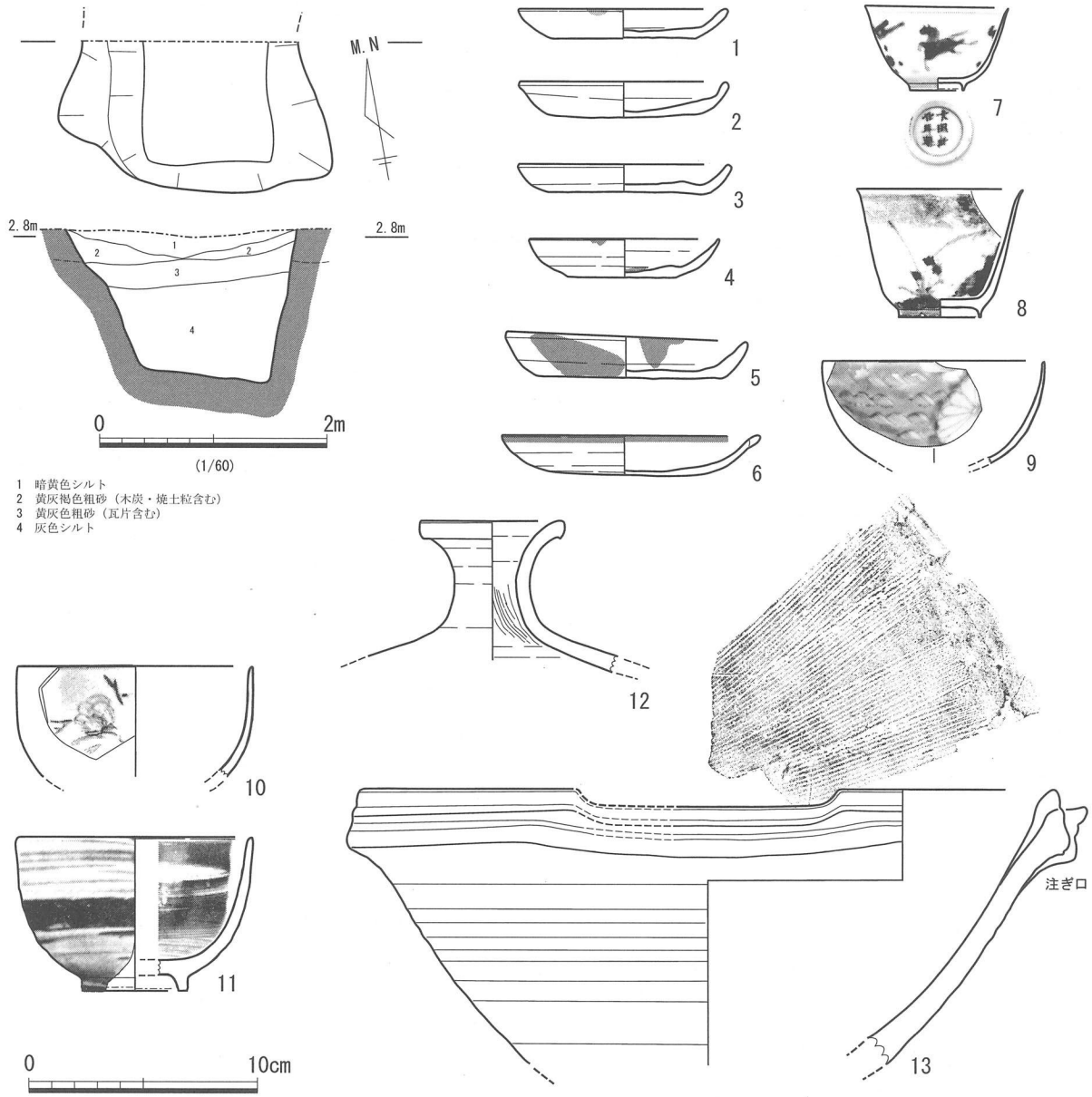
P184(第43図)

座標(-0.0、44.6)にあり、北半は調査区外に連なる幅2m、深さ1.2m程の土坑。埋土の状況も他の廃棄土坑と異なる。遺物はコンテナ1箱弱分とそれほど多くないが、土師質土器や備前焼徳利・擂鉢、肥前系陶磁器碗・猪口や赤絵片などが出土している。肥前磁器が10点程に対し、陶器、備前が同程度、鍋類は関西系でその半分程度の数量である。一方、土師質土器の小皿類はまとまって廃棄されたようでやや多い。灯芯痕、煤が付着している例(1・5)もある。口縁部に1ヶ所粘土を貼付した「摘み」がある灯明皿(6)、徳利(12)、擂鉢は備前焼。摺り目が密になり、口縁端部の拡張が弱く、胴部外面半ばまでケズリ調整がおよぶ。注ぎ口は幅広く浅い特徴がある。近世Ⅲ期に属する。遺物構成の年代観からすると、遡っても十八世紀中葉以降に埋まった土坑である。

P192(第44図)

P184の1m南、座標(-2.4、44.2)にある。長径1.6m、短径1m、深さ50cm程の土坑。埋土は3つに分層、全て粗砂で構成されており廃棄土坑と異なる。最下層の3が、黒褐色を呈し遺物が含まれていた。

出土物は少ない。土師質土器は数個体、陶器は肥前産のほか数点、志野小片が1点、備前2点、炮烙は2個体(4・5)、銅製品(1)と刀子(2)が出土。銅製品(1)は、螺旋状の削り込みがありネジ式になってい

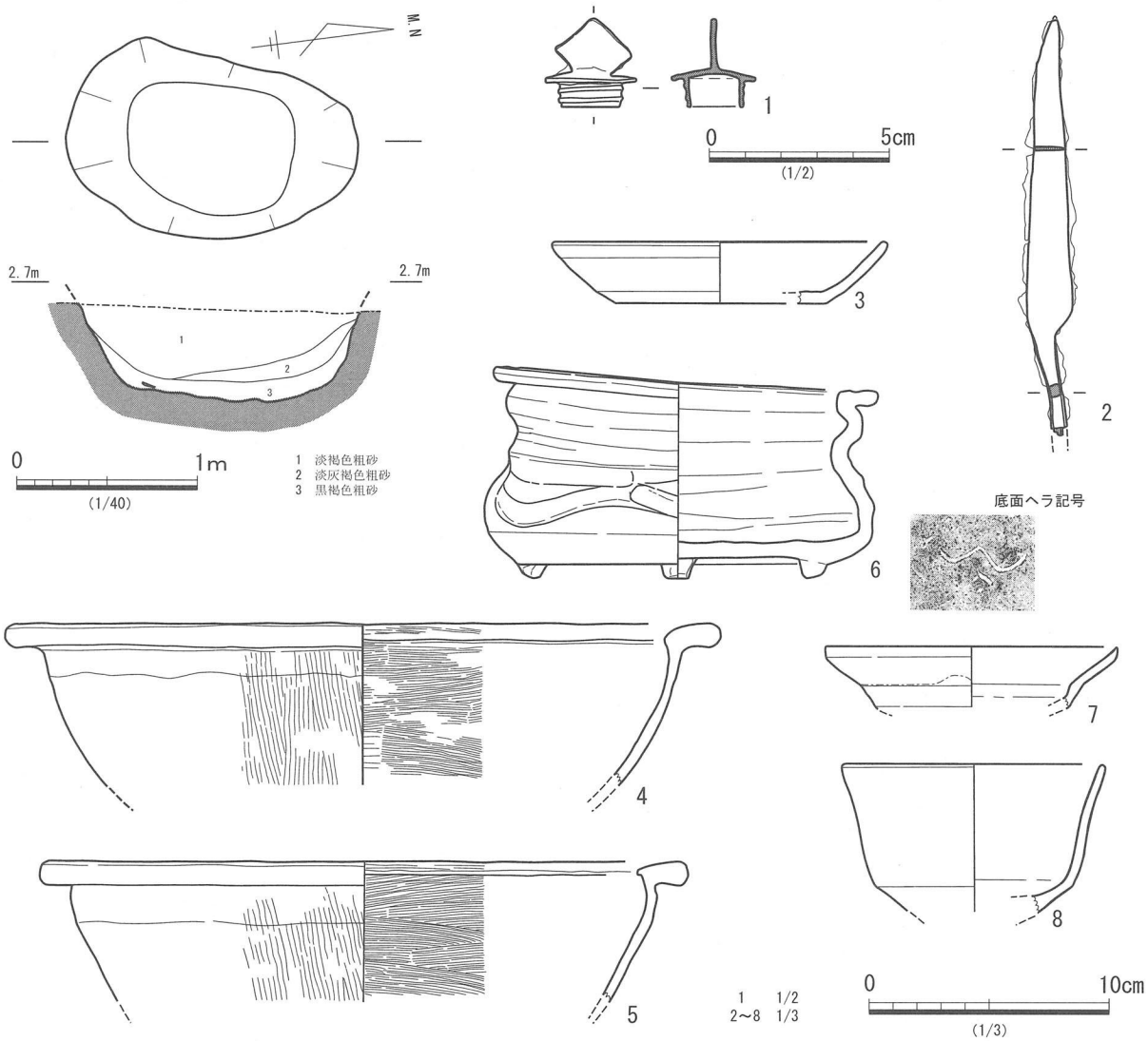


NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	口径 9.0 底径 6.2 器高 1.3	ロクロ調整、底部回転糸切り、板圧痕。内底面渦状のナデ。口縁部に灯芯痕、スス付着。	（胎土）0.5mm 代以下の砂粒多 （焼成）良	内：2.5Y8/2（灰白） 外：2.5Y8/1（灰白）	完品
2	土師質土器	小皿	口径 9.0 底径 6.5 器高 1.6	ロクロ調整、底部回転糸切り、ナデ、内底面凹凸、ナデ。	（胎土）0.5mm 代以下の砂粒多 （焼成）良	内外：10YR8/2（灰白）	完品
3	土師質土器	小皿	口径 9.1 底径 6.2 器高 1.3	底部回転糸切り、周縁横ナデ。内底面回転ナデ、底面との接合部は強いヨコナデ。	（胎土）0. 5mm 代以下の砂粒多 （焼成）良	内外：10YR8/3（浅黄橙）	ほぼ完品
4	土師質土器	小皿	口径 8.2 底径 4.7 器高 1.7	底部回転糸切り、腰部に圧痕。内底面回転ナデ、底面との接合部は強いヨコナデ。	（胎土）微砂粒多 （焼成）良	内外：7.5YR6/4（鈍い橙）	口縁 2/3 欠
5	土師質土器	皿	口径 10.4 底径 8.1 器高 2.1	底部回転糸切り、板圧痕。内外面スス付着。やや深めの器形。	（胎土）微砂粒含 （焼成）良	内：10YR8/2（灰白） 外：10YR8/3（浅黄橙）	完品
6	備前焼	灯明皿	口径 10.8 底径 6.6 器高 1.8	ロクロ成形、底面ヘラケズリ、内面回転ナデ、口縁部スス付着。摘み付。	（胎土）長石粒含、精良 （焼成）良好	内：2.5YR5/3（鈍い赤褐） 外：2.5YR5/4（鈍い赤褐）	ほぼ完品
7	肥前染付磁器	小杯	口径 6.3 前宣径 2.3 器高 3.7	ロクロ成形。口縁やや外反。高台内に銘「大明成化年製」。外面に馬３頭。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 1/3 欠
8	肥前染付磁器	小杯	口径 7.2 前宣径 3.4 器高 5.7	ロクロ成形、口縁端く字に外反。口縁内圏線と銘「大明年製」。外面水仙、岩山、雁。内面にも折れ枝？	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 1/3 欠
9	肥前染付磁器	碗	口径 9.6 残存高 4.5	丸碗、外面菊花文と波。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/0（灰白）	小片
10	京焼系陶器	碗	口径 10.2 残存高 4.9	丸碗、外面白濁釉の上から梅花？と枝、梅花は赤絵。	（胎土）微粒含 （焼成）良好	（釉）白濁釉 （胎土）2.5Y8/4（淡黄）	小片
11	肥前陶器	碗	口径 10.2 前宣径 4.6 器高 5.8	ロクロ成形、白化粧土の刷毛目文、高台畳付無釉。	（胎土）長石粒含、精良 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）2.5Y8/5（淡黄）	1/8 片
12	備前焼	徳利	口径 6.2 残存高 6.6	ロクロ成形、首内面絞り、肩にごま釉。	（胎土）黒色粒多含 （焼成）良好	内：5YR4/2（灰褐） 外：10R3/4（暗赤）	口縁部 1/2 片
13	備前焼	擂鉢	口径 30.2 残存高 12.2	ロクロ成形、口縁部２条の凹線、内面、12 条 /2.0 cm一単位で櫛目蜜。巾広の注ぎ口。口縁部下に重ね焼の痕跡。	（胎土）1mm 大の砂粒多 （焼成）良好	内：10R4/2（灰赤） 外：10R4/3（赤褐）	1/8 片

第43図　P184（1/60）と出土遺物（1/3）

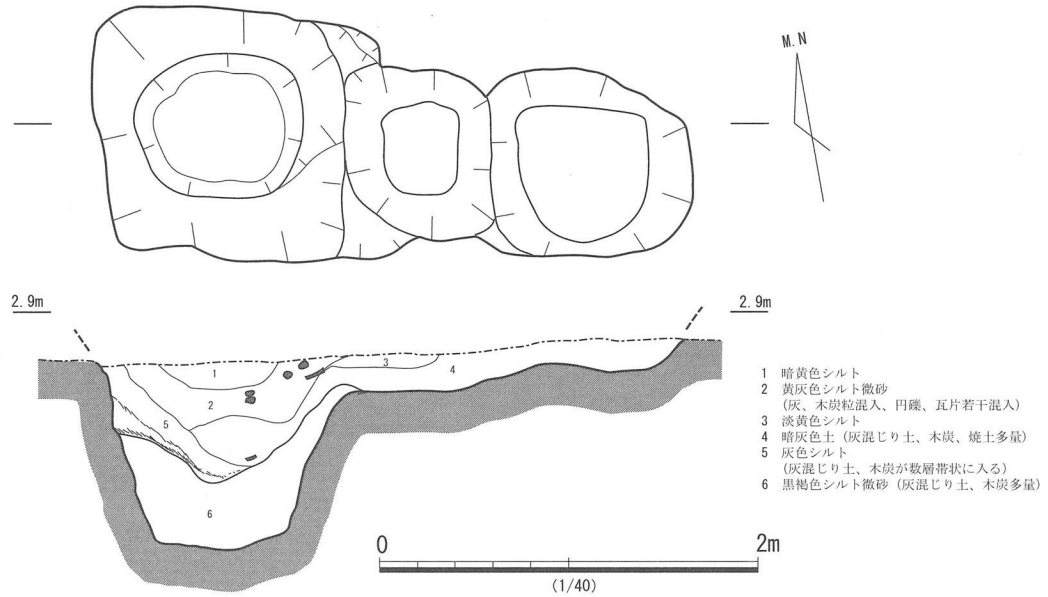
る。摘みがついた栓であろう。鉄製品(2)は刀子とした。背が内に湾曲し、刃は直刃である。炮烙(4・5)は、口縁が外に屈曲し、深身タイプである。径7㎜程の孔を穿った内耳部分の破片も出土している。十八世紀前半ごろに位置づけられる。6は備前焼の建水。外底面にヘラ記号「W」が刻まれている。伊部南大窯周辺西2号窯[16]から類似の建水がみられる。大窯で焼成された、十七世紀第1四半期ごろの製品であろう。肥前陶器皿(7)は口縁部が屈曲し大きく開く。口唇部は丁寧に調整され稜をもって収められている。十八世紀代の製品。

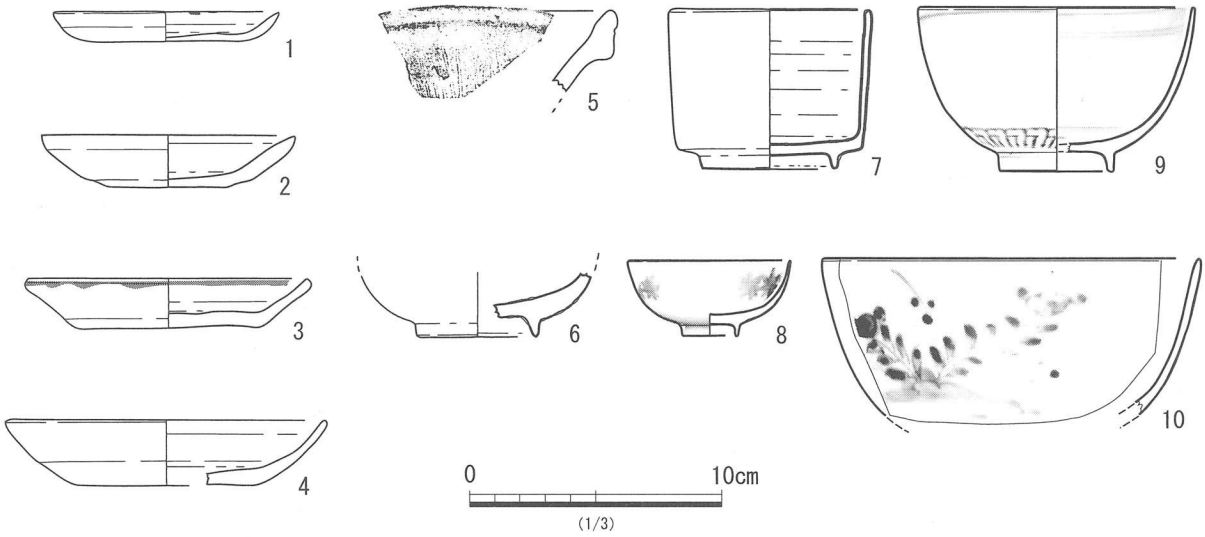
P192土坑はゴミを一括廃棄するために掘削された土坑ではなく、日常的なゴミ処理用に掘られた土坑であろう。この周辺は、P184・P219・P230など小規模な土坑が配置されている。出土品も大型土坑の



NO.	種別	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	銅製品	栓	長さ　2.3 幅　2.5	筒・笠と摘みからなる。筒部に螺旋状の削り、摘みは菱形。重さ69.2g			
2	鉄製品	刀子	現存長 17.4 幅　1.9 厚さ　1.5	茎部と刃部。先端がやや細くなる。重さ　28.32g			
3	土師質土器	皿	口径　13.7 底径　8.8 器高　2.6	ロクロ成形、底部回転糸切り。	(胎土)微砂、褐色細粒含、精良。 (焼成)良好	内外：7.5YR8/4(浅黄橙)	1/6片
4	土師質土器	炮烙	口径　29.8 残存高　6.8	く字に外反する口縁。外面粗い縦板目、内面横板目、口縁部ナデ。外面煤付着。	(胎土)0.5㎜大の長石、石英含 (焼成)良好	内：2.5Y4/1(黄灰) 外：2.5Y3/1(黒褐)	1/7片
5	土師質土器	炮烙	口径　27.0 残存高　5.9	口縁部貼り付け拡張、内耳部分か。外面圧痕、内面横板目、口縁部ナデ。外面煤付着。	(胎土)0.6㎜大の長石、石英含 (焼成)良好	内：5Y4/1(灰) 外：5Y3/1(オリーブ黒)	1/8片
6	備前焼	建水	口径　12.9 底径　11.4 器高　8.9	内外面ロクロナデ、口縁部く字に外反。胴部強いユビナデ、一条波状に巡る。所々ゴマ釉。底に小豆大の足4点。	(胎土)黒色粒多、精良。 (焼成)良好	内外：7.5R3/1(暗赤灰) 断：10R6/1(赤灰)	口縁一部欠損
7	肥前陶器	皿	口径　12.1 残存高　2.6	浅い皿部から大きく外に張り出す口縁。端部は鋭く収まる。高台は露胎。	(胎土)長石等微砂粒含 (焼成)良好	(釉)灰釉 (胎土)7.5YR7/4(にぶい橙)	口縁1/3片
8	陶器	碗	口径　10.6 残存高　6.2	腰部はケズリ、口縁部外に膨らむようにして収まる。	(胎土)長石、黒色微粒含、良好 (焼成)良好	(釉)灰釉 (胎土)N7/0(灰白)	1/3片

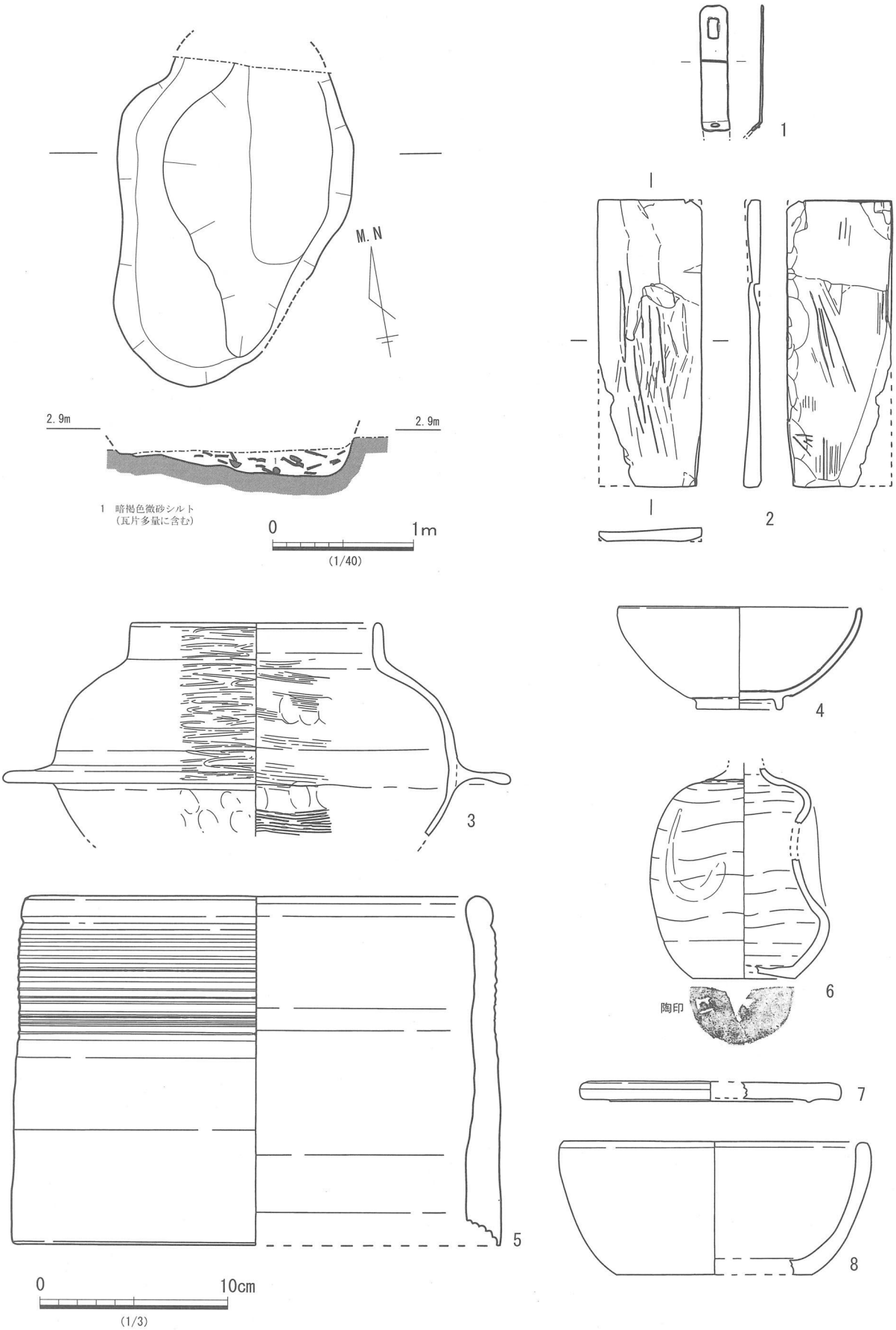
第44図　P192(1/40)と出土遺物(1/2・1/3)



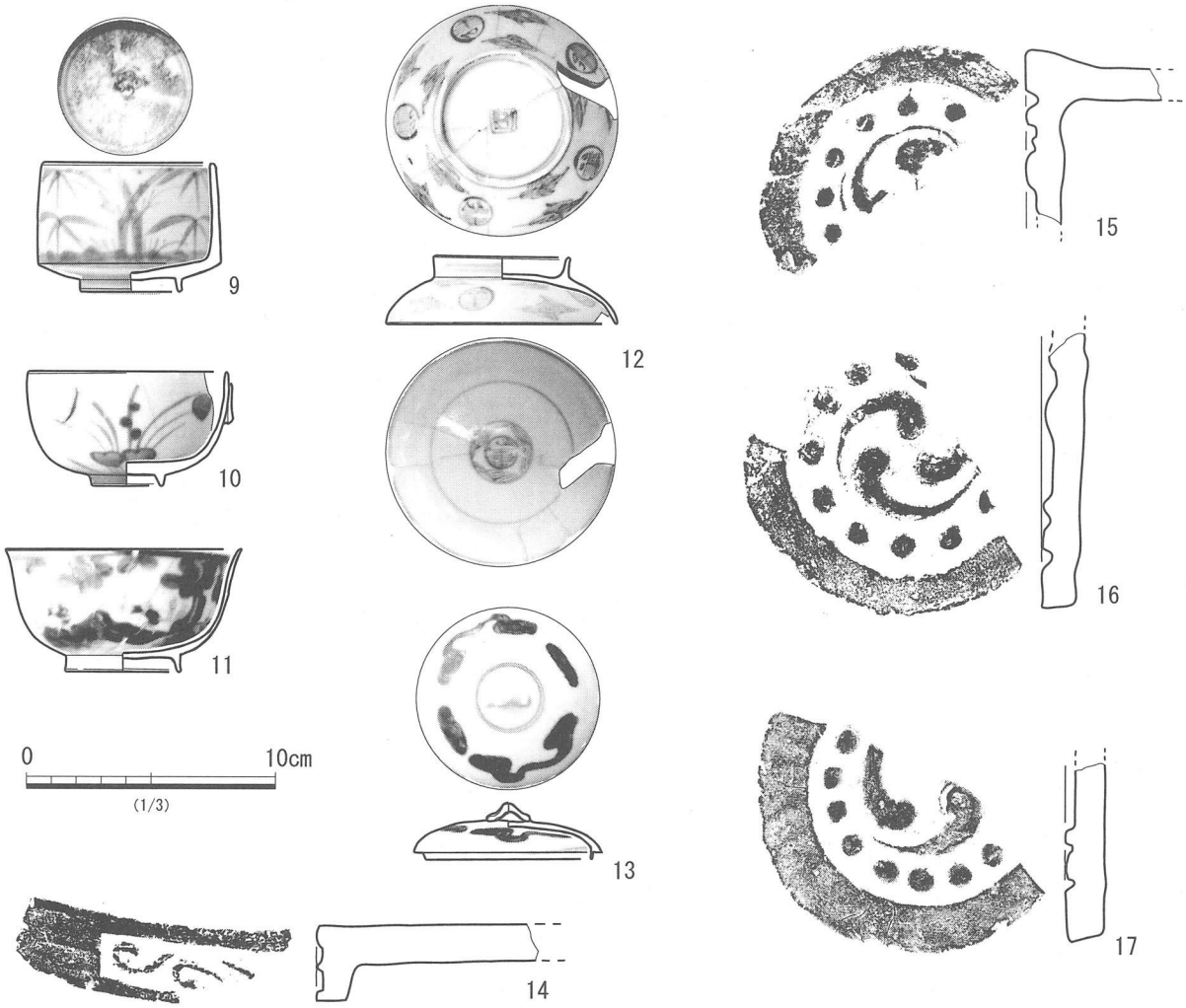


NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	口径　8.9 底径　5.9 器高　1.2	ロクロ成形、底部回転糸切り、板圧痕顕著口唇にスス付着。	（胎土）精良。 （焼成）良好	内外：10YR8/3（浅黄橙）	1/2 片
2	土師質土器	小皿	口径　10.1 底径　4.9 器高　2.1	底部回転糸切り、腰部強いヨコナデ、口縁内強いヨコナデ、凹面形成。内外全面油煤付着。	（胎土）精良。 （焼成）良好	内：10YR6/1（褐灰） 外：2.5Y7/1（灰白）	1/4 片
3	土師質土器	皿	口径　10.1 底径　7.2 器高　2.0	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面渦状のナデ。口唇部にスス付着。	（胎土）赤色粒多。 （焼成）良	内外：10YR8/3（浅黄橙）	1/3 片
4	土師質土器	皿	口径　17.7 底径　7.2 器高　2.6	腰部強いナデ、底部回転糸切り。	（胎土）微砂粒含、精良。白っぽい胎土。 （焼成）良	内外：2.5Y8/2（灰白）	1/4 片
5	備前焼	擂鉢	－	細く鋭い櫛目、口縁外２条沈線、内強いヨコナデ。	（胎土）長石、石英粒含 （焼成）良好	内外：2.5Y5/2（灰赤）	小片
6	肥前陶器	碗	高台径　4.6 現存高　2.7	全面釉、畳付き釉剥ぎ、内外白化粧土の刷毛目文。	（胎土）微砂粒含、精良 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）10YR6/2（灰黄褐）	小片
7	肥前磁器	碗	口径　7.9 高台径　5.2 器高　6.4	筒型碗、高台釉剥ぎ、底部兜巾痕跡。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 3/4 欠
8	肥前染付磁器	小杯	口径　6.4 高台径　2.1 器高　3.1	ロクロ成形、高台釉剥ぎ。外面三方に紅葉文。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 2/3 欠
9	肥前染付磁器	碗	口径　10.8 高台径　4.3 器高　6.6	丸味を持って立ちあがる体部。外面腰に連弁文、見込みに五弁花、高台内に花弁？文。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明 （胎土）N8/0（灰白）	1/3 片
10	肥前染付磁器	碗	口径　14.8 残存高　6.3	大振りの碗。外面に草花文。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明、やや青味がかる （胎土）N8/0（灰白）	1/4 片

第45図　P198（1/40）と出土遺物（1/3）



第46図　P199(1/40)と出土遺物1(1/3)



NO.	種別	器種・部位	法量（cm）	形態・技法上の特徴	胎土等の特徴	色調	備考
1	銅製品	調度金具	現存長 6.8 幅 1.1 厚さ 0.5	薄い板材、片端に 10.05 × 5.5mm の方形孔あり。先端に鉈様の材あり。 重さ 6.02g			
2	石製品	砥石	長さ 15.3 幅 5.5 厚さ 0.5	四周切断痕、両面使用面、表面は凹面を形成、裏面はそれほどでもない。鋭い擦痕。	粘板岩？		
3	土師質土器	羽釜	口径 13.2 最大径 27.0 現存高 11.5	羽粘土接合ヨコナデ、外面ミガキ横、内面板ナデ横、外面肩陽出の浮文、浮文部分は内面押圧痕あり、内面煤付着。	（胎土）0.5 ～ 1mm 大の長石含 （焼成）良好	内：5Y4/1（灰） 外：2.5Y4/2（暗灰黄）	上半 1/3 片
4	陶器	碗	口径 12.8 高台径 4.6 器高 5.5	ロクロ成形、内彎気味に立ちあがり、口縁部でさらに内傾。高台露胎、高台付根強いケズリ、化粧白土がたれている。	（胎土）1mm 大の長石，褐色粒多含 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）10YR8/3（浅黄橙）	口縁 1/2 欠
5	備前焼	匣鉢	口径 24.8 底径 26.0 器高 18.7	底板に粘土巻き上げ、ロクロ調整。内面ロクロナデ、外面下半ケズリ、上半ナデ、沈線文 15 条。	（胎土）0.5 ー 1mm の長石・石英を多く含む。 （焼成）良好	内：5Y5/1（灰） 外：10YR5/1（褐灰）	口縁部 1/3 片 胴部 1/8 片
6	備前焼	徳利	最大径 9.0 底径 5.4 現存高 11.3	ロクロ成形、底部やや凹み、陶印「上1」あり。胴部三方にヘラで孤描き押圧。	（胎土）微差粒含、精良 （焼成）良好	内：5YR5/4（鈍い赤褐） 外：7.5YR5/4（鈍い褐）	1/2 片
7	備前焼	蓋	口径 13.9 器高 1.1	円板をロクロ成形、ナデ調整。サヤ転用。	（胎土）0.5 ー 1mm の長石・石英を多く含む。粗い。 （焼成）良好	内：2.5YR6/6（橙） 外：2.5YR5/6（明赤褐）	口縁部 1/4 片
8	備前焼	小鉢	口径 15.6 底径 10.4 器高 7.1	ロクロ成形、化粧土塗、外面に火襷あり。	（胎土）0.5mm 以下の長石含む、精良。 （焼成）良好	内外：2.5YR5/4（鈍い赤褐）	胴部 1/5 片
9	肥前染付磁器	碗	口径 6.6 高台径 4.0 器高 5.2	筒形碗、ロクロ成形。全面釉、畳付釉剥ぎ。外面竹林文。見込み五弁花文の変形、器壁厚い。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/（灰白）	完品
10	肥前染付磁器	碗	口径 7.9 高台径 2.7 器高 3.7	丸碗、ロクロ成形、全面釉、畳付釉剥ぎ。外面草花文。他製品の融着あり。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/0（灰白）	口縁 1/3 欠
11	肥前染付磁器	碗	口径 9.4 高台径 4.5 器高 5.0	端反り形碗。ロクロ成形、全面釉、畳付釉剥ぎ。外面人物風景画。見込みに草花文。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉 （胎土）N8/0（灰白）	1/2 片
12	肥前染付磁器	蓋	口径 9.2 摘みロ径 5.5 器高 2.8	外面丸枠に壽、見込みにも丸枠に壽と草文。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、 （胎土）N8/0（灰白）	ほぼ完品
13	肥前染付磁器	蓋	口径 6.7 最大径 7.5 器高 2.3	ほぼ完形、反りあり、紐状摘み、外面雲文、文様色彩 7.5GY4/1（暗緑色）。	（胎土）陶石 （焼成）良好	（釉）透明釉、 （胎土）N8/0（灰白）	完品
14	瓦	軒平瓦 瓦当		唐草文。	（胎土）微砂粒含 （焼成）良	内：5Y5/1（灰） 外：5Y6/1（灰）	
15	瓦	軒丸瓦 瓦当	周縁幅 1.6	右巻三巴。巴尾は細長く伸びる。中心部から外縁に笵傷あり。瓦当接合部ナデ。	（胎土）微砂粒含 （焼成）良	内：2.5Y6/1（黄灰） 外：2.5Y5/1（黄灰）	
16	瓦	軒丸瓦 瓦当	周縁幅 1.6	左巻三巴。巴尾は細長く伸びる。周縁強いナデ	（胎土）微砂粒、雲母含 （焼成）良	内外：2.5Y5/1（黄灰）	
17	瓦	軒丸瓦 瓦当	周縁幅 2.0	右巻三巴。巴頭は太く尾は短。キラコ塗布。周縁強いナデ	（胎土）微砂粒 （焼成）良	内外：5Y6/1（灰）	

第 47 図　P199 出土遺物 2（1/3）